

6198 特13

883

新形蒔繪護膜櫛

香雪散人著

新形蒔繪護膜櫛

春陽堂發行

088871-000-1

特13-883

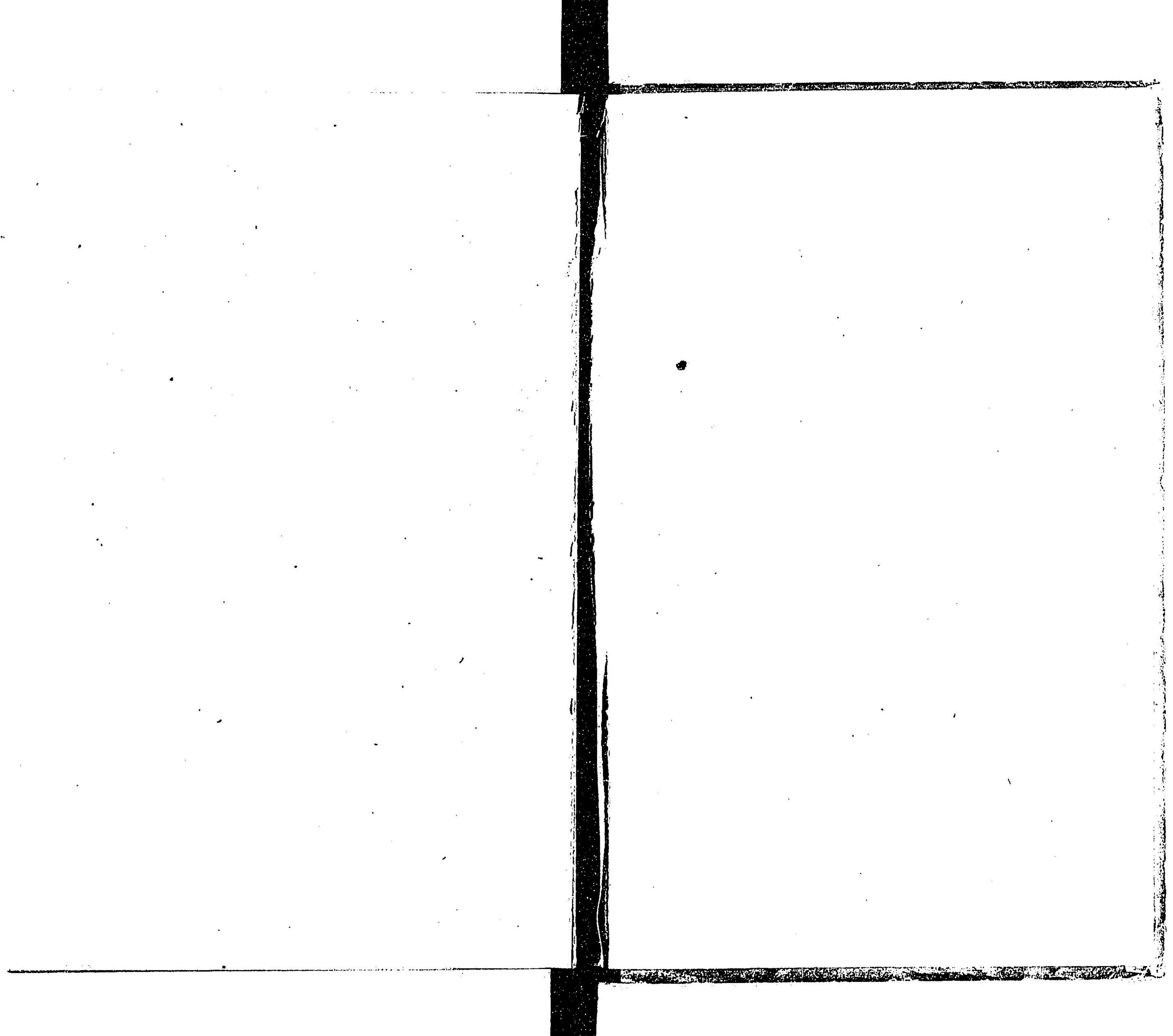
新形蒔繪護膜櫛

前田 香雪 / 著

M22

DBK-0054







小説萃編 第六卷 八十一
おのれ幼きころより歌舞伎狂言を見ることを好みて三食を忘るゝまでありしが近
来聊か思ふ處ありて絶て見ぬこととしたれば活劇とか改良とかいへる筋の更に見
も知らず況て今日の風俗人情を寫して脚本作るをべあどい毫え辨へねど新聞紙

上掲の事と望まるゝ委せ去年の古垢拭ひもあへず然らばとてかくさ
去年の夏某座 興行もしたれば其方よく見たまひしもあらめど春陽堂の主人が
護膜柿を作り出しと母させるよき節も無れど看客乃たやりよく

大綱の概略

香雪



梅まだ早き公園池の邊の床見世も運の月本六之進九星術の占ひの當る
お紀金の五面廿穂頼が惜一寸延れば廣小路女お車夫と七ツ子が親孝行と評判も優れて
高き富士横町待台茶座へ水鼠の民懸りし上州博多擬ひ織と岡目から見えぬ恭打の
詐偽師が不覺側中さらつて新堀端壽町の裏家住隣同士の古主と家承盡を忠義二百
圓さくく叶ぬ切迫の金小雪を侵して花岡の根岸の宅へ訪問れてねむ綾子の言號け雪
雄立る貞操と知らねば路で忠藏が財布の儘丹遺失たる金をお貞が授りしと悦ぶ甲斐

女人力車ひきお貞
寶の日本の召仕お貞
花岡の娘綾子
お貞の一子忠之助

同 おすみ
長家の唄おさく
同 おみち
同じく婆おかん
以下略之

淡州公園地懸茶屋の場

序幕

本舞堂一面の平舞堂止面上へよせて九尺屋根つき左右九柱の茶店丸窓のある茶壁上下とも杉皮竹の押ぶち打たる風雅あるしたみ是は續いて鐵砲垣の兩袖入り口茶釜をのせし臺上茶碗土瓶かどをむき此内折廻しの腰かけ前に床几二三脚並べ此下手は續けて五尺の間口四分板にて葺し屋根正面白水綿の暖簾これも算木占易といふ文字あり此與障子を建切り柱は九星神術占易真龍齋と記せし看版をかけ三方葎簀にて圍ひし床店上の方繪心は樹木の間より池を見せたる遠見の張もの下手も同じく公園の富士を見せたる書割の張も此處々に梅の立木は樹木折取るべからずの建札を建て日覆より梅の釣枝をわろし都て淡州公園地の体此處に三人思ひくゝの形装にて床几懸り居る茶店娘おそめ島田かつら好きの持へ前垂がけにて駒下駄ははき皆々へ茶を出して居る此見

小説粹錦 第六巻 八四

見輕業の鳴もの雙盃にて森あく
お漆 皆さんお茶を一ツおあがりおさいまし
イヤこいつの御馳走だナ
ト三人茶を飲みながらあたりを見まはし
此公園の一夜あけるとめつぼふ賑かよ成るが是といふも寒さが激く早く梅がさめた故だぜ
梅のさいいたが櫻はまだかいナと是ら續いて櫻がさきヤア向島から此公園の毎日の山だあら姉さんの大ますけさ子
寶は是う春さきは私じどもの書入れて一年の暮しをば此四五ヶ月の其間に締ざ溜るのでございまを
締ざといへば雷門で先刻見うけた女の車夫は服懸服引筒ツボで鳥渡見た處では男の様だがよく見るとなかく好い女ダ
夫お七ツかハツ位な男の子が跡押をして車引引居る處は中々男も及ばねへが多分女で締ざのの本夫に煩らはれ其日に困つて来るのだらふ
夫では女の車夫さむを貴君御覽じましたか

小説粹錦 第六巻 八五

△

おれは初めて見たおでいがないがアノセツカハツ許りの子供が中々感心を親孝行だ
といふ話だが那樣を女房を持た本夫はい、月日の下ふ産れたのだナア」

たしか那子のれとツさむといふは五年跡とかに悪い事をして懲役より夫から
満期で出ましたかまだ悪い心が直らないで家へとは寄附るを今で往方が知れ

ぬとやら實に可愛さうお身の上でございますよ」

夫デヤア本夫は有るのだが悪い奴で寄りつるす夫で車を挽て居るのか」

那樣を好い容貌を持って居て骨折業をほるよりか磨き揚げて見た日おは」

月に五圓や七圓の權妻にはさられる容貌お障り雇ひ母でもなればい、に」

イエ、舊は士族の果とやらで極堅い性であとして男の様を形で車は挽て居まし

ても獨で居る故入夫にあらふの妾おそれのと勤める人が有りまして未離縁状を

取らないうら女の操の破らぬと態と汚穢くして居るのも男除けだといふ評判で

ございます」

其奴は實にかむしむ股潜りだ」

股潜りよりは胎内潜り富士へ登つて景色でも見るふりをして女でも」

冷して日を暮し晚は廊へ裏馴染とぶつくらはせやう」

△ □ ○

△ □ ○

マア宜しいではございませむか」

長く居てへが女廻りて忙しいから又来るよ」

是は御挨拶でござりますね」

姉さむお茶代はあした一緒だよ」

イエまご此間にお預りがございませよ」

ドレお山は晴天と出懸やうか」

ト双盤より仕出し三人の下手へ這入る

茶屋娘おその仕出しの立し跡を取片付け

今日忙しので占易の叔父さむ一碌お茶も進まむだ叔父さむお茶でもおあひ

むるさひまし

ト下手の床店へ茶とやる詠への唄双盤より向ふより花岡の娘綾子束髪かつら官

員の娘好その持へにて靴を穿き同じく下女お松やはり束髪かつら好みの持へ駒下

駄より小さき風呂敷包と蝙蝠傘を持ち出て来る此跡より官員溝部軍次ふ々たる散

髪うつら羽織着流し駒下駄帽子洋杖を突き出て来り花道にて

其處へお出なさる花岡の令嬢でござらぬか

軍次

綾子

ホシニ貴若の溝部さま

お松

どちらへお出なされました

軍

僕も今日休暇ゆゑ此公園をぶらつきますが宜い折柄のお道連れこれら御同伴は

ふかす

イエ／＼今日の女子むりて些用事もござりまする

軍

イヤ是の又相替らざれ御挨拶何れともあれ向ふの茶店でゆるりと一吸やつてお出

おされい

ト右の唄にて皆々舞臺へ来る

その

是の入りつしやいましてアお嬢様此方へお懸なさいまし

軍

ト是母て皆々床几へゐるおその茶をど出す事あつて

お

イヤ令嬢綾子どの母の毎度お美しいが今日の芝居御見物とても申を筋でござる

綾

イエ／＼芝居などてござりませぬ私しアノ

松

ト思を入れお松の引つとり

お

イエお嬢さまの今日の慈母さまの御命日ゆゑお墓へ御参詣でござりまする

小説年譜 第六巻 八九

軍

ハ、ア左様でござるう花岡氏の御菩提所にたしか青山墓地でござらぬか方角違

松

ひの此近傍へ何時御改葬なされましたナ

綾

アイ今日の親類のお寺参りも参りましたわいな

軍

トツンとしてすうぬといふ思入宜しくある

お

イヤお寺参りかお寺参でないかそんな事への構ぬがコレ綾子どの左程に僕を御

お

損斥との近頃お情ない儀でござるナ。と合方ふなり

軍

僕も元来御親父の花岡氏との同郷にて維新前より交り厚くソリヤえや令嬢との少

お

々年の相違致せど昨年僕も妻を失ひいまだ後妻を迎へぬもいつかや御親父と國墓

お

の折柄蹴れながら綾子どのを娶りさいと御所望せしソリヤお望なら差上げも致

お

さふが娘が何と申さふりかれ次第にて否やござらぬ娘が心を聞たうへ御返答を

お

致さふと仰つたの才、廿忘れも致さぬ七月初旬夫から最早半年餘り僕が口を

お

新様申してはチト自負ながら諸方より後妻を世話致す者も多ござりば夫を謝絶

お

りひや筋に綾子どのをハ慕ひ居るのハ下世話申を心中男コレ綾子どのナントよ

小説年譜 第六巻 八九

綾軍

い返事を聞せり下さるまいか
 不束な私しを夫程までと思召て下さりませるの有ぐたりのごさりませれといつる
 やも申上た通りアノ私し一の云号が
 ハテ其儀も無て承はつたが其云号と申をば此軍次も存居るも同藩の月本
 六之進の悴當時何れに居る事やら行方知れざる貧乏書生殊六之進の文政生れ
 にてイヤモウお話しなならぬ舊弊爺のまた悴の雪雄といふ生學問のうぬすべ
 り自由だとか改進だとか諺も分らぬ政黨呼のり新早々三里外へ退去させられ路
 頭迷ふ連中とやら灰に墮し承はつたがさすれば官途に於ける御親父の思召に
 叶ぬ者政黨など一關係の輩をナンて婿にとられやう強で縁組れたら夫夫を
 家計大の御不為先第一がかりみの不首尾それより年々少しふ々ても此軍次を婿
 とおし夫婦の固めをなさるるに両家の幸福互ひの立身直しをなすに緋の袴か西洋
 服で合乗馬車芝居の勿論もの見遊山いふあり次第なるも時の間古風を事と言ふ
 まに僕の語は随はるものの上分別でござらぬか
 ソリヤ夫程まで仰つて下さりませぬのにお嬢様もお悦びお側へ附て居りまする
 私しまでもお嬉しう存りますがアそこが合縁奇縁とべら

小説年表 第六巻

九〇 (以下次巻)



軍 綾 軍 松 綾 軍 綾 軍

夫ては僕を綾子どののふい

ハイ知何もあなたい虫が好まませぬといナア

何ぢや僕のお嬢ひトナ

夫ぢやよよつて私しは早う

ホんに先を急ぎまされをお免なされて下さりませ

ト綾子お松の外して上手へ行ふとするを引留め

お急ぎとあらば是非があるはお手間にとらせぬ万梅で鳥渡ひと口さし上やうから

綾子どのの同伴なされイ

ト綾子の手と取るを隔てよ

折角の御馳走でござりまされと待合を方もござりまする

お先へ御免下さいませ

ところを鳥渡

ト綾子の袖をとらへる

テモマアすぬぬ

ト袖を振拂ふお松入かはつて

松

サアお嬢さまお出なされませ

ト唄いなり綾子お松こなしあつて上手へ足早にツイと這入る

軍次お綾子お松の跡を見送り口惜しき思入あつて

イヤいま〜しい強情女だ〜

トいろ〜こなしある此處へ下手より花岡の下碑お鍋好みの持へ蝙蝠傘をもち

出て来り

モシ溝部さま又おはぢかれ被成ましたナ

トズツカリいふ

誰のと思へば花岡のお鍋で有つたか

ト兩人床几へよろしく懸る

お私しもお嬢さまのお供で一足先へ参りましたが懐ろ育ちの我儘もの夫にお附のお

松どむも中々の強情者でまから容易お事での貴君のお望み叶へる諱は参りませ

軍アノ体裁での中々以て綾子のウソといふまいが其處の汝の骨折で首尾よくまゐる

エ夫のゆくらも

小説幸徳 第七巻 八二

小説幸徳 第七巻 八三

鍋

アモシ

ト傍りへ思入あつてお鍋軍次へ何かさ〜やく軍次の莞爾うちゑきながら

そんなら此方が手引さして

無理往生はお手お入れよ

いやでも應でも僕が細君〇夫でこれるよ万梅で一杯やつて相談仕やう

イエ万梅より私しに北村の方が宜しうございます

それで其方の下戸と見えたナ

イエお汁粉の跡で一杯戴くのゝまた格別でございます

イヤハヤ忝れた泥坊上戸だ〜

ト前の唄双盤あり兩人捨せりふ母く上手へ這入跡茶屋娘おめこなし有つて

人が聞て居るのも構はせ年にも恥ぢアノマア美しいお嬢さまを口説とはむだを知

らないお人も有るもの〇夫の左様と今の間水を一杯汲で置ふ

ト下手床店お内へおし有つて

叔父さま鳥渡店をお頼み申します

トおそのめの手桶を提げ下手へ這入あ〜時の鐘にあり下手床見世の障子をあげる

此内士族月本六之進白髪の散髪切繼形にてまゝ居て
六之進辨天山のアノ鐘は最早四時あるか

ト合方あり

唯今是にて承はれば先刺通りし那娘の同藩花岡政義の娘とやらまつた一人は舊
藩にてハ人敷あらぬ足輕の溝部軍次と申す者維新の際兵隊に組入れられ奥羽の戦
争ありし比抜群の働さありて渠も今では官員に登庸されしと及聞しがイヤ年母も
恥ぬ好色もの花岡の娘母戀慕し何か下婢と申合せ手迄よでも致を様子

ト少し考へてまた氣をかへ

イヤ余人の身の上處でなく今も返濟致さねむ此身は係る彼の金子諸方へ依頼
は致し置けど何を申すも斯迄に零落果ては誰あつて用違兵者もなく是に殆ど
當惑致す今母も總領氏が參られなば何と返答致してよいやらハテ心配な事ども午
ヤナア

ト静なる頃又燈となり向ふより縣會議員總領正三郎散髪かつら帽子袴羽織あり

トて筆篋を提げ出て来り直ニ舞臺へ来り六之進を見て

夫も出さざるは月本氏でござらぬか

小説年鑑 第七巻 八日

小説年鑑 第七巻 八五

六正六正六正

職に貴殿は正三郎どの

只今お宅へ窺ひしが此公園へ御出張と承はり直様これへ參つてござる

夫ハ御足勞の儀でござりました先これへお懸けなされい
然らば暫時御免下されい

ト是に六之進ハ床見せより出て兩人とも床几に懸る

シテ御金策は如何でござるな

サ其儀ふ付て只今も心痛致し居つた處をこもとの御厚志にて度々延期もなし下さ
れたが何を申すも此爲躰金子調達仕る更に目途がござりませぬ

トギツと思入よていふ正三郎熱聞いて歎息のこなし

スリヤ調達は叶ひませぬとナ

ト詔への合方になり

今更申すも詮なけれど舊藩主より士族授産の補助として金貳万圓お下げにありし
其時貴殿ハ老輩として惣代を勤められ右の金子を資本とあし種々の工業に着手され
しが兎角に損益償はせ終に建たる工場と資金ハ其儘縣廳へ差出されて殘金は五百
圓宛年賦の上納一万余圓の上納して僅に残る五百圓は舊職納めらるべき答當時惣

六正六正六

代の佐々木氏も商法上よて損毛つゝた陰を懸して行方知れど左すれば連署の貴殿登人で上納すべしと上の命令餘儀なく請書は出さきされど何を申を現今の形勢所詮全額はむづうしからふと縣會議員をも勤め居れば此正三郎がお察し申し三百圓の御用だて跡貳百圓の如何様とも御都合あるやう先々月より度々お促がし申せしが調達すべき目途が無いとの今のお話し御道理にござれども警務より縣廳へ差出したる金子なれば取り直さず官金も同じ事調達出来ぬ其時ふ万一貴殿の罪とあり裁判沙汰と相成らば監守自盜一問はれやせむ夫が如何にも心痛ゆゑ今一應御勘考あつて何卒御調達下されよ明一日の出帆おれど明後日まで延引して吉左右お待申すでござらふ

ト思ひ入あつていふ

スリヤ貴殿より此上に今日日御猶豫をお聞届け下さるとナ

是と申すもそのとが浪費されたる金子ならぬを猶豫いたすも拙者が寸志とにいへ是が調ねれば

私しならぬ官金の事

此身を捨てよ

小説幸徳 第七巻 八六

小説幸徳 第七巻 八七

正六正六

イヤ此身の上よ係る事精々盡力致すでござらふ

左様ござらば六之進の明後朝まで旅宿よて此度御沙汰を相待ち申さふ

ト唄ふなり兩人思入あつて列れを告げ正三郎に向ふへ這入る六之進は正三郎の跡をジツト見送りてホツト息を吐き思入あつて

總積どのが舊友として那程までに仁慈深く我零落を憐まれ三百圓を調達し又もや一日の猶豫を與へ是非金策を致せよと道理をせめて云置かれしや何をいふよも只今ての其日暮しの貧窮よて見る事さへも叫びざる貳百圓といふ大まいの金九星術の占考も他人の禍福に説き諭せど謔言にもいふ陰陽師身の上知らむといふ如く萬一金が調ねれば此六之進が皺腹切りて第一に官への分疏また二つに此身乃潔白朋友への信義を爲

ト覺悟の思入此以前より下手に六之進の悴月本雪雄散髪かつら着流し白木綿のへこ帯帽子靴ステツキを突き書生好みものこしらへよて出懸り此時前へ出て

父上りの御切腹には及びませぬ

トきつといふ六之進は此岸よかどろた

雪雄

六

六

雪

六

ヤそちや悴かきての様子を
 今日休暇の父の御機嫌うかやはんはんと遊歩かた〜参りし處圖らすこあげて只
 今のお話し逐一うけたまはりましてござりまする
 さいたと有れば是非もさいがコレ悴父切なる心のうち推量致してくりやれ
 トホロリと思入ある雪雄もうち養ふことなし宜しく有て氣を取直し
 平常の御氣質母ての無うしとお察し申上まするが何れも其様御心配遊むさずと金
 錢の世界の涌物とやら申しまはれぬ爲す事もなく安閑として天より授くる福徳を
 座して待たぬものならねど自己に及ばぬ事なれば他より助くる法もあり〇決てお
 案じあされまするな金子調達の目的が私方ふござりまする
 かくて叶ぬ二百圓の金子調達の目的がそちや確に有ると申すか
 萬一出来ぬ其時の皺腹切て申譯けとはや御決心の御様子おれど其金圓の私しが急
 度調達致しませう
 ソリヤ其方が右の金子を
 サ只斯うばかり申しての御合點が参りますまい僕が金子を才覺の其目的のひと通
 りお聞き被成て下さりませ〇

小説華繪 第七巻 八八

トのはつと合方なり雪雄のさつと形を改め
 算へますれば五年以前僕に懸地より出府なし又父上にも其比の公債證書も御所有
 被成殊に懸地の舊藩士の總代をもお勤なされて被地よりして輸出せる國産物を諸
 方へ捌き本石町に商店を開いて營業被成しが追々續く手違ひより終に只今の御察
 落其比僕に同懸なる佐藤國手の塾に入り營業を勉強致し居つたが日夜苦學の功願
 是當時の官立學校へ通學致すやりになり今一年にて卒業の略目的も立ちたるが或
 日校長何某氏と談父上の事より移り今の困窮の場合となり學費も殆ど送り難しと書
 状を見せて物語しよその慇懃の事ありとて數ならぬ身を周旋せよある藥局の助手
 となし通學の餘暇に従事すれむ學費自辨の道もつき且實地の修業にならふと御
 深切なる内談あり殊に行末見どおる有りとして兄弟の義を取給はれ僕に對して一方
 ならずお世話下さる校長おまは斯る次第と金圓のあくて叶ぬ事情をうちあげ借
 用の儀を申し入れなば承諾あらんぬ案のうち然すれを翌日の晝ごろか遅くも夕刻
 まで位ふの金子を借入れ持参して總積どのへお渡しあるやう此度お引受申します
 れは何卒御安心下さりませ
 ト思入ありていふ六之進のこれ聞き悦ばし死をさし有て

小説華繪 第八巻 八一

六

雪

ソリヤ其方がお世話よある校長より金子を借受け遅くも明夕我家へ持参致せ申すのか
 如何も僕と兄弟の約をなしたる校長ゆゑ十が九つ御承諾下さる事疑ひなけれ
 ど一徹短慮の御性質に返途途なき金圓を借受るの快のらも寧立派に切腹して身
 の分疏をせむなど失禮ながら野蠻極まる御決心がござつては家名の恥辱にいふ
 に及ばず僕が苦學も軽なき道理此處をとつくり汲分られ御短慮の儀の幾重もお
 止り下さる様偏にお願申しませる
 イヤ、金子さへ整へ、何で切腹致さふぞ其儀からハコリヤ悴決して心配致すま
 いぞ併し餘り急場の事ゆゑ整ひ難き筋もあらふが何分とも一盡力たのむぞ
 夫の宜しうござりまする是より直に彼方へ参り依頼致すてござりませう
 夫から早う先方へ其方参つて頼むでくりやれ
 イエ、明夕までに相違なく持参致し心得ゆゑ左様お急ぎに及ばねどお心せられ御
 老人の常御安心のため少しも早う参る事と致しませう
 何卒一刻も早く吉左右をさかせてくりやれ
 宜しうござりまする○左様ならは父上さま

六

悴早う参れ

ト是にて雪雄床几をはなれ舞臺下手へ来り

とにいへ目途が

ナンと申せ

目途がござきは聽て吉左右○

ト思入あつて氣をかへ

父上御免下さりませ

ト詔への合方より雪雄花道へ行き氣に懸る思入宜しく思ひ直して洋杖を小脇
 に挟み逸散ふ向ふへ這入る六之進の雪雄のあとをジツと見送り

今の身分二百圓所詮調達出来されど如何せむものと思ひしと思ひ懸る悴の語

し義兄弟の約を結び校長何某に依頼して是非とも二百圓持参すれば短氣を出せ

たと今の意見かゝる貧苦に迫るよつ便に思ふ雪雄はありア持つべきもの悴

デアナア○

ト思有り此時密き風の音より空を見あげて

天気が餘り暖かしく故に如何やら空の雪雫しもは日暮に近ければ餘々店をとり片

小説年譜 第八巻 八三

付て歸宅の支度を致さうか
 ト唄に在り六之進の以前の床店のうちへ這入あど直に流行唄にあり向ふよりゲ
 ンゴの八同トくヤミの九助散髪かつら半股引筒袖さらちがけ人力車夫の持へ前
 橋の縮商人五郎右衛門散髪かつら廻しトンビ尻丸しより股引草鞋がけ草提と金
 中張の蝙蝠傘を持ちたる田舎者の持へにて右の車味引立られて出る此跡より
 相場の手ふり良分矢張散髪かつら羽織着流し騎下駄むき碁うち堪忍坊ふけたる
 坊主かつら道行ぶり美流し騎下駄にてこれをせめながら出て皆々花道よき處に
 留り

八
 サア交番所へでもシヨ引て
 九
 講を附けにヤアなら終へるらサア一踏一
 兩人
 米ヤアがき

長
 ト五郎右衛門を引立ようゝるを留て
 ア、コレどんを間違へう知らねへが見れむ田舎の人らしいが
 マア、静に仕たつて分る事だ手暴い事仕ねへが宜い
 ソリヤア私が悪いなら誤りも仕ませうが餘りお前方が不當ゆゑ交番へでも何處へ
 五
 小説半端 第八卷 八四

小説半端 第八卷 八五

八
 ても連れて行あらゆさませう
 うぬが袋を拂いねへていけツ太へ奴だ
 九
 寧交番で一晩うぬをまかせてやるぞ
 ト手荒く引たてる
 ア、其様に酷くせんでもよいで、あいか
 コレサぞむな手暴い事をせず宜いぢヤアねへか
 何ししろ私等兩人ふ委せるが宜い
 五
 ト右の唄よて皆々舞臺へ乗り車夫兩人の五郎右衛門をむごく突放きこれ母て五
 郎右衛門ドウとなるを良分堪忍坊主立よりよろしく勞る思入れあつて
 長
 左様して一体如何仕たことだ
 マア間違への起つた始末を語しおせへナ
 ト合方キツバリとあり

八
 マア聞てお兵なせへさつき新橋の停車場で此野郎が淺艸までやつて兵を頼むか
 ら跡押附兒の大もがきで雷門迄きたところが駄賃の何程と聞やすから一兩貳分
 だと言たらバ二十錢も負ると人を餘り馬鹿ふ仕やすから夫て此處まで追駈て来や

九

したのサ愚圖くまりやア詮方がねへ持てる車提でも引たくつて此腹癒せを仕て
やらふ
新橋から淺州迄午やア鐵道馬車へ乗つたつて一人前の六十錢大の男が二人がより
て廿分間一三理もある此處迄ひいて来たのだから一兩貳分の安いもの此方の是か
ら此處へでも引張こんで棒茶屋で一杯酒代にありつく氣あのだ車賃せへ直切る野
郎最り錢の入れねへら思ふ存分叩きしめ夫て腹をいるのだから何卒留てお呉な
さるナ

五

ア、コレく夫のお前方語が違ふ新橋うら淺州までの僅一里餘といふ事の獨案内
せいふ本でたしう一私が見て置たりれ一何も私の方から兩人〇やつて呉れと頼
みもせぬ一お前方が勝手に来て一圓五十錢呉れおど、の實にたまげて物が云さぬ
夫だから負ろといふたのチヤ
エ、云ねへ事が有るものう手前の方から一人チヤア持が明くめへといつた癖一此
奴老練した風を仕やアがるナ
人一サンザツ腹背を折らせゆすり荷の様に思はせ此奴の駄賃を踏む氣がらふ
八 九
最り錢の入れねへから交番へ行て癖をつけろ
小説年譜 第八巻 八六

九

サアおれと一緒一あゆびやアがき
トまたく引立てに懸る

長

コレサく如何したものぞ何ぞといふと交番くといひあさるが交番へ連れて行た
らお定め通り一里八錢二人前でも二八十六二十錢たア取ねへ仕事だ

兩人

田舎の人だと侮つてそんな怖がらせを云ねへて袖すり合ふも他生の縁此さばさの
己達二人は委せて勘辨するが宜い

堪

それとも否なら此人を交番へ引張つて行なせへ通りか、つて留た以上の迷惑な
ら証人、私がなつて此お人の肩を持って進る氣だ

長

ナニ夫一やア及ばねへ
及ばサア兩人ともにこれ勘辨するが宜い

八

トふところより五十錢出して遣る車夫の受取て顔みあはせ
コリヤア五十錢ですな

八

二十五錢が相場だがいるを附けて五十錢
夫で笑つてのくが宜い

幕序



新形時繪護膜序幕 二 高 押

八 一兩貳分が一分々々でも堪忍をらねへところだが
九 入らざる處へとんだ奴が

良 なんだと

九 ナニサようござへます是で大負一負とさませう

五 ソリヤ夫で事が納まりましたかヤレ〜嬉しや

ト五郎右衛門の草提をとらまゐりて宜うつたといふ思入ホツとこなし有て

八 夫干ヤア九助とござで一杯やつて行ふ

九 檀那有がたりござへまし〇

ト五郎右衛門を見て

むく鳥め

八 さまを見やアがき

ト流行唄もあり車夫兩人のよろしく下手へ這入跡五郎右衛門いたはる事あつ

良 モシどこも痛みは任せぬか+

堪 悪い奴も出ツくとし飛だ目一あひあまつたね

小説年端

第八巻

八八

(以下次巻)

五

小説 第九 號 八一

何方のお方り存じませぬがお前様方のお蔭にて危い災難を遁れました○イヤ東京
 とゆふ處の活馬の目さへ抜くを聞きましたがすんでの事は此革袋をイヤ私もたまげ
 ました

ト采れしこおし是よて床几へ懸り

ハ、ア夫ぢやアお前さむい東京の初めてゞございままか

イエ初めてゞのござりませぬ此間見た事がございしました

十二見た事が有りますとへ

參つたのの初めてゞござりませぬが繪圖で見た事が一遍ございます

夫ぢやア矢張初めてだね

ト兩人の宜い鳥が懸つたといふ思入

併お前さんのご存じあるらふが今の兩人の表向車夫の仕て居れどアリヤア東京で
 名うての巾着切の親分かぶ那奴よか、つての田舎の衆がいつでも裸体にされるさ
 うだ

危ねへ奴は出遭なをつらがマア好い處へ私どもが衆合せたのでお前さんの宜い仕
 合を仕なすつたのだ

長

堪

良五堪五良

五

夫で今の車夫の中着切でござりましたかエー〇

ト胸りし詔への合方なり

何とお陰し申ませう私の上州前橋在の生糸商でござりませが私の親仁が横濱へ生糸の仕切と取り参り三月程も歸りませぬので母が大層茶じまして羊の取ても御酒を飲むと女狂ひを致すが癖急度女に引懸り大金を捧母ふつて夫で歸國が出来ぬのだからと取越し苦勞を致しままの私に養子ゆゑ見て居りますのが氣の毒さふ勝手り知らねど横濱への昨日参りまして養父を尋ました處察の定真金町とか申す處の女郎に誑され一月ばかり居續とやらを致しまして異人館うら受取た金子を遣ひなくしました

たが板があたけいな性質ゆゑ失つたの二三百圓我子ながら私に面目おいと見せまして残りの金子二千圓と少しのえしたを國許へ早く持て行て呉れおきの跡から直歸ると受取ました二千圓實に此草提に入れて置ましたら今の車夫に望壁を仕懸られ若や草提を取られましたして國へ歸つて云譯が無いと私に最り取られぬ先から生た空のごさいましましなむごや夫もあふた方のお扱ひで僅五十錢で濟まして此様有難い事のごさいませぬモシお兩人様へい誠有難うござりました

ト悦ばしき思入めて禮をいふ

小説卒業 第九號 八二

長 堪 五 良 五 堪 長

夫でヤアね前さむの上州の生糸商人でお出被成か二千圓といふ金を草提へ入れて人ごみを歩き被成の危いもんだ

何しろ那奴等が一掃去、行たけれど草提の中を白眼で居るから多分道でお前さむの来るのを待伏をして居るかも知れぬ

今夜遅くも前橋迄瀧車で参る積りでございままが是から上野迄参る道は今の奴等が私しの待伏をして居りませう

執念深へ那奴らゆゑ如何しく金輪際のがさねへ氣で居ませうヨ

エ夫で如何でも此金子を〇

ト怖いといふ思入ト途方暮れ

ア、コリヤ如何したら宜からふな

東京が初めてよ、今から上野の停車場へ行くの如何も危ねへもの何でも此處に候りしてアノ兩人をば遣まごし跡から行のが上分別だ

寧今夜の何處へ泊り明朝六時の一掃瀧車で歸ンあさるが大丈夫で宜うらふ

成程今夜の東京へ一泊致まご極ませうが勝手に一向存じませねばお世諾序に何方へか御連なすつて下さりませぬ

小説卒業 第九號 八三

良 夫の幸ひ此先は私しが知て居る家が有からナア堪忍坊さむ
五 堪 夫、那處なら大丈夫それで、兩人が寮内して俱々頼んで進ませう
等、有難うござりまするあなた方にお目懸りませす、此草提の中の二千圓今の奴

ト此時チヤンく薄き風の音になる

佛といへばアノ鐘の觀音様の御堂の締る知らせだつた

堪 冬至から少しづつ、日が延るといふけれど六時をうつと直日が暮れ見る間、大層暗

良

くあつた

五 畫の長閑に引替つてツツと身よしむ北風に

五 筑波おろしかららくと晩は白く積りさうだ

五 喜んでの事は此草提を今の奴等、取られたかと思ふとヒイヤリ襟元から〇ハツツ

シヨ

トくさめををる

良 ア、風うね

五 イ、エ〇

小説草提 第九巻 八四

小説草提 第九巻 八五

ト草提を持直をを道具がえりの知らせ
導を致して居ると見えます

ト時の鐘合方薄き風の音にて此道具よろしく廻る

本舞臺一面の平舞臺少し下手へよせて瓦屋根兩扉の門これに續いて上下とも屋根附の

練塀この内松の立木門の際題目をかき高祖日蓮大菩薩と彫りつけし供養の建石上のか

たまき木の生垣この内卵塔場の心よて卒塔婆石塔おどを見せ日覆より松の釣枝をむろ

し都て淺草田圃公園地りら幸龍寺まへの体よろしく公園地割煮店の懸き唄にて此道具

とまる

ト右の懸きよて上手より以前の溝部軍次酒は酔ひたる思入跡より花岡の下女お

鍋万枚の貸提燈を提げ出て来り

溝部さまおあぶなりござぬませ

ナニ大丈夫だ

トいひながら蹴く

ソレ得覧ささいまし大丈夫と仰るお口の下から直にお躓きなさきませす

イヤ、夫でも大丈夫だ假令酒は酔ふたとて二十年其むらしは是でも奥羽の戦争

鍋 軍 鍋

に鐵砲だまの雨霞篠つくやうに降る中で功名手がらを致した軍次十二是しき酒
よ廻され精神を亂してなるものか併今ての公園も四十餘人藝妓が出来大層流行
いたをと聞とが吉原あらぬ公園の騒ぎを田浦で聞くといふの口實に世の中も聞け
たナア

ホンニ左様でございます吉原道が塞つても新公園の埋立を通り抜がされるまで此
邊の仕合でございます

イヤ仕合と申せば武道のもとより文學も秀し溝部軍次が妻よなれば此上も無い
事だに何て嫌ふかピンシヤンとアノ令嬢の綾子殿木折でゆかぬに戀れ道と其方に
頼し今の一條夫ての雪の降夜を待て根岸の邸へ忍ぶから其時うまく手引して無理

こちつ々綾子とハ我手よ入れさせて呉りやるウナ

夫の只今お話し申ました通りお庭の口を貴君が三ツトンくとお叱れ遊ばしたら

夫を合圖に私しが急度お忍むせ申しませ

夫ての庭口の門を三ツトンくヂヤナよし左様致せば其方内うら門を開き
綾子の部屋へ案内を致して呉れるか
檀那さまのお居間とお庭を一ツをふれたお部屋お嬢さまの附人にお鍋とお松

小説華錦 第九巻 八六

鍋 軍 鍋 軍 鍋 軍 鍋 軍 鍋

どんむりお忍ばせ申を乃何の雜作もございません
花岡かさを敵と見れば其方の味方れ裏切をして我へ報ざる合圖のトンくを知ら
せともお忍ませませ

貴君こそ此様にお酒にお酔ひ遊ばしてお忘れ被成てのなりませぬぞへ
ハテ綾子といふ初物をやるのヂヤもの酒おどを飲むものか併トンくを忘れての
相成らんぞ

首尾よくお忍び被成ましてお嬢さまをお手に入れよば
否應なし僕が妻君

其お望みが叶ひましたら裏切をした御褒美の
勲一等の旭日章賞典録の五十圓ヂヤぞ

エ、うれでアノ五十圓下さいませる

骨のぬまぬまぬりまくやりやれサ

夫てのミアトンく柏子よトハイへ貴君其トンくを決してお忘れ被成ませぬぞ
ハテ叔くどい恣まの致さぬ

ソレトンく三ツ御褒美の五ツでございますね

小説華錦 第九巻 八七

軍 鍋 軍

トくり返して念を押す此時とさの鐘をうつ軍次指とりかぞへて
八時ふして十一うつがアノ三ツの捨鐘なるの
其すて鐘にならぬやう
どうか首尾よく

鍋

トいひながらヒヨロ／＼とよろ々懸るを鍋とめて
エ、おあぶなうござりますドレ馬道までお送り申させうか
ト右の駿唄にて兩人捨せりふいひあがら向ふへ道入る跡詔への合方に薄く雪お
ろしをるおせ上手より女人力車ひきお貞結髪のおつら肩入れのある半纏服がけ
股引あらぢがけ手拭をかぶり男と見ゆるやうの好みの持へて一人乗の人力車
を引さ此跡よりお貞の悴忠之助散髪かつら木綿やつし猿股引らぢがけ子役に
て人力と印しのある挑燈を持ち兩人出て来り

忠

おつかさんまだ胸が痛いかへ
ト案じて尋ぬる是にて上手よき處へ車を置きお貞の癩の差込む思入日獲より雪
をチラ／＼降らせる

貞

おつるさんの胸の痛いの持病ゆゑ起るとめつたに癒らぬから此處で休んで行

小説挿話 第九巻 八八 (以下次巻)

貞 忠 貞 忠 貞

ふさしの

ト腰を屈め体む子役空を見あせて
おつらさむ何だか白い物が降て来たよ

ホンニち／＼降て来た様子此雪が催すので胸が痛むで来れと見える常々弱い
身体ゆゑ直よあたつて此様痛み出すので困るわいの○アイタ／＼、

ト胸をおさへ苦しきおし忠之助の母を介抱して
そむな痛むで苦しいから私が押てあげませう
夫なら此處を強う押て呉りや
アイ／＼

ト忠之助母の胸をおして居るお貞こなしあつて

こむな折々持病よて苦しむ母つけ我身の上思ひ出されておらぬわいの○
ト詔への合方になり

算へて見れば十二年あと十二の年うら御奉公した月本様をお暇となり宿へ下つて
居たりちよ人のお世話で忠藏といふ智とつと夫婦になり間もなく其方々舉げし
が初の内の亡母が丹精をして溜さお金を入し貸して利分をとり田地もあまや安々

貞

エ、何をいやるがいなア○ハ、ハ、ハ、

忠

トお貞涙を隠して笑ふ

貞

夫やアア行て来るよ
ト右の合方にて忠之助錢と持ち足早に向ふへ這入る跡お貞の胸を押へ苦しきこ

貞

なし有て

ア、親なきばこそ子おれべこそまだ七ツやハツての世間の子供衆は遊び盛てとや
くをいふが當然だにあれでも親の力なる氣で廻る車の跡を押し却つて邪魔おま
るなれど自分の氣で少ししでも手助々をする積りといへてもまア可愛い心やアナ
ア○

ト此時雪やむおてい空を見あげて

白い物が大分降て来たが少しの間は雲切れがして最うやむだ様子○此雪の故て痛

むだので有らふおいはアイタ、ハ、ハ、ハ、

ト強く差込て来た思入ふて苦しむて居る詠へうすめて騒ぎの合方あり上手よ

り以前の車夫ゲンコの八同じくヤミの九助同くのつぼう竹の三人何れも酒に
酔ひたるをなしよて出て来り

小説雑録 第十巻 八四

ハ

滅法寒いと思つたらチラ／＼と白い物が降て来たが宜い塩梅ふやむだ様子

九

雪の豊年の貢をむろと蒲團の上よぶツ、あつて居る閑人の能くいふがどつさり降

竹

つチヤア車夫殺しダ
夫でも一杯遣たので腹中へ寶が這入た故らアボか／＼暖るくつて天窓から

ハ

煙が出らア

此様お日にやア掠鳥でも引懸てたむまり酒代ふ有りつかふと思つた處へ餘慶お奴
が邪魔は這入らばつかりでカラを踏みたつた五拾錢じかあらねへからからア糞忌

竹

忌しく手前を誘つて夫で有りつたけ飲だのだ

おれも今日の雷門で酒代の出さうな客人を見つけやうと猿眼で捜して居るのを
お巡査お見認られついでにあらむ惡勘めと致すナと劍呑を喰せられ瀧は障つてお

ハ

らなむだが手前が馳走をして呉れたのでからア宜い延喜直しをしたンダ

天氣が大層續いたから是から雪の紋切形だが氷つた上をがら／＼ともがいて行く
ナア骨が折れ酒と怒との二人連でなけりやア是うらの仕事の出米おへ○

トいひおがらお貞を見て

や此處に難かシヤがんで居るぜ

小説雑録 第十巻 八五

九 竹

車がこゝに有るから誰だの仲間の奴だらふ
おれたちと同様に飲だく来て往來へ寐るのうも知れねへせ

ト三人が寄つてたかつま引起すお貞の苦しき思ひ入ま有つて

イエ往來の存じて居りませが持病の癩が差込ままして難儀致して居ります者何卒

少しの間此儘にして置いて下さりませアイタイ、

ナンダ持病の癩が差込むとへ

大分時代おせりふだか

八 竹

如何やらやさしい口の利きやう

ト傍に有りし灯燈を取つてお貞の顔を見て

やおめへの壽町ゝら出るお貞さんぢやアねへか

夫ぢやア並木でいつても落合ふ

女で車を挽て居る神さんだつたか

此奴ア宜い處で

エ、

八 貞

イヤ宜い塩梅に雪のやむだが癩ぢやアどむるよか困るだらふドレおれが鳥渡押し

小説年譜 第十號 八六

八七

八 竹

て違らふ

ト懐中へ手を入懸るをお貞に入れさせまいといふ思入あつて

ア、モシ夫よの及びませぬわいなア

ナニ速慮するよアア及びねへ

ハのまむし指だから癩を押すナア得手だから自由にあつて押して貰ひおせへ

夫とも一人でいやあらば三人がよりで押して違ふら

ト立ち懸るを留て

イエ、夫よの及びませむ〇イエ最う大きに宜しうござりませから決してお構ひ

下さいますナ

ト矢張胸を押へて居るゆゑ

納つたか知らねへがお前の癩と只た一遍押して見てへと思つた念が届いて調度宜い

處で出ツくはしたのが百年目左様いやがらすとお貞さむ少しばかり押せて呉むね

へナ

ト抱き附くを振拂ひこおし有て

御深切の有難うござりませが只今の雪で差込ましたが雲が吹晴れやむだ故か最う



新形蒔繪膜飾序幕三圖

九 納りましてござりますれが
コウ／＼左様いやがらねへでも宜い千ヤねへか八兄いが那様にお前の積を押たが
るうら

竹 少しの間だ平抱して此處で存分押せて遣ねへ
イエ／＼最う何處も痛み致しませぬから押してお貰ひ申さないでも○
ト居まひを直しト座つて

八 宜しうござりませぬナア
惡強情を言ねへで自由になつてお貰さむ押せて呉ても宜い千ヤアねへる○

ト大津繪ぶしの合かたよなり
此様お事と並べたらのろい奴とみられるだらふが溜々だつた腕ツぶしの強へ仲間
は引替へて形装の水綿のぼうたを着て男擬むの猿股引もわらぢを穿て簪いでも日に
取る錢の五百か六百骨折業を走るうらよア下戸なら五厘でゆで赤豆う稻荷結を
つまんでも二錢か三錢小遣を引去つて見りヤア四錢う三錢其様おしおねへ暮しを
走るより年の少しふけ過ぎても嫌でも遣つて研ぎ上げおれよ身体を委せて見ねへ
夫ころ生涯喰ふ事に困らねへ様仕て遣らア

九

侍

貞

貞八侍八

小説年譜 第十一卷 七三

左様だくお前の氣で野暮堅く亭主があるから外の者一身を委せて濟ねへとおつり古風に出懸るだらふが其奴の流行を知らねへのだ聞さやア亭主の窃盜懲役は行つたとやら

二年で満期も便りがなく何處へか行方が知れねへと言へば此奴も算みやう捜し此方でもかき責女を立てても先干やア何とも思やアしねへ夫より早く八兄イの言ふ事を聞て女房になるのがお前の幸福と七ツかハツで跡押をするアノ小兒迄が済みあからず

御深切に皆さむが左様仰つて下さいますのの有難うございませうが今仰つた本夫は別々夫から丁度五年ごし女は似氣ない骨折業盡の日中日よさらされ夜の嵐はまめり勝ち女といふも耻かしい程癩れ果た私しが如何マアお氣に入ります御申儀を仰らる堪忍して下さいますし

何とぞいふと申儀だと誤魔かす氣でも夫リヤア行ねへ

今夜の雪がチラつくので往來稀を裏田浦岸の来る氣遣もなし

遠くいやだといふのあら代りぐの念佛講をいさまされてもいやだといふか被令手ごめに被成ばとて何駐うしい此身を何で他人に任せませう最ういふて下

八 九 竹 貞

さむま十

ゲチ〜チヤア有ゆへし其様よいやとぬかすなら
八兄イが締た跡をぐる〜廻りよ引受て

駐付三杯三人で充分慰むから左様思へ

エ、情あい切て那子が居たならば手込よあひもせまいのも〇忠之助最う歸りまう

なもの忠之助ヤアアイ

ト伸上り向ふを見込む

エ、騒々しい静ましろ

ト抱まぐめやうトするを拂退け向ふへ思入して

忠之助ヤアアイ

ドツコイ口を壓へるから

早く思ひを

送げあせへ

トおていを抱まぐめる

夫チヤア頼むよ

小説萃錦 第十一巻

七四

兩人 合點だ

ト騒ぎ唄へ題目太鼓をかぶせたる鳴物にあり遊やうとするお貞を追廻をお貞の

一生懸命捕れし手を振放し花道れ方へ遊よ懸るを三人にて引戻しゴツチヤ

の立廻りよさ程に向ふ母て人音がする故三人の胸りし

ハ アノ靴音の

兩人 棒だ

ト三人の惡車夫にお貞を突き到し逸散に下手へ遊て遠入る是にてお貞のどりと

舞臺真中に倒れ居る合方きつむりととなり向ふより巡查服部信行帽子官服サ一

ペルを佩び靴にて角燈を持ち出采り花道よき處よて舞臺をすうし見て

幸龍寺門前よ只ならぬ聲がせしゆゑ駐付し此角燈を見るとひとしく左右へ散亂

致せし様子ソレ〇

ト舞臺へ早足ふく采り倒れて居るお貞を見て

ヤコリヤ氣絶致せしか〇

ト直し片手にてお貞を抱起し分抱する此内お貞のウンと息を吹返したるこなし

ト、信行角燈を差付

信

小説萃錦 第十一巻

七五

貞 信

コリヤ〜心が附しう〇僕の巡査チヤしつゝり致せ
ハイ
心が附いたか

ハイ

信

ト氣のつきしこなし宜しくある
夫の重疊チヤ

ト是ふてお貞信行を見あお

貞 信

是の有難うござります〇貴君のホンニお巡査様よりお出被下ました
最宜いゝシツカリ致せ〇

ト分抱し

見きは傍りに人力車が引捨あるのミ外ふ人影も見えざるが一体ソチヤ何れの者

チヤナ

貞 信

ハイ私しの淺神壽町百十二番地
ナニ當區内の者と申すか
ト懐中より手帳を出し

貞 信 貞

シテ姓名のナ
ハイ安澤貞と申します
士族チヤ平民チヤ

ハイ平民でござります

ト一々手帳へ書留めト、お貞を見て

身内に傷痕もない様チヤが衣類に引破つゝ處が見ゆるがコリヤ三三人の者も争ひ
いどまれし者と認定致す左様かナ

貞 信

ハイ仰る通り只今此邊の〇イエ酒に酔いたべ酔ひました者に私しが癪で苦しむ
で居りますのを押して違ふと深切ごかし果はみだらな事を申懸ましたゆゑ逃げやう
と存じまして胸のつゝへに自由ならせ仰い目達ひまを處でござりました
いナ

信

ム、扱の醉狂人に出逢ひしか夫の驚いたであらふシテ其者共ハ車夫体の者で有
つたか

貞

ハイ〇イ、エ何を致す人でござりますう怖さは其人達の姿さへしつゝりやい覺え
ませぬ

信

ト三人をかむり思入

ソリヤ醉狂人の姿を見せぬと申すか

ト此處へ向ふより以前の忠之助の包と持ち足早に出て来り

慈母さむお薬を買て来ましたよ

オ、忠之助りよく戻つて来て呉ました

慈母さんと申すのら此者のソチの悴か

ハイ左様でござりませる

悴があらば本夫が無ればあらんがソチの連合の如何致した

ト是にてお貞少し怒への思入あつて

ハイ其連合もござりませれど唯今で何れへか参りまして行方が一向分りませぬ

ので逃亡のお届けが致してござりませる

スリヤ連合の逃亡を致したト十夫の無婦人のみで困るであらふ〇シテ是なる悴の

名の何と申す

ア、忠之助と申します

ム、忠之助かよ〜〇

小説 第十一巻 七九

信貞

貞

ト手帳へまた書留る事あつて

醉狂人よ致せ往還において左様お都合な事を致すから其者の犯罪人の被害

者の其方の警察署へ引致して一應取乱さねならぬのぢやが此寒風に肌薄といひ

持病の發した後でえあり殊に幼少の悴を同道いたせば必ず迷惑であらふからコリ

ヤ職務外の看免を以て往還の事故ともし引致するのり〇

トあたりを見廻し思入あつて

此儘もなし違さふが見れむ車が引捨てあつてソチが形装の男子も同様コリヤ女

子ふして男装を爲む違警罪ぢや

エ、トギツクリ驚く思入

併貧困に陥り着替へさへ無い其方達と見受れに思ふに女子の身に人力車を曳き

營業致を様子男子さへ骨折業と一口に申す車夫に出たら小兒と供ふ此夜中營業致

すのよ〜の事ならむ其理由を乞まを申し聞せよ

トこなしあつて和らうよ尋問するお貞もこなし有て

御深切の其お詞女子に似氣なき此扮装で骨折業をいたしまするににお察しの通り

深い仔細のある事ゆゑ左様な其諱をお聞なされて下さりませ〇

小説 第十一巻 七九

「能への合方にあり傍りへ思入ありて
 本夫の恥をわからさまに申しました私しが折角義理を立まする道に缺けま事
 おがらもと私しの士族の果十二年跡一忠職と申します者を入夫一致し是一居り
 まする悴を擧げました心得違への事あつて忠職の二年の懲役其後満期一なりま
 したと人の噂に聞きましたか面目あいのう夫ともによからぬ氣質が直りませぬ
 へは歸らを行方も知れず跡に残りし此の忠之助がそむな邪見を親しては
 ました印ふやあつさむい如何おした何處一お出か逢ひ度とせがまれまする身の
 つらさ夫れのみあらを女の手一ツ何を致して暮しますにも廻らぬ勝ちの度世帯ま
 た夫に私しが長らく御奉公を致しました舊御主人が只今で私共と國様一其日
 一迫る御難澁見で居られませす是迄の御恩報と朝夕一お世話致せば何やかや足
 らぬ處へ輪をかけて御主人様と三人暮し私しの株者でも女子ゆゑ入夫をせぬか
 の其おそれのお世話下さるお人もあれど是なる悴が穉に顔さへ知らぬで親
 に義理をたて眞實のおとつきむの歸らぬ間によその叔父さむを内へ入れをり一
 おとつきむの心が直り歸てお出の時濟むまいと惡事を働く親に似を操を立ると
 私しへ子供ながら逢ての意見盡し洗濯賃仕事で湯なり粥なり歎りましても親子

小説集 第十一巻 八〇

信 貞

「今日を過しますれど夜に入て人様一女といふ事をさどられまいと男に疑ふ此
 扮装で車を引さし出ましても手に入りますの五錢七錢十錢取るのが關の山夫
 を隣の御主人様へさつて心で親と子が此寒空一吹きさらされ軟弱い腕の人力車男
 の装をいたしましたも全く右の理由あれコレモ巡査様何卒あるの思ひ存
 して親子の者を此儘に只管お見遣し下さいます様お願い申し上げまさい大ア
 ト思入れ有つていふ信行の始終を聞き感心せし思入
 入りや舊主人へみつや為夜一入れ車を引き是なる悴を養育するとい如何も感心
 至極な事又と得がたき貞女の其方思ひす落涙致したつよ〇
 ト信行涙を拭ひ
 さね去ながら女にて男の形装を致さの違輕罪の間ふ處私しより怒されぬが其
 方の此夜中寒氣を厭ふ其爲小男の衣服を借受て上にはおつて居るので有らふナ
 イへ左様でござりませぬ只今申し上た通り女と人に知られぬ様一
 ハテ左様で有るまい男の借着を〇
 ト傍りへ思入して夫とのことませあから
 致したのであらふがナ

信 貞
ハイ〇左様ふござりまする
借着とあらは歸宅迄暫時の怒し遣せは又も支への〇

トこなし有つて

イヤ少しも早く歸宅致せ

ハイ有難うござります左様おれば此儘にお怒し被成て下さりまする

イヤ女にして男子の形装を公然致しての怒されぬが借着なれば罪の問ぬギヤ

スリヤ夫程私しをば

此儘に致し遣はすも舊主に仕へる貞操節義とれ一免じて〇イヤ早く行け

左様なきばお巡査様参りまするでござりませう

トお貞の胸を押へ立上り件の車を引ふと暮る忠之助の提燈を持先へ立ち母を介

抱する思入ト信行の洋服の隠しより暮口を出し中より小銀貨を出して

コリヤ〜忠之助とやら是は少しギヤが其方に違すうら何か温るい物でも買て母

またへさせて遣りやレ

ト忠之助受取おていの傍へ来り

慈母さんお廻りさむが是を下をつたよ

小説半鐘 第十一巻 八二

信 貞

エ、コリヤお金でいふいぬ

餘り些少ギヤが取て置きやレ

是はマア有難うござりまする〇コレ忠之助よくお禮を申しや

お廻りさま誠に有難うござりまする

ト禮をいふ

禮に及ばぬ早く歸宅致せ

ト雪下しになり又雪チラ〜降るお貞の車を引さ忠之助の先へ立ち花道へ懸る

オ、コリヤまた降て参つた

左様なればお巡査さま

氣をつけて参ま

ト角燈をさし附るを道具替りの知らせお貞の車を引さ忠之助の分抱されながら

向ふへ這入る信行の跡見送り慈然なものだといふ思入此仕組互しく雪下し眺

への合方にて此道具まはる

小説半鐘 第十一巻 八三

序 幕 大尾

小説年鑑 第十一號 八四 (以下次號)

小説年鑑 第十三號 九一

信 貞

エ、コリヤお金でいふいか
餘り些少チヤが取て置きやレ

忠

是にマア有難うござりまゐる○コレ忠之助よくお禮を申し、
お廻りさま誠に有難うござりまゐる、

信

禮に、及ばぬ早く歸宅致せ

信 貞

ト雪下しふなり又雪チラ、降るお貞の車を引き忠之助の先へ立ち花道へ懸る
オ、ユリヤまた降て参つた
左様なきにお巡査さま
氣休つけて参れ

ト角燈をさし附るを道具替りの知らせお貞の車を引き忠之助に今抱されながら
向ふへ這入る信行の跡見送り悠然なものごとといふ思入此仕組且も雪下し詭
への合方めて此道具まゐる
本舞臺一面の平舞臺上手へ寄せて床の間違ひ棚此柱は青竹の花生是へ柳をさし春掛の
懸物繪の硯箱など飾りあり是は續いまで下手繪心に九尺手摺附左右障子一枚づ、明放

此向ふ淺草公園地の書割の遠見上下唐紙の出遣入いつもの處手摺附階子の上り口舞臺一面薄縁を敷つめ此處は相場師小宮宇太郎散髪かづら羽織着流し上手にすまひ小さき竹行季一圓札を澤山入れ是ふ蓋をし居る下手に以前の堪忍坊同く手振良助バツト下手に上州の縣商人五郎右衛門軍籠を側におきすまひ何れも吸物膳をひかへ酒宴をして居る待合の下婢お花丸鬻つら前垂がけにて爛徳利を持ちあるよき處に恭若へ碁石と並べあり此外燭臺酒宴道具あど宜しく置ならべ流行唄にて道具とまるお花 只今お銚子のわかありの鳥渡よいお花をつけてまゐりませう

ト左手の階子の口へ這入る

五 今日のお庇で災難を免れまして有がたう座ります又其上に作馳走まつての實

ト不器用に禮をいふ

宇 一ハヤ濟ましねへ 伊や其禮の及ばねへ旅掛の作同前諸事氣をつけねばあらあいうらお前さむの

災難もひと事と思はねへ

實はあふねへ處でありました

良 左様して小宮の檀那の何故其様に私しどもへ金子をお隠しおさいますナ

宇 隠す譯で無へけれどおれがまうけた此金をお前達に見せると直に煽て遣らせる

小説年譜 第十三號

九二

小説年譜

第十三號

九三

堪 良 宇 堪 宇 堪 良 宇 堪 良 宇 堪

から夫が危険で隠しこのサ

其奴の餘り厭しいおこと業左様して何程ぱりの仕切をお取被成ましたね

何程と云て僅だが昨日買ひ廻りたばかりで千五百圓儲けたれさ

良 夫の大層な事でござりましたね千五百圓がうのならば何う奢つても宜いぢやアご

さいませむか

宇 イヤ、只の奢らさいおれの金を取り度毎度の株賭をしておれの金を取てみるが宜い

どりして、此方資本が有ませんから檀那はアヤ叶はねへ

併そこの手練ざるらおまいさんが相手なら只取るやうあ

や

イヤナニ只今取て御目お懸ませ

良 上州のお方御迷惑でも此兩人が私取られて泣ッ面をするのを其處で御覽おせへ

夫ぢやア碁で手間がとれるから毎度の大目小目の當ツを違ませう

サア檀那掴みましたよ

ト碁笥を引寄せ黒石を掴む兩人も同じく白石を掴み三人思入あつて

宇 堪良

ソラ小目だ〜
私じの大目でござります○
ト三人掌とあけ碁石を算へる事あつて

ソリヤ大目だ〜

此奴ア一番とられたハ

ト竹行寺の内より一圓札拾枚出し兩人へやる事あつて是より三人同ト當ものを

ト宇太郎の拾圓づ、四五度良助堪忍坊取らる、事宜しくあつて

つひ迂濁り五十圓兩人取らして仕舞たかへ

夫だから只お貰ひ申すれだ云たのでござります

前賢富士の山へ腰をかきた夢を見たのを見徳ふ大目と追つたら此通り二十五圓少

ゝとの有難い

ト以前より酒を呑み居たる五郎右衛門思入あつて

私に一向に分りませんが面白さうな事でござりますナ

イヤ面白いの何のと云て碁石を握つて閉く内は十圓なる仕事だから此様を面白

い事は有りませむノサ

小説年報 第十三號 九四

堪

五

良

五

宇

五

堪

五

堪

五

堪

櫻那の標馬○イエナニむくの真面目のお方だが是も懸ては目の無いお人貴君と少

し仲間入を被成チヤア如何でござります

イヤ私の勝負事の大嫌い見るのもいやでござります

旨味く言てお出さる○

ト合方さつぱつりとなり

外の國なら知りねへ事上州から野州をかけチヤア今嚴禁の賭事でも山は與や林の

中でこそ〜遣るの土地持前むらしやア國定忠次といふ大親分のあつた處同

じ生れのお前さむが御存トねへ事ア有りませぬ

コリヤア良助さむの言ふ通りまんざら知らない事も有まいるら私の味方にあつた

上此兩人が無けるしの金を取て違ふチヤア御座らぬか

成程外の國と違ひ勝負ごとの流行る土地○

ト間の慈さ思ひ入れよて

大目小目あどの存トませぬが察事ならは長半でも狐でも少しの存じて居ります

ソリヤコソ化の皮を願した

夫で私少しの少しむりお相手を致しませうが○併此草筐の内は大札ばかりで

小説年報 第十三號 九五

良 さいまをら生憎小札が
夫あり草篋をお預々被成て小宮の檀那うら百圓百り一圓札を廻してお賞ひなき
いまし

宇 サア、是をお遣ひ被成まし

堪 ト行李の内より拾圓束を十むかり殺遣る

念の爲だから上州の檀那の草篋にお預り被成まし

宇 ト五郎右衛門のカバンを受取宇太郎へ渡ま

良 夫千ヤア此内ふ貳千圓〇此奴いうまい

宇 ト三人顔を見合せよつこり悦ぶ思入ある

良 サア、相手が殖ゑたから何處迄も大目だ

宇 ト碁石を掴む

良 私も矢張大目よ仕ませり

宇 おれい骨が舍利ふあつても小目だ

ト同く碁石を掴みト皆々手を開て見て

良 ヤア又大目にやらまたか

小説年譜 第十三巻 九六

五

ア、夫で拾圓ありましたか

ト是より皆々勝負を争ふ事宜しくト五郎右衛門大目よて取つた札を前へ積み

上げ悦ぶ思入れよろしく

ア、最う三百圓むかり取られたが今度の二十圓づゝでゆかふ

其奴いよいよ面白くあつて来た

サア上州の檀那こ、が切替時だから大目でも小目でも氣に入つた方になさいまし

二百圓許りまふけましたうら今度の私が向ふを廻り小目の方でゆえますから三

人の大目でお出被成まし

夫で此方も是から大目で行きサア二十圓賭ませり

良堪

サア二十圓だ

ト双方碁石を掴みト三人あけて見て

今度のしめた大目だ

エ、是は飛ぶ事をした〇サア跡も小目だ

ト又碁石を掴む此件宜しくト五郎右衛門の連々負け前へ積上げし札を三人

取られ本意をたこなしある

守 アア上州のお方はから草篋の大札の兩替をして進ませりからドン／＼跡をおは

五 んあせへ ト思入有ていふ五郎右衛門残念だといふこなし有て

斯あつては私も男だ札を崩してやりますからお預け申した其草篋を鳥渡れ返し下

さいまし

ア、仰るから小宮様草篋をお渡し下さいまし

夫ぢヤア百圓此うちへおまが乗て居ませをぞや

ト件の草篋を返を長助取ついで五郎右衛門へ渡す

誠にお世話さまでございまして夫でハ百圓お返し申しませう○

ト草篋を開々中を改める此内古端書郵便を紙に包みたる物にて金札おたのゑ突

驚し

ヤアコリヤ金札と思ひの外いつの間ぬやらはがき郵便

三人 エ、 ト突驚する

若々あなた方私に氣を揉せすに札を返して下さいまし御殿談にも程が有ります

是々何を云ツシヤるのだ何で四人目ツバリコ其様な事が出来るものか

歸天齋正一から知らねへ其様な手品が遣へるものかコリヤア手前が最初から郵

便はがきを入れて置き此方へ匿名を附る氣だナ

イエ／＼何で私し其様な事を致しませうぞ生糸の仕切の二千圓今迄あつた金札

が貴君へお預け申したばかりで何時の間やら古そがき扱の三人云合せ所持の金

を取る氣ぢヤナ

コレ／＼ふざ々な事をいやアがるナおれ達が摺替たといふ何か証據が有つていふ

のぬ

証據と云ては外にござりませぬが最前お前預た時百圓といふ大金も此草篋を

抵當に貸て呉たが慥な証據

三人 ヤア トぎのくりする

サア此草篋の中が廢物ならまさか百圓貸もしまし慥に中の二千圓と目星をつけた

熊鷹眼 戯談せすとすりかへた金を返して下さいまし

摺替へもしねへ二千圓返して呉れと何處までも一皮冠つていふ手ゆへ

扱の初手からゆする氣で

兼て任組んだ品玉つかひ飛だおのれ

發せ者ダナ

五人 さすが手前も詐偽師だけ喰せものタア能く悟つた
 三人 何だ ト詭への端唄の合方より五郎右衛門の様子をかへ
 何程此處から公園が近いと云て植六の動物園千ヤア有めへし獸物揃ひの虎と猿
 一迷ふ椋鳥とおれを木兔同様に深切こかし連て来た此待合の泊り木で碁石を餌
 小鷲掴み草筐の金をさらひふとり手前達の眼鏡違ひだカパンの中より二千圓有る
 無へるの白鷺の泥纏を踏む氣で三人が驚く鳥の黒白の石で誤魔かす氣だらふが
 れが小首を傾けた日にヤアうぬらが異ヤア懸る格へ夫とも金を返さア鶴の一
 齊警察へお恐れながらと訴へりヤア三人とも喰へ込み具へ飯を喰にヤアなるめ
 へ新年早と箱馬車で二局送りもドット仕めへ大鳥より小鳥といふから此側中を
 引くるめ鷲鷲の鳥のいつつけ口をされねへやうにをるが宜い
 ト惡ものよこさしよていふ是よて三人飛ぶ奴といふ思入

宇 上州ぞだちの生糸商人草筐の中の二千圓悉皆此方へ巻あげて宜い正月を仕様と思
 良 堪 無理解段の見世金も
 掴む碁石の大目小目符帳でごまかす積りだつたが裏のうら行く其方の混騰
 一杯喰つた此方等が飛た鑑定違ひだつとどうせ詐偽師と悟られりヤア此方も隠

小説半端

宇 かね刑場持ち
 肩書のおへから違なら側中違るめへ物でも無へが此方も冠つた面を取りヤア地獄
 の責も二度三度金うてふころならねへや閻魔にゆかりの火の玉勘次
 おれも相場の手振と言て米屋町ごろつくや惡い事ヤア極素早くチヤリと措
 りヤア肩毛から火のつく緯號のマツチ伊三
 叔又次の堪忍坊も碁打といつて頭を圓め道行ぶりて押廻すが舊い幕府の御直參河
 内山の跡つれと自分極めのお坊主富だ
 斯本名を明しとらまさう側中さらつて行たア口をツたくて
 三人 云はめへがナ ト口を捕をて喰度いふ
 最うたい言の夫限か火の玉勘次に坊主富マツチ伊三といふ肩書つき成ほど剛氣
 お兄いだらふが赤い仕着せて石川島の本場を踏だ惡黨の白無垢テツカで椋鳥をこ
 うくいちぢるる手前のやうなたちを野郎の名知らねへ名乗て聞すも大人氣ねへ
 がおれの名を聞て興驚するなよ

三人 イヤア
 賭博犯から強盗で二度のつとめの苦役をした上州無宿の木鼠忠藏タアおれが事だ

宇 良 堪 宇 五 宇 堪 良 宇

エ、夫なら上州木崎のうまれて此間中の新聞に出た華族の土藏を破てあるく

忍びの術をつかふといふ強盗犯の木鼠か

さうとい知らず三人が文珠の智恵で此處迄釣り出し

飛だ鼠の天鉄羅で狐仲間のおら達が矢張り懸つたる

ト三人顔見合口惜きこなし五郎右衛門煙草盆を引寄せ煙草をのみながら

サア斯本名迄ぶちまけてゆすり懸つた木鼠忠藏側中おれに渡さよアや最う金輪際

動かねへうら是うら惡事を新人しておれり抱て行ふとも白ワツくれておれを又田

町の包へ突出して手柄にするとも勝手次第度胸をすゑて挨拶しろ

どうせ惡事の相互の秤懸た日よア手前も懲役此方等も赤い仕着の覺期の

まへ

其様を威嚇で見せ金算段をした此金と引きさらられて堪るものか

斬へるから勝手よし手前も同ト二局送り出る處へ出て辨巧で此三人の免れて見

せるぞ

ト是を聞き五郎右衛門の思入有て

ム、まだ惡黨でもか々出し何ぞといふと二局へ行き赤い仕着も合點だと素人お

小説半端

小説半端

どしどし籠言ふ夕飯飯腹で追使の味を知らねへ者なり知らぬ人の自由刺さる

一疊敷へ三人づ、夫ツころか何ぞの様一寐るのドツと堪しくねへもの好んで行

度ねへ場所へおかふくと瘦我慢にいふのホンのから威張サ達て行たくは手前

たちよりおきの方からうこの地金の上州訛りて碁石を掴んで斯々と斬へ出りやア

探索がどうから目をつけ三人の名迄もあがつて居る詐偽師直身御用よる身体だ

おれ能迄ごまかき氣だが若分跡の支ねへ時後起て行くまでの事此金保しお

ア入らねへから跡で後悔しねへが互い

ト五郎右衛門のズンと立て行ふとする

コレ、元貴マア待ちねへ

まんでおれを留るのだ

氣の短けい人ぢやアねへかまだ達らねへとい言切らねへ

夫なり器用に側中渡すか

夫だと言て此金の

いぐあふ無理よア貴ふめへ留せに出るごこへ出すが互い

ト袖を揮ひらつてまた行きよかゝる

五 宇 五 宇 五 宇

どしどし籠言ふ夕飯飯腹で追使の味を知らねへ者なり知らぬ人の自由刺さる
一疊敷へ三人づ、夫ツころか何ぞの様一寐るのドツと堪しくねへもの好んで行
度ねへ場所へおかふくと瘦我慢にいふのホンのから威張サ達て行たくは手前
たちよりおきの方からうこの地金の上州訛りて碁石を掴んで斯々と斬へ出りやア
探索がどうから目をつけ三人の名迄もあがつて居る詐偽師直身御用よる身体だ
おれ能迄ごまかき氣だが若分跡の支ねへ時後起て行くまでの事此金保しお
ア入らねへから跡で後悔しねへが互い
ト五郎右衛門のズンと立て行ふとする
コレ、元貴マア待ちねへ
まんでおれを留るのだ
氣の短けい人ぢやアねへかまだ達らねへとい言切らねへ
夫なり器用に側中渡すか
夫だと言て此金の
いぐあふ無理よア貴ふめへ留せに出るごこへ出すが互い
ト袖を揮ひらつてまた行きよかゝる

良 コレサア少し待ちませへ
夫千ヤア金を渡せといふのう

五人 サア

サアさりく返答を仕やアかき

ト五郎右衛門胡座をかきドツカリを座る三人は是非なき思入よて

詮方々ねへ見せ金と

奇麗なるからオイ兒貴

どりか内分よして

三人 お呉ませへナ

遠く惡黨よく分るお金せへ呉りヤア口を拭きいつつ口をきるもの夫千ヤア

側中貫つて行くぜ

三人 御勝手おませへまし

ト是にて五郎右衛門をこらよ有る金札を件の草篋の中へ入れピンと突き下しこ

かし有て

控指を手のへたちが見せ金よした一圓札どうせ束ねた跡先ばかり中々多分偽だら

小説筆端

宇 良 堪 五

宇 良 堪

宇 良 堪 五

ふが此方の金を貳千圓まさ上る手で仕組たゆゑ横柄づらにボンくと初めよ散ら
した十圓東跡ささむかりでも百圓足らぬコイツア當分小遣ふやアア困らねへと
いふものぢ

其方の恵方のあきの方札の表の恵比壽だらふが

此方の新年早々一本足らぬまじ上げられ

こんを埋らねへ事ねへ

其様よこすよやア當らねへ並木あたりをアラくして宜い椋鳥を引りたりヤア

百や二百の雜作もなくばられる腕のある手めへ達流ツ面の仕ねへが宜い

成程兒貴のいふ通り悪い跡は好いといふから

此度の一番延喜直しよ是くら跡で一杯やり

陽氣を入れて三人連寧北都へても出かひやアか

ト是時二階の口より以前の下廻お徳利をもち出て来り

もしお燗の好いのが出まました

呼びもしねへよ邪魔なところへ

ト三人是ふ喫驚し
イ、ヤ私文の先へ行くから何卒履ものを出して下さり

五 卷

ハイ畏りました

是の皆さん〇

いっいお世話でござりました

ト草篋を持ち塵を拂つて立上るを木のうしろ

ト田舎漢のこなしよある三人の詰りぬといふ忍入下廻の先よ二階下り口へ案内する此見え宜しく旅行唄にて拍子舞

(序幕終)

小説半端

二幕目 場割

小説半端

上野公園地大井下の場

根岸花岡屋敷庭口の場

同むく綾子部屋の場

淡州新堀むたの場

役 割

盗賊水鏡忠藏

お貞の神忠之助

官員花岡正義

官員溝部軍次

喜生月本雪雄

花岡娘綾子

ある者火の玉勘次

女車夫お貞

同 マツ子伊三

友達塚おれん

同 お坊主密

同 おろの

花岡馬丁おね熊

花岡下女おまつ

同 下男彌次兵衛

同 おすみ

公園地のパン屋彦兵衛

同 おなべ

本舞臺一面は平舞臺上手へよせて小高く茶店嶺松亭を見せ此間樹木上野大佛の横手鐘樓堂の書割正面奥深し勸工場の建物より博物館の方を見こみたる遠見上下樹木のうゑ込み裾どほり石垣草土手の張もの下手前へ出して一間屋根附の屋臺みせ菓子パンをどを箱に入れて並べあり日覆より松の釣枝舞臺諸々大きな葛籠石を置き総て上野公園地大佛下の体此處にパン屋彦兵衛茶を出して居る仕出し三人思ひ思ひの形にて石へ腰をかけパンを喰ひ茶を飲で居る此見え宜しく鉄道馬車のラツバ流行唄にて暮あく

△この家のパンは減法うまいが館入の方何程だぞ 彦一 一銭も二ツでございませが館がよいので大層買います

□夫ぢやア矢張此パンも木村屋から仰して来るのか 銀座の木村屋ほどでも評判だが去年中那處のパンを受け夫婦連で唄をうたつて費て歩くパン屋が有たつた

○男の官員風であてぶりの踊を踊る神さむの洋服でシヤ皮襟を彈て唄をうたつて居たが那も一時の流行者サ 彦アノ夫婦パン屋さむも道もとが官員さんだけ早く見切をつけたと見え此比では新橋邊へ店を出し稀代揚といふのを初め大層賣れるといふ事です

○何でも流行ものゝ一時の事だがアノ夫婦連のパン屋も能く賣込だものだツた

□爺さむ茶を一杯熱くして呉ふ 彦かしこまりました

ト流行唄ふあり向ふより序幕の花岡の下女お

小説集

小説集

松駒下駄まで小さく服紗色を抱へ出采り花道にて留り 今日南傳馬町の白牡丹へお嬢さまからお詠への護模飾をとり一行たが思ひの外遅く入り際お待無で入らツじやらふから少しも早く歸りませうといナア

ト舞臺へ采たる彦兵衛はお松を見て 彦オ、根岸の花岡様の御女中どちらへお出被成ましたマアお休を被成て入らツじやいませし 松これ 是は彦兵衛さむ能く御精が出ますね

ト件のを拂つて腰をうぐる彦兵衛茶を出し 彦能く精も出させぬが店を一日休みませと直に米櫃ががた付まをから此寒いの一店を張て居りませ○さうして今日何とちらへお出被成ました 松今日のお嬢様のお使で中橋の白牡丹大西まで参ました 彦ハ、ア夫で船来の護模飾といふのを賣出した小間物屋でございませか 松ハイアノ白牡丹の尾張町の出店で護模飾といふのを賣出しましたが此頃では立派に時繪も出采束髪まで一歯の歯の通りがよ一番だと仰つてお嬢様が澤山にお詠へ一なりましたゆゑ其飾を取り一行て参つたのでござりまするわいな

○ア、根岸の花岡様のお嬢さんなら縁致が好ツておして女學校で一番出采る學者だといふ事だ

□あまで檀那を持たらば定めし男女同權だといふ何とらむづかしい議論で檀那のこつばいな目に逢ふだらふ

△那縁致で其上學問が出来りやア鬼一鐵棒だから少々壓制され

小説集

小説集

てもおれならズツト平花する氣だ 彦 イエ、那お嬢さん物のお出采さるが
 決て算母お掛あさらず諸事お内場にお性質ゆゑ又様さるる方にお社合です
 おらアお嬢さんアア過るから此女中を貰ひ度もんだ 松 アレ御殿様ばかり仰い
 ままホ、ト時の鐘唄ふなり向ふより序幕の月本雪雄散髪着流し兵兒下駄
 ステツキを突き書生出て出采り花道にて立留り 雪 今日も二三の羽衣に金東を頼
 みたまど書生の身分より大金といひ味急場の事ゆゑ直に朝達しおたしと半の
 斷り同様して殆ど當惑致すのみ四百四病の病ひより貧程つらい者いないと被演劇に
 て君王が申を詞ハテ能く穿つたものぢやアア ト考へおがら舞臺に采る
 貴君お休み被成て入らつしましませし○博物館なら只今四時を打ましたか最今日の
 閉りました 雪 イヤ僕ハ博物館へ参るのつてあし 彦 イヤ左様でございまして
 か ト是にて雪雄石へ腰をかける 雪 亭主はふり大分寒いナ 彦 朝から
 雪を催して今にも降出さうてございます ト茶を出し三人の立ちあがり ○茶
 さむことへ茶代を置たせ ト三人茶代をおく 彦 毎度有つたりございませし御
 後りと被成まし 夫ぢやア又歸りし香りませり ト三人の拾せりふにて止
 手へ連入跡お松思入有つて 松 おしも斯やつて居られませむ彦兵衛さむ何もお
 小 説 集 録

家へ書傳のございませむかへ 彦 有難うございませすが直に跡から任舞ますから何
 も書つてのございませむ 松 左様ならお早くお仕舞被成まし ト雪雄を見
 て小腰を屈め會釋をし 貴君御免下さいませし トお松腰懸石をはなれ行ぬけ
 服紗衣を落すことよろしく是に氣がつかぬ ドレ急いで歸りませりあいなア
 ト右の唄にてお松上手へ連入彦兵衛の跡見送り 彦 お氣をつけてお出被成ませ
 雪雄お松の跡を見渡見おくり 彦 人おらの好い女中ぢやがあれハ御近所の者や
 ハイヤレの私の宅の地主様花岡といふ官員様の中働きの中衆の女中衆でござりませが
 屋敷が御寄貴ゆゑ雇入衆までしとやかてございませから女中と見ませむ 雪 ナ
 ニ花岡と申は官員トナ○其花岡と申さるゝの舊鳥取の藩士にて當時書記官と務めら
 るゝ花岡正義と申されぬり 彦 ヘイ左様で御座ります檀那様ハお慈悲深いよい
 お方で私しハ其お長屋に居ますが店賃などが溜りましてもツヒ一度御催促なされ
 大事もまゝ年暮りの餅米を一斗づも下さいませしと實よいお地主さまで御座いま
 せ 雪 スリヤ花岡氏の慈善家トナ ト雪雄おもひれある彦兵衛の空を見あげ
 て 彦 イヤ益す空合が惡くあつて来た○降て来ると困るうら今のうち外神田まで
 用達お行てございませむ○モシお客様何卒御ゆるりとあさいませし私しハ店を此ま

ト少し考へ 一事を頼むすがとあり實に祝びしい事でごさる 松 ほんは私
 しもお嬢様からくきくのおことづて ○ ト思入有て モシ失禮ながらお見
 受申し上ますれば御修業中との申しあから此寒中肌薄を木綿布子にお下召さへ夏
 のまゝあるお草物只今にておむかしと變り定めて御派で入らせらませりお心ふ
 錦のあまた様夫をお察し遊ばしまして親々さまがお言字は令十年二十年おのもつ
 まさらお見も貴君の外に夫のないとお嬢様の御決心 ○ モシ只今もつて貴君をばさつ
 うお慕ひおされますといナ 香 ナニ綾子どのの僕のを只今もつて忘れられず
 心に變りなごさるぬトナ 松 マアお聞き遊ばしませし ○ ト合方キツバリとあ
 り 檀那様一のアノ後のこちらへお住居當時の大藏省へお勤め遊ばしませるが鳥取
 にお出の頃剣道試合の事よりして日頃お中のお睦しかつた月本様と御絶交刺さへお
 嬢さまの先般さまのお指揮にて雪雄さまとのおいひおづけ十六にもなつたら月本の
 たへ嫁入さるふとアノ與様一の常一仰つてごさりましたが檀那様の月本如き頑固
 お者一の嫁の組ぬ一旦廢縁となつた上の主君の仰せも取消し干やと如何いふ事かき
 つぱりとお心變りにありましたと與様一イヤイヤ言説ても一度夫と定められた男に其身
 を委すが誠の道おとと様何と仰つてもおしつ變替させぬ心味は月本さまの今御膳

小説集

手もよくない御様子夫と娘を他家へ遣つてアレ見よ花岡の窓に迷ひ我子の愛に溺
 る義理を捨しと人様にうしろ指をさされるが何ほけり殘念と毎度檀那様とお争ひ遊
 しましたが三年跡一與様の肺病にて終におろくれ御臨終の時もお嬢様をお枕頭にお
 守遊ばし雪雄どのの外お男の無い假令父上が何と仰らふと貞操全く時節を待て夫婦
 とより遊ばし母が遺言守つて呉れと仰つたのが此世のお名殘夫故にこそ貴君の事を片
 時お忘れの被成ませねばせめてはお嬢様へ御變りない貴君のお顔をと見せてあげて
 下さりませ ト思入あつていふ雪雄のさ終りこなしあつて 香 スリヤ以前
 に變りし此雪雄でも綾子どののいさほどお達夫と思ひ義理をたて時節を待て居らる
 とトナ 松 モウ貴君の事のみ朝夕一思召てお出おさいまするが何をいふにも他
 人の思ひくお心の中をうち明けて仰りますの私しけりてごさりますわいな
 ア、かたけけない綾子どのの心中お貧困お陥りし見るうげもなき雪雄をば夫程迄
 に思ひくれるか ○ イヤ夫と付實の根岸のお住居へ訪問んものと思ひしところ綾子ど
 のが其志 したらいよ、以て折入て頼まよやあらぬ事がごさるがナント執次ての
 くりヤルまいかな 松 何のマア夫にお易い御用でござりまするか文でございますか
 又にお傳言か 香 イヤ、文通での事情を盡さを相成べくの面會のうへ得と頼ん

て見たい事がござつて、松スリヤお嬢様へアノおたのみが、雪お松どのさいて下され、ト謎への合方になり雪雄思入有て、うなたも知て居らるゝ通り父六之進の六十の坂を越えたる老人ゆゑ昔を守る癖あつて權家へ婿を忌嫌ひ直る道をやくのみあれ、皆世家の容れられせつとに貧困の身となりしがソリヤは、一己の生活に麥飯なりとも生命の繋げどもと願ひありし時士族總代に撰れて後産金を受取し後懸懸へ差出をべき金額のうち五百圓年賦上納の滞りしも父が私に消費せしにあらざれど總代の責免れがたく彼是心痛を見るね、縣會議員穂積氏が三百圓の辨償されしが跡に残れる貳百圓は是非に調達して明日渡せと返引あらぬ手詰の談判二百圓のさて於て二圓の金さへ出来ぬ困窮父の返金の義務た、ねは皺腹切つて云分おし身の潔白を貫く決心せしを夫と覺り子として傍觀しやたけれのあて、無れど調達の手續きありといひこしらへ安心させさせたれど斯程の金の借用と鐵むべき人とてもあく殆ど當惑いたせし折から思出せし、花岡氏我縁を組みし因みもあり舊同僚の事なれり折入て頼み入り必死の難儀を救はれたしと絶交の身も頼みを決心しつゝ、參る途中はからす其方よめぐり逢しも誠にもつて不思議のひとつ空頼めども思へども幸ひなるに綾子どの僕を夫と思はるゝなら道なるとねども此事を申入れて

小説半端

お松一叶へ呉れば夫こそ重疊頼みといふ、右の通り父が生死に拘はる事ゆゑ何卒ぞまた手引を今宵綾子どのにひそかみ逢せてはとりやるまい、ト思入有ていふお松は聞きながら怒ひのこゑし宜しく有て、松段々との入りわけを窺ひまして貴君さまの御心痛ほんよお察し申し上げますたとへ檀那様の御不承知でもお嬢様に大切をおつれあひ十二御速應がござりませう今宵私しやお手引をいたしてお逢せ申しまするゆゑお入用筋のおはおしもお直遊はすがよろしうござりませる、雪スリヤ手引いたして綾子どのに、松アモシ〇、トあさりへ思入あつて耳口をよせささやく、十時の鐘を相圖にお庭の口からお忍びなされませ、雪然らば今宵十時を相圖に、松お手引いたすも貴君様の御孝心のほどを存じますゆゑ願ひが叶ふか叶ぬか其黑白に分らねどそちに逢ひしも護膜癖の、松そのお頼みの講義さへ變らぬ松に蕨桐子、雪むおもひもうち解けて、松此結び目のしつくりと、雪堅く約して、松マアお別れ申しませうわいなア、ト流行唄ありお松の服紗づゝみを持ち思入有て雪雄に挨拶し列れを告げて上手へ急ぎ道入るおと雪雄のつくゝと見送りて、雪十時といへば六時間まだ餘程の間もあまの坂本町の所用とすませ時をはかつて花岡へ〇、ト少し考へ、ト道にて来るよを

相待ふか ト唄より雪雄も同じく上手へ這入る此唄をかりて向ふより序幕の
 女車夫お貞の悴忠之助やつし形草履をはき出て来り花道にて 忠 慈母さんが昨日
 から持病の癪がおこつたのでろくろくは仕事もせず居るおまおふべのお菊をこし
 らへて二人してたべたれど今日のお米を買ふことが出来てまだお飯をたべないから
 お腹が空いておられないが私しは樂に遊んでゐるおまおのみに思はねど慈母さん
 今しめた車を挽てお出でつたが照ひもじい事であらふ斯いふ時もおとつきさんが居た
 り宜からふに何故歸つて来て下さらぬと思出すと悲しくなつてならぬといふ
 ト慈ひの思入にて舞臺へ来り床見世を見て 忠 やあまは出て居るパン屋さんの
 どこへ行たか居ない様子 トパンの管をすかして見て 私しは宜いお慈母さん
 さんが今朝から何もおたべでないら此パンと一ツ上たなら照お悦びであらふどう
 是をひとつ買ひたいもの ト不しいといふ思ひ入れいろく有て 人さまの
 物を只取て泥坊をするのだからお廻りさん見つかると直縛られておとつきさんの
 様は總役よりられるとの事坊は宜いおつかさんよ ○ ト盗まふとしていたの
 らふイヤ〜いくら困つてもひもどくつても盗みをしてはならないと不斷慈母さん
 がおいひだから思ひ切て行ふ〜 ○ ト上手へ行きかけしがまた立戻り た

小説筆端

つた一ツ盗んだところが見つかりさへ仕なげきり知れぬとまい ○ トあたり見
 廻しこなしあつて お銭が出来れば返しますから何卒二ツ貸てお呉れ ト忠
 之助の濟ないといふ思ひ入有てト思切て箱の蓋とあけパンを二ツ袂へ入れやうと
 する此以前より上手に幕明の仕出し三人此を見て居て此時前へ出 ○ やあまとい子
 僧め □ ウヌパンを盗みやアがつたナ △ 取つちめろ〜 ト忠之助を引
 据る是よて件の箱を引くり返さ此とたむよパン澤山舞臺へ轉げる 忠 とおまむ堪
 忍して下さい〜 ○ 堪忍しろおすさまじいりぬの多分畫鴛か巾着切りの子僧だ
 らふ □ 此山下を乗よして居て往來の人の懐中物を抜きとる奴の仲間だらふ
 △ パン屋が居ねへを幸ひ一箱ごと持て行ふとい太へ奴だ交番所へサテ〜一踏ま
 三人 ゆけ〜 ト手暴く引立る 忠之 イエ〜スリヤ泥坊でらござりませぬ慈
 母さむ達たさよツと盗むたので御座りませ 忠 此處へ下手より以前のパン屋
 の彦兵衛出て来り此体を見て 彦 ヤパンが大變よこぼれて居る ○ 此の如何したの
 でござります 忠 お前が店をあけたので此奴めが空巢をねらひ □ パンを盗む
 て廻る處をあら達がつかめへて 三人 やつたのだ ト彦兵衛思入有つて
 彦 夫の有難うござりまするイヤ此奴の太い子僧だすてむお奴の以後の見せしめ思入叩

さのめして交番へ連れて行ませり
 三人 夫が宜い
 忠の 何卒堪忍して下さ
 いまし
 ト手を合せ詫るを聞入をト、四人は忠之助を手強く打つ此處へ
 上手より序幕の木鼠忠藏散髪半纏着なぐし三尺帶駒下駄遊び人の持らへふて出て来
 り此体を見て忠之助を圍ひ四人を留て
 忠藏 何だう諺の知らねへが相手の子供だ
 了簡して違むなせへ
 彦イエ子供でも大それた盗みをした太い子供
 見
 せしめの爲任置ををるのだ
 □ うつちやツて置て
 三人 お呉んをせへ
 ト
 いふを宜しく留て
 忠 盗をしたと云ふから何れ宜くねへ奴だらふが見りやアま
 だ漸く七ツかハツ相手よするあア大人氣ねへ
 彦 夫でもパンを盗みましたら
 忠 ハテおまが留たせりやア盗むだパンの其代ハ十倍にしても辨めへ様ならマア
 くれれ預て下せへ
 忠の をちさむ何卒あやまつて下さいまし
 ト忠之
 助忠藏の袂へすが涙ながら頼む
 忠 アレ那通り頼むて居るうらマア了簡して違
 て呉なせへ
 ト是にて皆々お返し有つて
 彦 盗むどと云ひながらまだ手を
 付々ぬ此餘パン丸損としたといふで又私ッ店をあまたのが無念でございます
 忠 其奴
 うら夫での貴君があらすに代を拂つて下さるから堪忍して違りませり
 忠 其奴
 有難へ夫でこう留た甲斐がある○
 ト懐中より十錢銀貨を出し
 盗むだバ

小説年端

シのたつたニツ十錢で買ふから是で了簡してやむなせへ
 彦 エパンがニツで十錢
 ○ ト受とり一ツ五錢づ、一賣れるから何卒残らぬ盗で呉れ宜い
 盗ま
 きた當人がうれて言分が無ればから達の彌次馬だ
 ト仕出しの内一人が忠之助
 の顔を見て
 □ や此小僧の淺草でよく見掛る女車夫のむすこだぜ
 成程親孝
 行と評判の子僧だつたこいつの飛だ可愛きなる
 三人 事をしたをア
 ト三人
 後悔のこまし宜しくある是よて忠藏のをて石へ腰をかじ
 忠 アモシ此小僧の親孝
 行もののでござへますとへ
 □ 親孝行も親孝行如何いふ諺か知らぬが此お袋の女
 の癖に夜一なると車を引た
 ○ 此小僧が手助とよまわい腕で跡押をし諸方を引
 てあると評判もの
 △ 黄色い癖で御免くといふのが客の耳へ這入り可愛きうど
 と下りて違つて
 □ 其身の上の不仕合を聞て幾程か恵んでやる人も中には有ると
 の事
 彦 ア、夫やア評判の親孝行アノ女車夫の子で有つたり
 忠 形は些大が
 うだがまだ九歳一ならねへ子僧そんを親を大切にをる心で何で葉子パンを盗ん
 だらふきつぱり理屈がさからねへ○コレ子僧手ゆへ其様一孝行をしあがらなんて人
 のものを盗む氣になつたのだ諺があらふ隠さぬ早く話して聞せねへナ
 ト是
 にて忠之助涙とみ思入あつて
 忠の 今パンをぬすんだの私しつべたいので

小説年端

おく慈母さんが今朝さらまだお飯をたべないから無ひもじからふと思ふゆへ夫で盗
 みました○是といふのもお父さんがそでない人ゆゑそれにあやかり盗む氣がしまし
 たのであらふといふナ
 忠 ナニ盗む氣の無つたがちやんがそでない人ゆゑ夫よあ
 やかつたといふ如何いふ譯か
 忠のお父さむの盗みをして懲役になりましたが其胤
 のお父さむの恥だから名前如何も
 て下さいまし
 ト合かさきつむりとあり
 お父さむの恥だから名前如何も
 言れませむお父さむの私が生れて間もない時人の物を盗むたので二年とうの懲役
 になり慈母さんの満期とて歸つて来るのを樂し待て居た甲斐もあくお父さむの
 家へ歸らず何處へか穴落をしとやら夫から跡の坊と二人晝間の人の賃仕事や衣類
 の洗濯をし夜の男の形をして車を引御主人様の御手助をしてあすます故大体を事
 での休め昨日からの雪催して持病の癪がさし込で前宵早く歸つたゆへ今朝にお粥
 をお隣の御主人様へ進さければ坊と慈母さむの喰ませむが夫でも仕事をせむ居
 てのお錢が少しも取れぬゆゑ最慈母さむの仕事に出たが無お腹がまいたらふと思ふ
 と悲しきに此箱のパンを見て堪はられぬ盗む心があらふと出たのも親の血脈を引
 さそである事を仕たかと思ふと私の悲しくつて成ませぬ
 ト此臺詞の潤忠藏の

小説筆端

小説筆端

忠利口

自分の身の上引競べ若や我子でなからふかといふ思入宜しくあつて
 お様でもまだ子供何の親仁が盗をしたつて其子が盗を此度するといふ譯も有るめ
 へうりやあ血脈の親子でも其様を處へ理屈をつけ泥坊をしちやア決してならぬ其
 そでね親が是を聞たら定をし心持を悪くするだらう最々其様な事を思出さむ早
 くお袋の手助をして遣るが宜いぜ
 彦ソリヤア眞實で御座ります親の因果が子に
 報ふといふ事いひますが夫も悉皆背のたとへ
 忠左様だ親の代々穢人だと
 能香具師が言立をしたも
 御一新から改ましたと親でも惡の事ををれば直
 縛られるが
 其子が正直ものあればお祟りのあらふ答やねへから是うら親の惡
 い事い 彦 おめへ決して見習ぬが宜いぜ
 ト是を聞き忠藏のギツクリ胸へ
 あたる思入 ○ なんだ彌次馬に出て可愛さうに此子僧を打たが無痛かつたらふ
 □ サア打賃の手を出しな
 △ おれもいくらう散財しやう
 ト三人めい
 何程づか錢をやる
 忠の 是の有難うございませ
 ○ モシ親方其ならさきへ
 三人行きますせ
 忠 マアいとチヤア有りませんう
 ○ 是から解へ 三人くり
 こまふか
 忠 ト仕出し三人の捨せりふあつて下手へ這入る跡忠藏の財布より紙幣
 を出し
 忠 コレ子僧おまき小遣をやるから受へさあ
 忠の アイ 忠の 是の二圓

あるから是でうめへ物を買てお袋や御主人さまよたべさせるかいよ
 ト出すを
 押返し 忠の イエ〜こんなお金を見ず知らずのおぢさまに貰ては慈母さまよ
 叱られるるは是にお返し申します 忠へラ坊上堅い事をいふ奴だナ〇是が大まい
 ナ金ギヤアなしたつた二圓だそむな事をいはず取て置くが宜い 忠の イエ〜
 こむおよお紙幣を手にとつたの坊ははゆめてだ 忠 エ、外聞のさるい〇テモ正
 直を奴だるア 忠の 夫でのお賞ひ申してもよいるねへ 彦 折角下さる御親切お
 もらひ申して行てお袋に早く悦ばせてやるが宜い 忠の そむおらは是を〇おぢさま
 有難うござりませ 忠紙幣をいたゞき悦ぶこなし宜しくある 忠 たつた二圓
 ぞそむおよも嬉しいのか〇 トホロリと思入あつて ア、年とり度ねへも
 のだ親が死ても涙一滴おなした事のねへ此おれが血筋の縁か此子僧の身のうへ諾し
 を聞てから涙が胸へ突きあけてホロリとおおしたひと啼〇もしや別れた〇イヤ餘程
 おれも焼がまつつゝ 忠の こんなにお金をお呉なさる此おぢさまが慈母に行たお
 父さまむなら坊を誠々嬉しいがよそのおぢさまむてと〇 トこおし有つて氣をかへ
 こんな宜いおぢさまむをお父さまむ持たようの子を羨ましいナア 忠 ナンダ慈
 後に行たお父さんだぞエ、延喜でもねへ事をいふナ〇ア、鶴亀〜 と延喜を

小説巻

祝ひよろしくこなし給る 忠の 其てとおぢさまむ此お金を慈母さまむに見せてよろこ
 ばせるよ 忠 オ、些も早く見せるがい、 忠の そんならをぢさまむ有難う
 ト嬉しき思入よてそろ〜下手へ行く 忠 ア、コレ少し待つた 忠の をぢさま
 何か用かへ ト立ち戻る顔をジツト見て 忠 氣をつけてゆきなよ 忠の ア
 イ〜 ト忠之助も何とやら跡に心が引かされる思入にてふり返り〜下手へ
 這入る忠藏のもしや我子でなないかと思ふこおしあつて立ちあがり跡を見送り伸あが
 つて見るバン屋の彦彦兵衛も思入有て 彦 今此小僧を垢トとて色を日よやけ真黒
 だよ目鼻たちあら口もとまで愛敬のあるうまきつぎ今よ立派な男よあらふが丁度お
 容さまよ生うつし ト見くらべる忠藏は更し氣がつかぬ思ひ入れよて向ふを見
 ながら 忠 生れて七夜もた、ねへうちに列れたゆゑ顔に見覚えはねへけれど何處
 やらあれよ〇もしや今のが〇 ト一足さきへふみ出すとたん馬車のラツバを吹
 く忠藏は胸りしてエ、胸りさせやアがつた トヒヨロ〜と跡びさりして床几
 へボンと腰をかけるを木のかしらにて道具變りよなる 彦 ナニあれは鐵道馬車が
 出るのでござります ト此見えよろしく時の鐘流行うたラツバの音よて此道具
 まはる

本舞臺中足の二重本縁附本庇此下欄間を取つ々正面上手に一間の床間是は春掛の軸をか多梅を生じ花瓶を前に置き是は續いて違棚此次銀地へ盡りたる二枚の襖出遣入あり下手の襖打廻して障子二重の外矢張本縁附茶室の下地窓に鼠壁の書割上下とも好みの板扉ふて見切り是に木連格子の通ひ口をつ々屏の内より見越しの松石燈籠下草のあしらい石のつくびひ生花の梅の立木此外檜の木杉など何れも生木の植込み飛石の模様よろしく都て根岸花岡庭さまの体この二重に序幕の花岡の令嬢綾子東髪好みの持へ以前の女お松前垂がけ友達娘おれむお園おすみいづれも東髪島田かつらおと思ひの娘持へ下手に下男彌次兵衛白髪鬚のあるかつら木綿やつし下男の持へにて道具留ひ此傍は詠へのランプを照し皆々歌ふるたをとつて居る見え鞠唄雪おろしにて道具留ると日覆ひより雪をふらせる

綾 由良おとを渡るお人 松 ハイ行方もしらぬ戀の道かお 綾 山里の冬どきびしき増りける 人めお艸もかれぬと思へば君がため惜からざりし 園 ハイ長くもぶなとぬ私しがとりました 綾 藤原の興風難をかも知る人よせむ高砂の 松 お前の取つたは龍因法師 松どむの鼻毛をぬいたぞ 松 アレ夫の違ふといノ 松 お前の取つたは龍因法師の下の句○松も昔の友ならおくよといふのハソレお前のまへに有た此方鼻毛を抜

いたろへ 彌 いや此奴の一番やられたろ 綾 一遍どころろ彌次兵衛は是て袋を三度背負たから約束通り其鬚を今日是非とも切て仕舞わいな 彌 イエ如何して此鬚を生涯切る事いやだくと頭を両手にて押へる 松 夫でもゐるたで負たらばお前鬚を切りませうといふたでございませぬ 彌 ア、惜ないお物怯を人 園 なむても鬚を今此處で 切りなさんせへらまで大切な鬚を切らさうとぬ真に惜ないこむだ○ワアと泣出す 綾 蚊蜻蛉のやうな其鬚を切るの泣程いやぢやとぬ真に舊弊を人ぢアナイヤ舊弊くと能云ツしやるが此鬚よ種々と理由のある事夫ゆゑむむとぬ切られぬへれた 松 御前の鬚ふ理由があるとい 綾 コリヤ如何様理由でござむすか 園 此處で話して 皆々 さかせなさんせいナア 綾 と是にて彌次兵衛をなしあつて小ツ取かしの事ながら夫で理由を話しまさきい○ と鞠うたの合方にあり私が園を出る時死だ驟アがいふのに此頃東京の開化とやら流行つてさむざりといふ天窓よさきさるさうが其散切になると直に兵隊よされて鐵砲を擔ねばならぬへ夫も若へもんならエ、が御前の年とつて鋤鋤とつて野らへ出るせへ腰へい痛むといふから若鐵砲擔げと言われると行ねへ私が一生涯の頼みだ此鬚切て呉れるおと呉々云

ふたが此世のお別れ政蜻蛉でも蝶々でも死だ鼻アの魂ひの止つてゐる此らよん鬮を
 りや滅多に切れましねへ ト涙おがらふ此時襖のうちにて 鍋 アレ彌
 次兵衛どむろんお虚言を御吐きてないよ 彌 ヤア那岸のお鍋どむか ト合方
 だつぱりとあり興より下女御鍋襖をあけて出て来り下手をまわり 鍋 マア俗嬢様
 御聞遊ばせ此彌次兵衛ぢい申す事アアリヤ皆虚言でござります 彌 ハア生れ
 てからまだ虚言といふものを吐た事おねへおれさまだお今の話しが虚言だとい
 虚言もうそ大のうそ若皆さん聞て下さいまし此爺の年にも耻を何ぞといふと私を捕
 へて夫のく吉だるい此間もお聞遊ばせ淺草へお使一行た歸り一内地で買た豌豆ま
 めを一錢ばかり土産に持てコレお鍋どんたつた一晩で跡ひだりおしおいうらおれの
 いふ事を聞て呉れやイノく取越ひつこく口説て私をば放しませんから私しも悔
 しくなりまして何程之食の時のまづい物なしても此様る白髪のお皺くちや爺の大嫌ひ
 私や若ひ人が好だと斷りましたら此爺が泣出しまして〇マアお聞遊むせ〇一旦那の
 齒から外へ出して頼むだ事此儘おちかれて引込で生涯の耻辱そんならおれがお賞
 へ申をお給金をそつくりお前へ進るから何卒一遍いひ條を通させて呉れ夫が虚言お
 ら此鬮を切て仕舞ふ法もありとお前いふたてのういかへ夫を人が知らぬと思ふて鬮

アの記念も聞て采れるよ〇オホ、マア私しがあらぬない皆さむお笑ひ被成て
 下さいまし トこなしにていふ 松 夫では彌次兵衛どん其時鬮を切らふと
 いひましたか 綾 ホンによう虚言とつく彌次兵衛デヤワイノ ト皆々一同お
 笑ふ 彌 ア、餘々いふ事をいふお鍋どん飛だ面目玉を踏潰したおらもそんならお
 鍋どんの惡事をこゝて訂くべいか 鍋 エ、夫お及むぬ餘慶お口敷のさかぬ物だ
 ト此間始終雪をふらせ庭へ大分積る令嬢綾子庭見わたして思入 綾 二三日跡か
 ら催した此雪久しくお天氣が續いたゆゑコリヤア今宵の積りさうぢやあいな 松
 ホンニ大粒お雪よりこんな細お雪が却て積ると申しまをれば仰る通り今夜の積るで
 御座りませう 積るといへば晝間からお歌がるたてよい樂みを致しましたが積
 らぬ間にナニお園さむ 園 ホン一早く歸つてまた翌日上りませう 夫なら綾
 子さま私しもお暇を 三人 致しませうといナア 綾 マアよいで御座んせぬか
 まだ今九時を打たばかり是から私しが遠入まして皆さんのお鼻毛と抜てお賭物を獨
 じめを致さねばありませぬ 松 最少のうちお三人とも此處で遊ばなされませ
 ぬか れ イエく歸りませぬと又父に叱られますわいなア 園 お歌がるたの面
 白さよツヒ長坐をしてありません 夫では綾子さま私じどもいとおいとまを致し

ますので 三人 御座りませう トいづれも解儀をさる 綾 それでいお引留
 申しませぬ又翌日お出なされませいなア 彌 ドレおらが
 送つて進ませいいう 鍋 アイ御苦勞ながらお家まで送つておあて下さいよ私し
 お嬢さまの御代理ドレ御案内を致しませう トお鍋さまにたち三人の嫁の座
 をたちて 左様おれば御機嫌よろしう 綾 急度あしと又お出なされませ
 三人 ハイ上りませうわいな ト友達嫁三人の思入捨せりふ有てお鍋彌次兵衛附添ひ
 興へ這入跡お松をなしあつて綾子の剣へ寄り 松 お嬢様あなたよお悦ばせ申しま
 も事おござり升あいな 綾 ナニ私しお悦ばせる事とい○ ト少し考へる思入
 母てソリヤマア如何様事ぢやぞいな 松 お悦ばせ申します事いナ○ ト傍
 へ思入じてモシ貴君が日比お慕ひ遊ばす雪雄様に量らすお目も懸りましてござりま
 する 綾 エソリヤ言號のアノ雪雄様よ 松 今日南傳馬町の白牡丹へお使し参り
 ました歸懸ひ上野公園の大佛下で不思議にお目もかゝりましたが誠にお痛のしう存
 じましたいまだ御修業中の書生さんとの申ながらお形装もそぼろの古布子見る蔭も
 ない御零落私し最涙々先立ち胸が一ぱい母なりました ト憂へのこなき綾子
 の嬉した思入母て 綾 假令形装の見苦しくともよりママ御無事でお出被成たナア

○シテ其方の私が此極岸小居事をお話し申たかや 松 お話し申た段でござりま
 せぬ御川造様の御遺言うら貴君が一旦言號ゆゑ只今以てお慕ひ遊ばす事をもう呉々
 お話し申ましたら 綾 アノ何と仰つたぞへ ト恥かしき思入 松 ソリア此様
 母零落したを慕ふて呉るといふかたけいなとお眼へ一杯お涙をためてお悦び被成ま
 したが夫に付貴君へ何かお頼ごとやら有るゆゑ是非とも今宵忍んでお出遊ばす事
 にお約束を致しました 綾 エソリヤ何うお頼ごと有ると仰りましたか
 其お頼みの一部終始の概略を聞申しましたお實に申は如何なれど今では餘程の御
 難詰まうしお聞被成ませ 松 都合方さつぱりとあり 雪雄様のおと、様六之進
 様御存知の通のお方のお没御壽町とやらおしがないお暮し雪雄様よあるお醫
 者へ御入塾とやら今差當る御難儀の大旦那様のお身も拘はる一大事縣廳へ御納めの
 金二百圓明朝まで一調ねむ六之進様の繩目の恥さもあくても昔堅氣に若此金が出
 来ぬ時の切腹するとの御覺悟を傍で御覽遊ばす雪雄様の心の切なき如何か才覺致し
 て態と金子が手に入る様お仰つたのも一時の方便無かし待て御出であらふと四方ハ
 方駈廻り金子の都合をなされましたか何をいふにも今の御身でい所詮出采ぬ二百圓
 思ひ出せば花岡の令嬢とい言号今の身分も相違して隔たる中となつたまど親の命

を助けたさ此事頼み入れと私への達てのお頼み此處ぞ無々貴君様がお慕ひ遊
 びす雪雄様へ日頃の貞操をお見せ遊むすによい時節と存じましてお心變らぬ處を
 摘んでお話し致ましたらるたにけるいと仰つて今宵十時の鐘を合圖は是へ忍んで必
 ずお出いありませうといナア 綾 夫なら今宵十時の鐘を合圖にアノ此處へ雪雄さ
 まが トこなしあるお松も思入有て 松 旦那様への濟ませぬがあかの他人とい
 ふてのあし一縷御縁を結ばれしお言号の雪雄様此先どの様な事が御座りまして不
 義のお名の御座りませぬ私しが是非ともにお手引致までござりませう 綾 ホン
 一夫り宜ういふてたもつた父上の今とあり如何いふ思召があつての事々雪雄様や六
 之進様を因循姑息と仰れどおなくありの母上の御遺言一一端縁を組し上の外一本夫
 りないものとし心定めし雪雄様 松 其御心も君が為惜うらざりし命さへ
 歌がるを取あげて思入れ 綾 ゆくへも知らぬ戀の道たよる木蔭も驚の
 同くくうたがるたを取つて 松 根岸の里の兵竹一〇人傳ならでいふよしもがな
 綾 よしの、里に降れるしら雪 ト又かるたを取上るお松の縁先へ出て空を見あげ
 松 マア今の間一太層積りました ト又かるたを取りあきて 戀ぞ積りて淵と
 ありぬる〇雪といふ字ハ 松 モシお嬢さま雪ハあなたの御好物 綾 アレろんを

事を〇 ト綾子恥かしれ思入にて有合ぬ百人一首の本を取て顔を隠す 道具が
 りりの知らせ 言つていいやぢやあいなア ト此模様よろしく翰頃雪下し
 て道具廻る
 本舞臺一面平舞臺正面四尺家根附の門兩扉出遣入りあり此左右板の堺此内より見
 こしの松堺の下小高き石垣の書き割り此前諸處よきて石音無川の流れ浪布を敷た是に
 花崗石の橋をかけ上手の堺うち雨戸を建切りし二階家此雨戸後にあけたて有り舞臺
 一面に雪布をしきつめ門家根より立木まで都て雪もちよて根岸花岡宅庭口の体よろし
 く時の鐘雪おろしよて道具留る ト合方よなり頻に雪降る上手より以前の下男彌
 彌 ア、寒い今の間はゆつばう積つたがぶらぶらが國の事と思へば此位の雪ハお茶のこ
 ぢやがま由東京の水が深込むとやつむり少しの雪でもつめてへ〇イヤ此處のお家を
 どい、家のねへだが十時を打つと火の廻り一拍子木を打て歩かせられるのハ實に辛
 しいア、何でも二ツ宜い事のねへもんだ〇火の用心く ト拍子木をうつ正面の門
 のすちより以前の下女お鍋番傘をさし下駄をはき出て来り 鍋 オヤ彌次兵衛どん
 るへ御苦勞く 彌 オヤね鍋どんかへ歌がるたを取て遊んだ爵が忽ち来て此雪の

中を火の廻りといひ随分つらい役まりだ 鍋 寒からふねへ其替り今檀那様がお
 降りあると御酒が始まるから残つた物が有つたらお前の部屋へ持て行てあげやう
 あいな 彌 また檀那のお降りてねへか多分今夜の柳橋の新橋ありへたとまりか
 も知れぬ併し檀那のお残りの酒肴を持て来て呉ると言つしやるやあめへらお持て行
 へる馬丁の刻が處で己が處でいあんめへ 鍋 イエくあんを薄情な奴に誰か
 まふものかね 彌 ア、夫てい何か瀧は降る事でも出来たかね 鍋 アノ馬丁の
 氣が早く此頃ていお松どんをやたらお舉るうら私しやア悔しくツてならあいな
 彌 エお松どむを舉るといふ夫の正直あんとお前と競べれば此雪とわらが紫下へ入て天窓
 をたる炭團ほど容貌が違ふから二ツ取りなら誰だつてお松どんの方をとる筈や
 鍋 エ、お前迄がうんな事を夫てい何うお臺所も有つても是から遣りしあいな 彌 エ
 餘りくきた事もねへ痺に 鍋 アレまたそんな憎て口 彌 ドレ一通通り廻つて
 こやうか○火のまはりく ト拍子木をうちなから彌次兵衛の下手へ這手る
 鍋 おれ程十時とお約束をして置たし溝部さまは如何なききたる多分またお好はお酒ふ
 お酔ひ遊むし時をお間違へおさんしあ見え○ ト此時とこの鐘なるおまわ
 の鐘はたしる十時○ト向ふへ思入して待たる、身より待つ身のつらさといよくアア

言たものぢやナア○ ト思ひ入れ有つて 夫のさうと今夜のお隣の櫻木様に
 何うお愛度があつて濱町うら清元の太夫が来てお淨瑠璃があるともら最う初りさう
 な物だがドレ清元でも聞てからせめて十二時までお出を待たか ト合方きつむ
 りとなりお鍋のむかふへ心遣ひをしあがら門のうちへ這入り扉をしめ切る時の鐘合
 方雪おろししなり向ふより以前の書生月本雪雄下駄をえき番傘をさし出て来り花道
 よきところよとまり 雪 黄鳥や根岸のさとの幾曲りと近きころの俳人が秀逸近來
 の追々ひらけ何れの風流韻士の住居か数寄を競へる垣つゞき幾曲りなる此邊よて小
 川をまへし見る家とお松どのの話しが向ふし見へる一構へて必ず花岡氏の邸宅
 ならんあれへ參つて音あいな見ん左様ややく○ ト雪頻りに降り雪雄は雪風よ
 歩み悩む思ひ入れありてト舞臺へ来り下駄の齒へ雪の袂まりしこおし宜しくあつ
 て 先刻より降出せし雪あれどまよ、くうち積りしコリヤ下駄の齒へ雪が積り
 歩行するよの甚だ迷惑幸ひこれなる石橋よて下駄の雪をむかとして行ふる ト
 是より正面の門の石橋へ下駄の齒をうちつけ雪を落を思入この音を聞きつ々たる心
 にて門の内より以前の少女お鍋をつと出て来り薄暗くて見えぬこなしめて小聲よ
 鍋 も、先刻うらどんお待ち申またか知ませぬサア少しも早く此方へお這入あさ

れませいなア 雪 左様いふこゝろ花岡氏の 鍋 ハア何も仰りませをお嬢さまが
 さいぜんからお待ち無でござりますわいな 雪 スリヤ冷嬢にの僕の夢を〇 ト
 いふを 鍋 ハテ大きな聲での聞にまするいな 雪 そんなら何卒手びきして

サアおいであされませ トお鍋の姿が分らぬ無て約束した溝部軍次と思ひ違へ
 雪雄の手を取て門の内へ引き入れる雪雄のまたお鍋をお松と思ひト、手を引れて門
 の内へ這入跡をそつとしめる是と入違ひト下手より以前の下男彌次兵衛賢之徳利を
 さげて出采り 彌次、寒い〜雪の鷲毛に似て飛で散亂すとの強氣よむつかしい
 お經の文句だがおらりの雪がかやりに寒くつて飲んで散財すとの如何だ今五んべい酒
 屋で借て来たが此様に寒い晩の酒でも飲ねへての交げねへ〇夫のさりと今酒屋で
 今日の新開だといつて貸て来たが寝ず番ををるよ新聞を讀で居るのが何奇たお
 しみだ〇 ト懐中より觸れ書を出し灯燈を取てすかし見て思ひ入れあつて
 おらりの繪入朝野が好ただが是の讀賣か東京繪入か夫れともやまとか何卒繪入朝野お
 ら宜いが トひらき見て淨瑠璃ぶれよある ナニ〜淨瑠璃名題 名も黄鳥
 此初音の里の聲面白き獨吟の二節 忍戀雪情話 清元延壽太夫獨吟おて相勤め
 申候〇や何だ、是は新聞でいなやうだ〇いよいよ此處淨瑠璃とじまり ト腰

の拍子木を出してチヨント打つと道具替りの知らせ 彌次む左様にお讀み下さ
 りまし〇火の廻り〜 といひながら彌次兵衛の上手へ這入るあと雪おろしめて
 此道具まゐる

本舞臺もと此座敷の道具へ戻り下手庭の遠見をうち返し隣の二階座敷の心母て一面に
 障子を建さりある二重ふり以前の綾子物思ひのこなしよてままい詠へ二枚折の銀屏風
 をあて此見えやそり合方雪おろしよて道具留る 綾 ねんに人の子と生れ早く母様
 にお別れ申した程不運なものなさいものチヤナア〇先刻お松が量らむも言號けの雪
 雄様は公園地よてお目もじして残らぬ聞たお身の御難儀を二百圓のお金がおけまば
 舅御六之進様は御切腹どうかして其お金を持へといと私へのお頼み二百圓の安け
 れど如何いふ事お父上よの言號せし雪雄さまの兎も角も六之進様の頑固よてあんな
 者と縁を組んでの官を勤むる身分の恥音信さへも致さあとな〜からの私しへお
 諾し又おなくなりのお様おの今の際になる迄も一端結びし妹背の縁の那雪雄が
 りたへとも様がお承知であらうとも本夫の獨と心よ忘れぬ久しう添とげよ是が
 其方へ遺言とお松を側へお呼被成て呉々どのお申し置き今宵お父上様のお留守を幸ひ
 お松の手引で雪雄さまをね忍むせ申すお約束といひながら若これが父上のお耳に

れませいなア 雪 左様いふこゑの花岡氏の 鍋 ハア何も仰りまををお嬢さまが
 さいせんからお待ち無でござりますわいな 雪 スリヤ冷塚にの僕の参るを〇 ト
 いふを 鍋 ハテ大きお聲での聞はまするいな 雪 そんち何卒手びきして
 サアおいておされませ トお鍋の姿が分らぬ無て約束した溝部軍次と思ひ違へ
 雪雄の手を取て門の内へ引き入れる雪雄のまたお鍋をお松と思ひト手引れて門
 の内へ這入跡をそつとしめる是と入違ひト下手より以前の下男彌次兵衛貧乏徳利を
 さげて出采り 彌ゾ、寒い〜雪の鬚毛に似て飛で散亂すとの強氣よむつぬしい
 お經の文句だがおらの雪がかやりに寒くつて飲んで散財すとの如何だ今五ンべい酒
 屋で借て来たが此様に寒い晩の酒でも飲ねへての交げねへ〇夫のさうと今酒屋で
 今日の新開だといつて貸て来たが寝ず番をまるの新聞を讀で居るのが何奇たお
 しみだ〇 ト懐中より觸れ書を出し灯燈を取てすかし見て思ひ入れあつて
 おらの繪入朝野が好ただが是の讀賣か東京繪入か夫れともやまとか何卒繪入朝野お
 ら宜いが トひらき見て淨瑠璃ぶれもある ナニ〜淨瑠璃名題 名も黄鳥
 此初音の里の聲面白く獨吟の一篇 忍戀雪情話 清元延壽太夫獨吟ふて相勤め
 申候〇や何だう是の新聞でなないやうだ〇いよいよ此處淨瑠璃をじまり ト腰

の拍子木を出してチヨント打つと道具替りの知らせ 彌 皆さむ左様にお讀み下さ
 りまし〇火の廻り〜 といひながら彌次兵衛の上手へ這入るおと雪おろしめて
 此道具まゐる
 本舞臺もと座敷の道具へ戻り下手庭の遠見をうち返し障の二階座敷の心母て一面に
 障子を建さりある二重ふり以前の綾子物思ひのこるしよてままい詔へ二枚折の銀屏風
 をあて此見えやこり合方雪おろしよて道具留る 綾 わんに人の子と生れ早く母様
 にお別れ申した程不運なものなまいのチヤナア〇先刻お松が量らをも言號けの雪
 雄様一公園地よてお目もじして残らぬ聞たお身の御難儀を二百圓のお金がおけき
 舅御六之進様一の御切腹どうかして其お金を持へといと私へのお頼み二百圓の安け
 れど如何いふ事の父上よの言號せし雪雄さまの兎も角も六之進様の頑固よてあんな
 者と縁を組んでの官を勤むる身分の恥音信さへも致さかとおね〜からの私しへお
 話し又おなくなり母様ふり今の際になる迄も一端結びし妹背の縁の那雪雄か
 りたへとも様がお承知であらうとも本夫の獨と心よ忘れぬ幾久しう添とげよ是が
 其方へ遺言とお松を側へお呼被成て呉々どのお申し置き今宵父上様のお留守を幸ひ
 お松の手引で雪雄さまを忍むせ申すお約束といひながら若これが父上のお耳に

入らば其時に父上えは不孝といつて母様の仰せを背くは是また不孝此身はひとつ
 二道の懸路はまよふ此綾子はん舟浮世はまゝならぬえの午ヤナア
 付下手二階の障子を引取取る此内は清元延壽三絃彈よろしくすまひ直に淨瑠璃舟を
 上るり「降しさる雪は傍りもしむ」とまた宵あがら此里は芽出し柳に雪持
 る梅の蕾も寒あけの空さえかえるつめさき堅い娘の熱くとあたる火桶舟物思ひ〇
 トよろしくあつて綾子先刺松のいふのよ十時を合圖は庭口を忍んでお出な
 上るり
 さるとの事今方うちしに陸に十時最うお出被成さうあものじやをア〇
 「待身はいと、長火箸桑柄ふ灰を搔まらしいの字ろの字とかく文字も終に雪と書
 消してまたかたをこす櫻炭溜りしぜりの亂れてゆくつと逆上る娘氣と氣轉さかせ
 下女お松雪雄を連れて一室よりト此文句の中綾子の火鉢舟あたり火箸にて
 灰の中に文字をかく事など宜しくト、下手の襖をあ々以前のお松雪雄をつれて出て
 来る雪雄は間のあるさこあし有て下手は顔を隠しうづくまり居るお松側にゐて
 松お嬢さまお悦びなされませ〇彼お方をお連れ申しませといナア
 綾エナア
 ノ雪雄様をト合方彈き流しにて松マアお聞被成ませよい時よい事
 御座りませ物で如何いふ譯か分りませぬが日比意地の悪いお鍋どのが雪雄様のお手

を取て此お座敷の入口迄参りましと處いつもの瀬が俄に差込み其儘そこへ倒れまし
 たが私にも不思議に存じまして雪雄様にお聞申したらお下駄の雪を石橋でお落し
 被成ました其音を聞たお鍋どんが大層お遅う御座りましたと其儘お手を引さまして
 お部屋へ御案内を致しました如何も合點が参りませぬが何ぞ致せお鍋どの瀬で
 前後を取亂し人の顔さへ夢中にて知りませぬハモツケの幸ひ〇ア、雪雄さま
 アイ、ト間の悪いこあしお後を向て居る松エ、マア何で貴君は其様
 に後を向てお出被成ます〇お嬢様あなた御挨拶を被成ませ綾アイ私しや
 綾子も間の悪き思入もじくして居る松エ、もどろしい〇何が貴君お間の
 悪い事がござりませや疾からお言號けのお兩人様天下暗れての御夫婦でござりま
 せぬか綾夫デマといふて恥かしい松夫でハ殿御の雪雄様から雪アイヤ
 や僕も〇チト間が悪いトハンケチを出し汗をふきながら脇を向いて居るお松
 何もどかしが松エ、最り初心なト雪雄を突やり御挨拶をなされま
 せいナア上るり「吳竹の笠は降積む雪おちて風にむら／＼物音に暗につきし小
 雀のさざだつ胸は連のあとによどみて羽音さへ音無川に水増して豆は解けし厚氷
 ト此文句のうちお松兩人を突やり挨拶をしるといふ此件鳥渡ふりあつてト、兩人顔

見合ほぐれて恥かしき思入ふて後向母なり 綾 貴君好うお出被成ましたナア
 是は綾子どの初めて拝顔を得まを ト武骨よいふ 松 是はしたり何で御座りま
 せる初心にも程が座ります親御様方がお言號の中でござりませぬかサア 最
 とお側へ侍寄おされませいなア 雪 イエ 僕は此處が勝手ござる ト真面
 目で居る 上るり 「梅の若枝うぐひすの初音の雪に早けれど時を得顔の寒椿少
 女もいつか開初てしだり柳の投入の水もろさじと末契るこ、が花なる初心同士」も
 どかしがつてお松の突やり トお松こなし有つて 松 真まさうお互はおは文字
 がつてむかり出被成ての果しが座りませぬ雪雄様への取分けて仰らねむならぬ
 御金の事〇サ夫故私し此雪の夜のお寒さ凌ぎし何の無とも王子酒でもモシお嬢様
 こしらへて参りませうまいナア 綾 イエ 其方の奥へ行すに 松 イエ私しが
 居りましての貴君の御邪魔に〇イエ又直に参りませぬ鳥渡お暇を下りませ 綾
 でも私しや獨りてぬ 松 ハテ積るお話を〇なされませいなア 上るり 「言捨て
 興へたつ鳥の跡の濁さぬ言の葉の艶ある松の葉重ねて兩人のなんとなまめさー唱歌
 も細水詞子ト是よてお松のとめる綾子を突やり興へ這入る是より端唄もやういな
 り はうと「梅の花 一輪づゝ一暖かき池の氷の今朝はまだとけぬ思ひのもつ

れ髪「日向よひとり撫つける柳も古風に光球のまき輪もとき近江盛ぐむ小夜着
 のしま千鳥通ふが「胸に浪うつ青簾 ト此うち兩人よろしくあつと 綾 モシ
 ああたあの端唄とやらによひこゑでござりませぬへ 雪 成程美音ござるわい
 トまじめにいふ合方弾き流し 綾 梅一輪いちりんつゝの暖かきと今の端唄はあら
 ねども一夜あたますと何處となく心の故か寒中おがら去年よりお暖かござります
 る 雪 左様ござる 綾 ああたちとお手をおかきおされませ ト火鉢を
 さしよそれと雪雄の駐かしおに側を向さ 雪 イヤ決してお構ひ下さりませ
 ト愛想おくいふ 綾 アノ私し〇イエあなたと〇よう御出おされましたなア
 トうつむき言出し無るこおし雪雄の思ひ切つて此方をむき 雪 御前様も私しも親
 と親とが言號致せし比の幼少して終ふ是まで顔さへも見うけし事のあらざる故互ひ
 に心の知らされども松どのより承りしが見る陰もなき此雪雄を本夫と思ひ日比
 よりお慕ひ下さるかたじけなき禮の詞に盡し難し其お志し甘へたる願ひといふの
 親どもが連れがたき此たびの切迫明日まで金子をへ朝へませねば此雪雄が不孝の
 子とあらねばならぬ鐵面ながら推參おし折入てお頼み申する此儀何卒御聞届け下さ
 らば生々世々の御高恩綾子どの哉心中のせつあさを御推量下されて金子と御用達下

さるやう偏にお願ひ申しまする
 ト思ひ切ていふ綾子こなしあつて
 委敷
 こまの召仕の松より豫て承りしが舅御さまのお身の作難儀一旦信縁を組し上り假
 令父上の御不承知でも心の變らぬ貴君乃妻其金子をばと、のへまして御孝道の立つ
 やりに此度いたしく進ませうが其代りに私しの願ひの筋もモシ雪雄さまお叶へあさ
 れて下さりまするか
 雪 何がさて金子調達下さるうへいたとへ命は拘る事でも
 何で否と申しませうシテ又あなたのお願とトナ
 綾 サア其おたのみハナ○モシ
 ト是よりくじきもやうなる
 上るり 「思ひ出せば七歳のときアノ母様は連れら
 きて小學校をあつた折間毎隔てし女校からのぞく障子ノガラスごしおまへの顔を
 つくく」と初め見たをいひまづけ大きくならば女夫ぢやと教へられしか夫からの
 重ぬる月日月本と覚えてよんでと、さんよ叱られるのも心で嬉しい怖いむねのう
 ちおもひ届きて婚姻とたがひにむすぶ妹背中けふとかぞへて樂しんだ其甲斐もなく
 お行方が知れぬと聞て死をふかと思ふた事も幾度ぞ「此百人首のかき入れに女小學
 女禮式みさを誰にたつるうと傍人なきさし對ひよりてかかす仇涙の池ははり
 さく薄氷胸もそゝろようきくたぐ軒の雫のいと水のや、とけそむる春風のたより待
 まぬもとうしさ
 ト此文句のうち綾子よろしくふり有つて
 上るり「聞くよ

雪雄も眞實と思へと義理の柵に矢さきさるしと身を慎しむ
 ト雪雄こなしあつ
 て 二十年むかし舊縁にて時めく比にいざ知らを今の尾羽うちらしたる斯る
 貧苦の雪雄をば夫ほど迄と思ふて下さる貞操節義の綾子どのをまたの心へ變りがな
 く何として僕も變らふどといふ去あがら御親父の既先約を破毀されて他家へ縁をば
 組んと迄御決心と聞くるら一且言号仕たりともみざらな事の致されず殊に金子
 の借用をお頼み申せむ猶以て雪雄の色ふことよせて娘を欺き金子をば奪ひしなとよ
 言れて此上もなく殘念ゆゑ返濟の義務を果した後再び婚儀を申し入る政義どの、
 許しをうけ夫婦の誓めと致までござらふ先夫までの綾子どのの只御同縁のよしみを
 思ひ金子調達下さるやう何卒お頼み申しまする
 綾 そりや父上へ義理をたて再び婚
 姻結むねば貴君の望みにお叶へなきませぬぬ
 雪 僕も石木あらざれば本意な
 い事と思へども金子がほしき私通せしをど奪されて身の大切の卒業まへ品行に
 も係りりませぬ互に心の錠ををろし時節を待つが肝要ならん
 綾 そんなら如何
 でも夫迄ハ 雪 身を慎むが親父へ面はれ
 夫でハ私しが貯へ金子をば貴君へ
 御用だて申ませう
 雪 夫が僕が願ふところ少しも早くお頼み申しまする
 上る
 「松も常磐の色まして變らぬ昔山妹背中うしろしるし繋る公園の森も見ろく白砂の

雪に埋れて下崩えの草も時まつ淺みどり
 子に雪雄一何るさやく 雪そりや轡く何處に相待としか
 押へる 上るり「馬も蹄に迷ふらむ ト三重本釣鐘ふてよろしく此道具廻る
 本舞臺もとの庭口の道具戻り矢張雪おろしよて雪降る トをかじみの合方よお
 り向ふより序幕の溝部軍次書生羽織の上へ廻し合羽を着下駄がけ蛇の目の傘帽子に
 て出て来り花道にて 軍ア、降るの「春の雪の傍ら消るといふが今年の雪の
 春にちり降損つあせいかして瞬くうちに積つた「夫のよいが十時の鐘を相圖よて
 此花岡の庭口へ忍びて来る約束ゆふ少し時刻は後れたが最前から三度迄此門を音づ
 る、よお鍋の如何心得居るか音沙汰おして出て来ぬゆふ今度の丁度四度目ぢやが那
 奴寐れでも致しよか最う一遍尋ねて見様左様ぢや「
 の處にて思入あつて 此門の扉をばトン「と三度叩けば直に内から開て此軍次
 を綾子令嬢の部屋へ忍ばせて呉る手筈ぢやが如何致した事ぢややらコレお鍋「
 ト小芥よいひあがら 門をた「く事よろしく コレ如何致した溝部ぢや軍次ぢ
 や「コレ「
 ト叩けど音沙汰おさゆふもどしく思入よて ア、情さ
 此大雪に四度まで門を叩くにさつぱりとお通下るし〇 ト傘をかつぎ思入あつ

て ア、思ひ出すの深草の少將が小町の許へ雪を侵して通むつめ九十九夜さの雪
 中じ車の下にて凍え死せしと夫の古へ是は目前戀ゆふこと歩行ごしア、少將が
 小町にあこがれしも思ひ違られて慇懃至極溝部軍次とも云る、者が雪にをべつてこ
 けつ轉びつハテ戀の諸道の妨げぢやナア〇 ト百夜車の唄ふあり軍次蛇の目お
 傘をさし少將の思入よろしくト、花道へ懸り ア、寒い「少將れ氣ふなつて引
 込ふと思ふたが如何じよ是で所詮堪らなまご「すれを車の下で無くて車坂邊
 りて凍死になるかも知れんら少しも早く御所車でない人力車でドレ歸宅と致さ
 り〇ア、寒い寒い「 ト雪おろしをかじみの合方にて軍次の寒さにふるえあが
 ら向ふへ這入時の鐘詔への合方「雪を降らせ向ふより花岡政義ふけたる散髪かいら
 洋服靴詔への雨着帽子洋杖を突き出て来る跡より馬丁刻吉散髪帽子目くらじまの法
 被同じく股引腹掛馬車の鞭と馬乗提燈を持ち供をして出て来り花道よて 政今日
 の今朝より催して居つたが斯程に降ふと思さりし身宵うらよしての餘程積つた
 夫ゆゑ表門の道路おしく馬車を下りて庭口へ廻りしが今夜の身どもが歸らぬと思ひ
 最早家内ゆふせりし様子其方案内致て見やれ 刻ハツ畏まりました〇 ト馬丁
 刻吉先へ駈抜々石橋の處へ来り門を叩く事よろしく 御前のお歸り「
 ト叩

けと誰も返解をせぬゆゑ 政ア、コリヤ待て〜 刻へイ 政 毎度表門より

歸宅致すゆゑ庭口よりと思ふまいあら誰や案内致す々と女子許りて怖く思ひコリ

ヤ聞えても返解を致さぬものと見ゆる〇 トいひながら石橋の雪は足跡のあるよ

目とつけ コリヤ灯燈を是へ 刻へイ ト灯燈を出す政儀の足跡を見て思入

政 今宵の雪の降出し午後七時前後常より往來稀なる此道通行致を者として身が屋敷

より外に有らじ然るに雪は残せる跡の〇 ト思ひ入れ有て 正しく男子の

下駄の跡此庭口の小門より内へ這入し足の運びの トこゝし此時上手辨の内二

階の雨戸を細目よあな以前の下女お松おむぼりを袖にて隠しうつて下を窺ふ 刻

もしや賊でも 政イヤ賊で有るまい〇 ト是にて二階のお松と鳥渡顔見合

せお松の雨戸をピツシヤリメる氣味あひの思ひ入 是と道具かひりの知らせ

叩け〜 ト刻吉の門を頻に叩く政儀の心得ぬ思入此模様よろしく相方雪おる

しにて道具廻る 本舞臺またもとの座敷は道具に戻り上手に綾子手管を前に置き蓋を取りて居る下手に

雪雄思案のこなしよて和へ居る此模様矢張相方雪下しよて道具留る ト床の淨瑠

理あり 「降積る雪一夜更て埋火の寒さを凌ぐ月本が様子如何に和のれ綾子

手管引寄せて中より取出す金包み ト綾子こゝし有て 私しか常々父上

よりお貸ひ申しませるお小遣ひのうちを少しづつ貯へましたのが丁度積つて貳百圓

これを貴君へ差上ませれば舅御様の御難儀を些も早うお救ひ遊むしませいナア

雪 スリヤ御用達下されてナ此金子さへ手に入れば父が汚名も忽ち暗れ一徹短慮に切腹

せんと思ひ迫ることもなくれ禮の詞盡しがたし綾子どの此御厚志は永く忘却のつ

かまつらぬ ト悦びしき思入 上るり 「忘却せじとうち悦び詞短 死その禮

も眞實面よあらぬれば綾子も夫と會釋なし 綾子のマア其御禮に及びませう言

就せし貴君の御身に係る大切の御孝道が僅の金子で立ますれば此上もあい私しの

悦び御速慮なくお遣ひ被成て下さりませいナ 雪 前以て申した通り返濟の儀は何

卒本年中と思召下されよ恩金おれば決して御不儀理仕らぬ左様ござれば最早お暇

致すでござらぬ ト雪雄金を懐中し身支度とせる 綾 そりや直し御歸宅をお

されまするかマア宜いで御座りませぬか 雪 先刻より小歌おければ定めて路も

離儀ならんが父も待つて居りませるしお女中のこの此處は長座いたを互ひの不爲

ほいなきがらも此儘歸宅いたすでござりませう 綾 スリヤ是程おとめ申しま

も最う御歸りてござりまするか 上るり 「本意なく思ふ娘氣は袖をひかえく心よ

留く見たさもいつばいにござる、情をたよも夫といねば別る、内らさ替したため
らい居たりしが雪雄の我と氣を勵まし
ト此内綾子のとめたく思へど取返し
雪後日一到

母言出し無る思入雪雄も同じく別れを、しむト雪雄の氣をへて
り前約を履行いたして公然と夫婦の縁を結ぶまで心に鉄をわろした雪雄のいおた
事の限りおけれどよんどころなき世の義理づく必らず情にくらさものと思召て下さ
りますするな
綾イエそれの私しもよう心得て居りませといナア
ト涙ぐみ怒

ひのこあし
雪左様ござらば綾子どの
綾雪雄さま
雪お暇いとまで御座り
まする
上るり「思ひ切ても立無て又も互ひの胸のうち引る、絆妹春の縁袖をは
らひてゆらんとする折柄奥に聲あつて
ト二人鳥渡顔を見合せあかれを惜むこ
政窃

なし宜しくト、雪雄思切つて下手へ来り庭へありやうとする此時奥ふて
盗まて
雪十二僕を窃盗とい
上るり「呼留めらきて打驚れ替し詞もあらざる
ト此時下手より
刻吉お庭口のら

處へ六尺棒を提ちて駈出る馬丁刻吉が灯燈かたりに詰寄つて
以前の馬丁向ふ鉢巻して手丸提燈と棒を持ツカ〜と出て来り
忍びみまふを仕事の二百圓首尾よく奪つて逃やうと押の強へ泥坊野郎うぬを逃し
てあるもろかへ
雪アイヤ僕に賊でない仔細あつて令嬢へ御依頼いたせし此金

子決して不正の筋でござらぬ
政其言諱の暗い〜
婦女子はたばかり二百圓奪

む取りしにまさしく窃盗
綾さういふおかたなり
政いかに花岡政義なり

ト正面のふすまをわけ以前の政義出て二重真中母すまふ
雪スリヤ綾子どの、御

親父ありしか
上るり「綾子の父の政義かと面目をさに思ひをも冷たき足のた

てどおと縁に雪雄のどりとあり頭を垂る、むるりなり「政義のかたちを改め

ト雪雄の面目なきこなしにて本縁のところへどうとある政義こなしあつて
政め

づらしや月本雪雄汝貧苦に迫りせんかたあさふ孝道と偽り娘綾子をたばかつて金子

を奪ひ去らふとテモ見下げそてた振舞やナア
刻檀那さまのお不在を附込み

お心よしの嬢さまを色氣であやなし庭口からお部屋へ忍んで二百圓持て行ふと、い

度胸併新あらりれての詮方がねへら引括つて交番へ引渡をうら覺悟をしる
雪窃盗ありとの御目違ひも御道理

トかさ懸つていふ雪雄のチツとこなし在て
窃盗ありとの御目違ひも御道理

でござれども全く以て窃盗ならむ父の難儀に是非なくも道よの叙し事おがら借用

したる是ある金子何ゆゑ令嬢綾子どのを欺きなど致しませう此儀御賢察下されかし

上るり「賊の汚名に忍びかね金子の色さし出して身の潔白を詫入れ、政義のせ、ら
笑ひ
ト此内雪雄の件の金を出し思入あつて詫る政義を見てこなしあつて

政 肝を貫く我詞に汝のいひまけくらしときとり奪ひし金子を返して詫るがたとへ其儘返せむとて賊の汚名の遣れぬぞよ 雪 スリヤ飽迄も貴殿母の僕を窃盗と見とめらるゝか 政 いかにも窃盗に相違ない 雪 ソリヤまた何の證據あつて 政 證據 1 及べぬ現行犯 雪 ナント ト床のメリヤスになり政義思入あつて 程以前の同様のよしみ1是ある娘綾子を汝が妻1達さんと父六之進に約束せしかど廢藩の後東西1別れて我の出京し官1奉職致しをれば旧弊頑固と知己よさへ爪をちきをばさるゝ者の悴1ナンデ縁を組ふやよし又先約を反故にせざあくまで妻1申受けんと例の頑固申まのならば媒妁を以申し入れ我承諾を歴ての事それ何ぞや 婦女子の部屋へ夜陰1乗じて忍入り色を以て娘を欺き金子を奪ひ去らんなどい見下げ果たる人であし夫とも1まゐる我目を掠め金子を持て立去るが法律のとふ處でないか窃盗ありと罵りし此政義がやまひか言譯あらば承ららふ 雪 サそれい 政 但し窃盗1伏罪するう 雪 サそれい 政 いひわ々有るか 雪 サア 政 サア 雪 政 サア 上るり「星をさしたる一言1 雪 雄のなんと云わけなく暫し詞もあらざれば政義の綾子にむかひ ト思ひ入よろしく有て コリヤ娘それへ出イ トいへど綾子の泣伏してだまつて居る

綾 出いと申すよ 綾 ハアイ ト前へ居ざり出る 政 人の善惡は教育によると幼少よりして善良の操正した者にせんと小學校を通學させ今又女子の教育も進々進きて高等の教へを受るも親は慈悲みだらの事を慎むはとく辨へて居る善ぢや1戀の思案の外とやら雪雄が色香にたらしめて父の不在を幸ひ1此庭口より引入るといひやうようなきいたづら者の併一步を譲りていひは是ある雪雄と其方といもと言號の約あまき忍あひても貞操の道にいかけぬと思ひをらふが身不肖なれども官途もて少しの人1も知られし者の娘が斯る不行跡と世の人口よか、りなは父の耻辱に如何はり殊1雪雄の頼みとて虚實も亂さむ二百圓もが手箱0イヤ其出どころの免も角も違するどい不届千萬言譯あらば申聞をよ0 上るり「こもる情の政義が詞に綾子を云ひけの詞あくゝ顔さへも得あおかねたる恥かしきワツとばかり1ふしまろぶ政義猶も娘にむかひ ト此内綾子の泣たふれて居る政義こそし有て 言譯おさきにひきふして泣入る体にあやまりしか此政義が目を掠めし罪の遣れぬ所なれど昔と違ひ節節に我子たりとも勘當されね一室1押藏め亂明さすれば此度誓して慎み居らふぞ 雪 スリヤ令嬢にの誓居とあ 政 押籠めおくも親の慈悲此事世間へ流布せぬやう秘し置ねば相成らぬ 刻 お嬢さまが押籠めにあなりおさるも此奴

の爲是から直に交番所へりぬを引立行いアをならねへサアおれと一踏ふりしアが
 上るり「慈悲も容赦もあら男雪雄を無理引つれつれば最前より次の間に窺ふ
 れ
 お松がこしり出 松 マア〜待て下さんせ トあわて、引とめる 政 誰う
 と思へば其方の松 刻ナンア書生をかばふのだ 松 お嬢様や雪雄さまに少し
 も罪の御座りませぬお手引したは此松が心得違ひの科のふも兩人様をお助け申
 し私しを何卒交番所へれ引被成て下さりませ 上るり「兩人をかばひ殊勝にも罪
 を引受覺悟の体政義をさとうち見やり 政 イヤ〜罪おれ其方を窃盗なりと交番
 所へ新へ出るいわれのあい口出し致さす扣へて居よ 松 イエ〜扣へて居りま
 せぬ雪雄様を此處へお忍ばせ申しまじたも皆私しが斯くとお嬢様へお勧め申しこの
 らひましたばつかりで檀那様へまで御迷惑を懸ましたので御座りませる 政 ソリ
 ヤ其方が手引致しく 刻此奴はお庭の所門から 政 娘が部屋へ忍ばせしう
 松 ハイ ト面目なきこなし雪雄思入有つて 雪 アイヤお松どのとやら雪雄の罪
 を助けんと覺えなき身に引受て下さるのの忝けなけれど斯く言譯のおき上り此後如
 何なる尋問を受けるも固より覺悟のまへ口敷利を扣へてござれ 松 イエ〜見す見
 す私しがお手引致した雪雄様あなたは何と仰りましても御主人様のお目を掠めし罪

の道れませぬゆゑ最何事も仰ら私しにお任せ被成ませ 雪 イ、ヤ夫での義理た
 りどもとより罪の此雪雄 松 イエ〜私しを 雪 イ、ヤ僕をば 松 エ、お退
 きおされませ 上るり「覺悟の雪雄を突やりて互ふ罪を争へば政義心に感らおが
 ら斯てい果とと聲をかけ トよろしくこなし有つて 政 つねに娘に附置さしも
 斯る不良の行ひの無らん様と思ひしなる娘が不所存を留免もせむ却て勧めしと
 申すか、其方としても罪の道れぬ雪雄の手引をなしたる手續サア明白に申したてよ
 松 申し上るでござりませう〇 ト合方おなりお松思入あつて 檀那様へ濟ま
 せぬが今日量らむも上野にて是なる雪雄様にお目も致し過こし方のお話より只
 今のお身の上と窺ひまして數ならぬ私し迄が照御難儀でござりませうと長らく御奉
 公を致してをりませる故先々うられ御縁合を思出してお氣の毒とせらる涙くれ
 ましてア、夫に付てもお死亡遊した御新造様が仰るに假令父上の御不承知にせよ
 一端結びし言號わが歿跡でも忘れぬに雪雄様と夫婦になり女子の操をたつるのが考
 行ぢやとの御遺言を常にお守り遊むしませるお嬢様のお心の裡夫を存して居るこそ
 幸ひ明朝に迫る急場のお金の調達を頼み度と仰りますゆゑなるかあらぬか免も角
 もお庭の口から人知れず今宵お忍び被成ませと其お手引を致しましたら皆私しの致

した事お嬢様の仰りつけてござりませぬ又雪雄様を交番所をお引きさるる譯も
なし何卒御立腹でござりまする此松をもし檀那様御存分よなされて下さりませい
ナア 上るり「主人思ひのお松の詞實道理と政義の思へど態とこゑあら、お

政ヤア入らざる處へ出シヤぱりをツて後母も立ぬ其言諱いかほど兩人をかばひをツて

も主人たる此政義が許しも無きに娘が部屋へ忍び入りしに業内もなく他人の家へ立

入りたると同様にて窃盗ありと見做るゝとも決して言分は出采ぬ事殊に金子を借る

あど、の不良の所爲と極つたりコリヤ是雪雄の罪のみならず俗に申す兩成敗娘とて

も容赦のならぬ常習癖ある此政義是にて人とありさるの言出した事跡への引りぬ

今兩人へ教誡のため此度折檻致して違ふ交番所へ連行も餘り一懲然吉藏雪雄と綾子

をば雪の中へ引下し庭の樹木にくゝりつけ雪埋めて懲して違はせ 刻 エソリヤ

お嬢様と此書生を〇畏まりましてござりまする書生に宜けれど御主人乃お嬢様何

分をも 上るり「連日夫と手を出し無稽し猶豫の其所へ惡玉下女のお鍋がたち

いで 鍋イエ其御折檻の助鐵砲に此おなべが致しませう ト奥より以前の下

女お鍋出く采り下手に扣へる お松こなしあつて 松誰かと思へばお鍋との餘

慶を處へシヤぱり出てお前の常御恩を受るお嬢様へ手向ひををる心か 鍋ソ

リヤお嬢様も御主人なれど檀那さまがあれはこそ其大切を檀那さまの仰りつゝ是
といふも常平せいのお嬢様のお前ばかりがお氣入りでヤレそれと仰つて忠義をお鍋
のいふ事の些もお聞遊ばさぬから夫で此様を事が出来する薄汚い書生より私がお
勤め申した軍次様を〇イエナニやむゝと吉藏どん雪雄とやらを雪の中へ引摺下し
て雪雄の雪貴雪でもおひれいさをつめ苦しませしやつてお呉れ〇サアお嬢様おと、
様の仰りつけサア、お立ち被成ませ 上るり「怖々ながら引たつればお松の

堪えずたち塞り ト泣てゐる綾子をお鍋が引立やうとするお松の見かねて立隔

て 松 エ、おまへの鬼か蛇か現在お主のお嬢様を手ごめにすると口情知らず采れ

て物が言れぬわいなア 鍋 采れてお臍でわかきなら勝手よのいて居なさんせお嬢

様の平常からお前ばかりが御最負で締筈のいふよ及ばをソレお寐巻のお古も松よ

やれソレおゆもじの古いのお松よと上手をつかふ其お蔭でどんゝとお賞ひ申せ

ど此お鍋の忠義一途でお爲にあらぬ事おんどのお勤め申しゝ事があいうらお禰祥一

ツお古を戴いた事もござんせぬ其返報に〇イエサナ二邪魔をせむと引込で居なさん

せ 松 イエ、引込んで居られませぬ假初ならぬ御主人様手込ましたらお鍋ど

んお前罰當らふぞへ 鍋 罰當りと云れるの百も承知二百も合點退たなさん

セエ、邪魔もあるわいな
 上るり「争ふ二人の善と悪情を知らぬ吉藏も同じく
 立て標さきより雪雄を庭へ引かろせば
 ト此内お鍋綾子を引立てやうとをるを松
 がかびひてお鍋を突やり鳥渡立廻る刻吉の雪雄を引立てト庭へ引かろすを政義の
 見て思入あつて
 政小人罪なし玉を抱いて罪ありと汝雪雄もその如く學問修業の
 身を忘れ色に心を奪はれて娘が部屋に忍び入り玉にあらねど金ゆへふ思ひぬ罪を身
 ふ受て恥辱を受ける其さまの時に迷ふ羽拔鳥雪に凍えて泣も同様ハテ意氣地のない見
 じめなもの斯迄恥を興へられしを無念と思ひ是よりの身を慎み時節の来るを○イ
 ヤ何時節に合ぬ書生論既此程退去をば命せられし族あど、の交際を断ちて勉強せ
 よハテ見るもあわれナ有様ぢヤナア
 上るり「煙草くゆらし政義が罵るうちに
 情さへこもる詞に惘然と雪雄の吐息つくばかり「お鍋の止るお松をを突やり」是
 れも又綾子と庭へかり立て
 ト此内雪雄の政義の意見身よこたへし思入しジツ
 と俯き居るトお鍋の留るお松を突退て綾子を平舞臺へ連れて来り
 鍋強情をお嬢
 様やうくお庭へお連れ申した
 刻言辭おきに首うおだれ弱り切た此書生
 只今申付し通り樹木へ兩人を括りつけい
 シテ此二人の如何致しませう
 上るり「細帯とつてぐるく巻泣居る二人を容
 兩人畏りまして御座りませる

漱なく左右へあけてく、り附つ
 トお鍋の綾子刻吉の雪雄を細帯にてぐるく
 巻ふして左右の見付柱に括り附る事宜しく此處へ下手より以前の下男彌次兵衛出采
 り
 彌次様只今お隣りの堀田様から深更よありましたが昨日お打か々の園基
 の勝負を何でも今夜附ませるゆゑ是非御尊米下さる様よと御人がお出でござります
 る
 政何ソリヤ昨夜は勝負をつけて仕舞ゆゑ参り呉れと隣家より人が参つたと
 彌新しいお取込のお中ゆゑ何とも申しの致しませんがお出の有無の御返答は如何致し
 ませりナ
 政不良の事を致したる此兩人へ篤と申聞ける事もあれどその雪中の寒
 さに堪へを本心に立戻りたるうへの事園基は勝負の凡二時間夫まで庭に括り置くも
 答を用ひぬ慈愛の折檻隣家の人への直様参ると返辭を申せ
 彌畏まりしてござり
 まるる○併マア飛だ事で
 政エ、餘慶な事を申さむに隣家の使へ取次致せ
 彌へい、○左様申まで御座りませう
 ト彌次兵衛の雪雄綾子へ思入して與へ違
 入る此時本釣鐘をうつ政義こゝしあつて
 政只今打のの上野の十二時○ユリヤ松
 是より隣家へ参るから是なる兩人を此儘身が歸宅迄差置けよ必ず留守を幸ひ取
 逃しての相成らぬぞ
 松かしこまりまして御座りませる
 政よいか○ト
 思入あつて
 お鍋お松の雨具の用意吉藏をちの供いたせ雪にすゝの聲あれを今

宵の勝状とらねばならぬ
上るり「詞殘して政義の皆引つれて立ちあがれぬ恨め

しきす父の顔見送る綾子こなたに口面目をげ月本が伸あがり互に言ぬ胸の
ト此文句

内あはれを告る鐘さえてお松も涙もろとも母與の一室へ入りふけり
ト此文句

の内政義の兩人を見て怒然といふこゝし綾子雪雄何れも情ないと思送る松は怒ひ
ト此文句

のこゝしお鍋刻吉のいゝごまごといふ思入政義お松お鍋お與へ刻吉の下手へ這入る
ト此文句

上るり「告渡る鐘かきく」と公園に續く樹木も白妙の庭に雪雄と綾子とが身の縛めの
ト此文句

手足さへ雪凍えてあゝまきををつむとまれど願れて傳ふ涙の平さへ氷るに聲も枯
ト此文句

がれの雪雄の漸顔をあぞ
ト此文句

かたを見やり
雪コレ綾子どの此雪中父上の怒り罰れて罪も無きおこと迄難
上る

義をかけしは皆是雪雄がなせるわざ父が切迫お金ゆゑ以前の好誼を思ひ出しお松
上る

どのをば頼んだのが一生の此身のあやまち照川のゆるらう堪えて下さる
ト是にて綾子顔をあげ思入

り「やさしき詞の嬉しさ綾子のやり顔をあげ
ト是にて綾子顔をあげ思入

あつて
堪えて呉れせぬ勿体ない私し眞の父上より御教訓とも思ひますれば
上る

貴若の血氣の壯士にて常自由を導ぶおかたが此マア雪の降るなりをお情ない其お
上るり「是が誠の束縛といたる心汲み分けて雪雄の頭を左右ふり

なり
上るり「是が誠の束縛といたる心汲み分けて雪雄の頭を左右ふり

雪
イヤ／＼斯る憂目にあふも皆これ僕が不良心より醸し出せる事をれ何で其方をう
らまふぞ最前窃盜犯ありとて既交番所へ訴へられ身の法律の罪人とならんぞせ

しをゆるされし政義どの、慈善の計らひ我過失を懲しめの爲と思へむ堪えもをれど
明日に迫れる父の難義照今ごろの僕の歸宅をばお待被成てお出と思へば身を死らる

、より悲しきござる
上るり「孝道厚たまごころに父の難義といひきして道
涙せきあへず「綾子も夫と察し入り
綾サ、夫のゑお金を調へて差上度と思ひま

しとも今とありて水の泡御様や貴君のお胸を推量れむ、かゝる程私し悲しうて
ありませぬといナア
上るり「悲しいといのとシやくりあげ前後不覺に見え々

る折しも「雪の益を降しさる中に兩人の俊手し身の縛めの千筋の繩足も半埋もれ
て裾つら、のひも鏡の此世うらなる八寒地獄責苦も斯くやと延あがり互に顔を見

合せも結付紐の短かさ寄らむとして、勤と轉々立むとしく地も轉び吹雪むむ
せぶ四苦八苦よりの見る目も哀なり
ト此文句のうち雪強くふり綾子の雪雄へ

思ひ入れ雪雄の我も怒然なものと思ふこなしト、兩人の立ふとして勤となり手足
の冷たき堪無ること宜しく有て
雪如何其身し過失ありとて此雪雄のみ折檻

「奇酷な、されかたせめて、繩目を切り放し、助をむものと思へども、手足叶ぬ此冷たき今一時間此儘おかばらうと、寒氣に閉られて所詮生命の保つまいコリヤ何として救ふか。○ハテよい工夫が有りさうなものぢやナア
 上るり「身を悶へ足摺して歎く雪雄ふ引りへて道女子のなよよさに持病の癩の差込んで綾子のウンと氣絶の体
 ト是よて綾子癩の差込む思ひ入れにて苦しむト、氣絶してうつ臥になる雪雄雪あかりにまかし見て胸りしや、綾子どのに氣絶せしう。○コレ綾子どのの、○氣をたしかまお持成被○綾子どのの、
 上るり「呼べど呼べど通ぜねば雪雄のいと、氣をいらだて
 雪エ、情さる此身が自由なるを、助ける術もあらふもの呼べど呼べど返辭のあらねば、極寒氣、持病を引出しは、絶命致せしか
 上るり「立ちたり居たり助けん、氣の焦思と結つけし紐、間を隔てらる難方なま、袖垣身ををりつけて伸上り見れど果しも泣くばかり
 ト此内雪雄の綾子を助けんと氣を揉めど縛られ居て自由ならぬを、宜しくト、下手の柴垣へ身をよせ綾子の方を此度見る此とたん雪下り烈しく日覆より仕懸て樹木の枝に積りし雪の處にて澤山雪を降らせる是よて雪雄の頭へドツサリ雪落ちか、りハツと思入れ
 上るり「歎きいふかき
 ト床の三重雪下しよて雪雄ハハツと思ひ動とあるをキツカケに

本釣鐘の送りにて此見えよろしく幕跡雪おろしの繋ぎよて直に引返す
 本舞臺一面の平舞臺向ふ上手へ寄せて丸物の橋欄干の柱を菊屋橋と記せし木札、畫心欄干を見せ正面より斜に淺草門跡前より新堀はとの町家を見せし雪持の書割所にて柳の立木日覆より雪持の柳の釣はだ舞臺一面に雪布をしき都て淺草菊屋はし通夜更の体よろしく此處ふ柳の陰に桐油のか、りし人力車一輛引き捨てあり此模様なる甚句に
 幕あく
 ト上手より前幕の詐偽師火の玉勘次マツチ伊三お坊主審の三人安下駄尻はしより貸傘をさし酒に酔ひし思入よく出く来り
 勘とり「雪が降出してめつむふに寒から酒で無くツチヤア凌がれねへど一直で飲直したが今日の思マしい事だらけて田樂猫よまで手をやくとア餘程ことしの曲つた年だ
 伊曲つたと言ヤア
 棕鳥だと思つて飛た旋毛の曲つた奴と連て来たのハ大夫策こつちの詐偽を附込んで百圓足らず巻上おられるたア賣ふ夢を見たやうだつた
 審おれも那奴を見た時にキヨロリとして大きお眼玉此奴唯ものぢやアねへど胸ハハツと湧んだか如何する事も出来ねへから四ツ目殺しかシチヤウ母懸け大目小目でふんだくらふと思つた壺も向ふよあげられ
 勘新年早々大夫策業が煮えてならねへから藝妓をくどいて腹いせと思つた的もとり「外れ是ぢやア突場へてもしけ込んで無理こちつけてとま

り込み春着に持へたやりくりの小袖でも引摺つて持て来ればよかつたナア 伊併
 しおれが隠しく置た小遣錢があつたから三人酒一有りついでが夫がなけりやアヒツ
 デンで此雪の中のあるかれめへ 審 何ししろ此理合せに宜い鳥でも引かけて雪が
 降ても懐中の暖けへ様一仕てへものだ 勘 どうかて甚句とやつて居るが此邊まで
 も公園の藝妓の座敷があると見えるナ トはやり甚句にて向ふより前幕の女人力
 車ひきお貞の悴忠之助笠をかぶりはごしよて出来り花道にて 忠 前宵一仕事一出
 たツきり慈母さんの如何したうまだお家へ歸らぬなら毎度出る廣小路を尋ねて見
 たれど何處へ行たか車が見えぬが先刻上野で貳圓もらつた事を話して少しも早く悦
 ばせて進度ものだ トいひながら舞臺へ来ると三人に見て 勘 オイ、子僧
 此夜更に雪の中をどこへ行くのだ 忠 アイ私しは慈母さんを捜しよくのぢや
 ト伊三これをすうし見 伊 ヤ前手の廣小路でよく見かける女の車ひきの思だを
 忠 アイ、雪の中を笠被りて小さな子僧が歩くから一ツ目子僧の豆腐かひかと
 さらア初めの胸りしたぜ 勘 左様しておつうアを何處へ尋ねに行くのだ 忠
 處だる先の知れないが早くお金を届けてやらふとさうく捜して歩きます 伊
 何だ金をおつうア届よゆくと ト金といふ事と聞くと三人の顔見合せ思入有つ

て 勘 坊や此雪の中を可愛さうに何處まで行くのだ 審 初雪やあれも人の子梅
 拾ひ夜る夜中寒いのふれつるア何處へ行って居るのだ 忠 アイおつかアの車を引
 て何處へお客をのせて行きましたか何程捜しても知れません 伊 其奴可愛さ
 うどナア左様して届ける金といふナア何程をナゲ 忠 アイよその叔父さむに二圓
 貰つたゆゑ夫を見せて悦ばせやうと思つておつかさむを捜して居ります 勘 ナニ
 貳圓だ たつた貳圓か 審 貳圓でも一直の勘定の埋艸よアなるハナ ト三
 人思入ト忠之助の心急ぎの思入にてそこらを見廻し柳の蔭にある人力車へ目をつ
 々 忠 ヤ此處におつかさんが借て引て居る車がある夫ぢやア此邊の近處に居るよ
 違ひない早くお金を見せて違たい トいひながら上手へ行ふとするを 勘 オ
 イ、坊や鳥渡待ちナ 忠 何の用かへ ト小戻りををる 勘 其お金の此を
 ぢさんが届けてやらふ 忠 イエ、知らぬい叔父さんお渡さませぬ 伊 何
 知らぬへ叔父さんおの坊のおツかアとの心易いあかど 審 サア届け違るか
 らお金を出しね ト側へ来りだます思入忠之助のふとあるを押へ 忠 イエ、
 工是は渡されませぬ 勘 渡さなけりやア叩き擲るが宜い 忠 何で私しを擲る
 のだへ 伊 手前が強情をはるからよ 審 文句を言すよ此がきを打のめしてふん

だくるが宜い
 泥坊チヤアねへが口うら高野で手前々金を屈けるといつたのが運の盡と諦めて其金を出して仕まへ
 忠 イエ〜此お金を取られてはおつかさまが力を落すから何卒堪忍して下さい〜
 ナ 富サア早く金を出しやアがれ
 忠 何卒堪忍しく下さいよ〜
 不りを一ツ擲つてふんだくるが宜い
 忠 イエ〜是の 勘エ、面倒だ
 一忠職より貰ひし金を奪ひ 成程二圓だ
 あしたの塩曾が是で出来た 忠 夫ばかりの堪忍して
 ひ退々ト々三人にて忠之助を打擲して突飛はし 勘 イケ強情がさチヤアねへか
 伊 サア酔むのさめねへうち早く行ふ 富 エ、退れやアがれ
 助は是にて雪の中へ尻もちをつく 三人 さまを見ろ
 の向ふへ急ぎ這入三人の這入し跡日覆より雪を多く降らせ雪下しよあり忠之助雪だらひの儘起上がり情ないといふ思入 忠 何處の人だら知らないが折角よそのをち

さんに貰つたお金ととりれて仕舞慈母さん一悦はせ様と楽しんで居たものをエ、情まい人達だ○今も慈母さん逢たから何と諾しを仕て宜いかお金を取られたと云たらバ私が馬鹿だと叱られやア、如何したら宜からふナ
 になり下手より前幕の綾子羽織形肩懸を上にかけ蝙蝠傘をさし足袋をだしにて駈て出来り舞臺みて忠之助に突當り兩人鳥渡左右へ別れてどうとある是見て綾子すかし
 て見 綾 是のママアどなた様の存じませぬが急ぎますのゝツと鹿相をいたしましと
 忠 イエ〜私が立て居たり夫でお前が突當つたのだお前さんの悪いので有ません
 綾 ホン見ればまだ年端のゆかぬ御子さん何處を怪我に被成ませぬかへ 忠 イエイ
 エ何處も痛めぬ致しませぬ 綾 夫のママ宜しう御座いました○ ト思ひ入れ有
 つてお前さむ此御近處のお方でござんすかへ 忠 アイ私直此新堀端の横町で
 ござりませ 綾 エソリア新堀端でござむまか○夫のママア丁度よい壽町三十八番地
 せの何方でござんすかお前知てはお出でなさんせぬか 忠 其壽町三十八番地の私
 の長家でございませ 綾 エ夫ならお前のお家と同番地でございませぬか 忠 其
 處へ行なら此横町を真直にお出なさい直に知れます 綾 夫のママ有難うござんを
 ○そしてお前のお家へ歸るはでござんせぬか 忠 私か歸ると一發に行がまた慈

母さんを捜すのだから此處で私の別室です
 夜が更ると路次を開るのが面倒だから少しも早くお出なさい
 座んす 忠 私に是でお別れ申します
 綾はからまだ外へお出なさんまか
 夫の有がたう御
 して下手へ這入る綾子の跡見送り
 今の子にまだ漸々七ツのハツ此夜更に只獨
 て雪の中アレ那通り急いで行くの何の用だか泣ながら行くあの様子
 タク
 ○ト胸と押へ癩の差込む思入持病が有るゆゑ腎からの雪ふ支えが起りし所へ
 今迄雪ふ身をうづめ冷えた故でうシクくと又も胸へ差込でアイタ
 ○生憎こ、
 に薬いあし
 ト胸を押へ苦しきこなしト強く差込で来た思入先刻ままさる
 此痛み
 ○ア、コリヤ如何したら宜らふナア
 ト苦しき思入種々有てトウウント
 氣絶して俯せよなり倒れる本釣鐘合方よなり向ふより前幕の忠藏番傘尻はしより下
 駄が々頬冠りにて出て来り花道母て
 忠久しく飲をふ居た故か五つ許り引掛た
 酒は前後を失つてつひ寐て仕舞たを起されて餘り胸くそが悪いからまた外へ出て夜
 明しの店へ這入て飲たのでせう
 晴の安泊りへ行ても内ては白川夜船どうせ起す
 ヤア呉めへから今夜の廓へ行ふと思ひ坂本通りを行積りて曲つた時に違へさか此處
 の何でも菊屋橋だが此奴も矢張酒の故で目がちらちらしたつかりだ
 ○トぶら

舞臺へ采り倒れて居る綾子母躰さ
 誰ぞ起ねへか往來し寐て居やアが
 つて胸りさせやアがつた
 ○ト揺動かせ返事をせぬゆゑ不審の思入
 起ねへ様子での矢張おれと同じ様に此奴圖解六仲間と見える
 ○ト綾子を透し見
 てや此奴の男やアねへ女だ然も十七八の顔る別品當世風の束髪は肩懸をして居る
 様子での女教師か夫とも立派な處の令嬢とか何とかいふ女は違へねへ
 ○モシ姉さん
 ○ト呼でも返事をせぬゆゑ此様に呼でもお通じなしたと此奴の途中で積て
 も發つて氣絶をしたの違へねへ
 ○交番所へ知らせ違ふか
 ○イヤまた盗人にお廻
 りの禁物
 ○姉さむく
 ○ト呼あがら綾子を抱起し思入有つて齒をくひしはつ
 居るうら胸でも押して違らふ
 ○ト胸へ手を入れ押ふとして思入す脊負守は金札
 の入りしを引出し
 ヤ是は脊負守だか帯の上へ入る物を肌へ入ると此奴の訝だ
 ○ト中を開け手早く札の包を出して見
 ヤ此奴の金だナ
 ○ト大きく言て
 ハツと口へ手を當是程呼んでも氣の附ねへの是こそ天から授つたのだ併見す
 此儘にして行くのも可愛さうだ先刻上野で親孝行がまきまき出合てフイと我子かと思つ
 たのあら氣が弱くなり如何も打棄てり行ねへ様だ
 ○イヤく待てヨ
 ○ト少し
 考へまた氣を取直してこなしよて
 エ、ま、よ勝手よし
 ト件の守を奪ひ懐

中へ入れ綾子を其儘突ゆる是にて動と倒れるを見てはつこりと思入此處へ上手より
 探索方□△兩人羽織袴靴帽子思ひくゝの形にて出采り □△忠藏御用だく
 ト出し抜に組附を忠藏の胸りして振拂ひ 忠ナニ私しヤア近處の者でござります
 神妙にしろ ト襟取を取て引戻し鳥渡立廻り忠藏の兩人の間を潜り抜け逃やう
 とをるを兩人の引戻す此内忠藏の紙幣の入りし守を持て居てゐるといふ思入にて
 立廻りながら見物に見える様は柳の陰に有人力車の内へ投込むト探索方の神妙は
 しろを繩を懸にかゝる此内倒れ居る綾子を蹴る是にて綾子氣の附し思入にて傍を
 透し見る忠藏の捕るまいといふ思入にて探索兩人を突やり争ふ綾子も起あがり此内
 へらみ立廻り四人とも手足の凍えるこなし宜くト宜程に下手より前幕の女車夫
 お貞やつし形草鞋にて桐油合羽ををり人力と記せし長灯燈を持出采り思はず灯燈
 を出すを忠藏が手早く打落す此とたむ雪大降になり何れを何きと見分らぬこなし
 て探索の綾子を忠藏と思ひ引戻すお貞も此体を見て胸りして下手母窺ふ此見えより
 時廻りの拍子木の音時の鐘雪下しよて捕物の世話暗闇にあり皆々宜しく立廻り有て
 忠藏の無暗一人を突こかし逃やうとをる綾子の懐中の金をさゆ忠藏が取りしと思
 ひ後より帯際を執へ引戻す忠藏の其手を拂ひ綾子を上手へ突やる此とたむ雪よをべ

(二幕目畢)

りし心にて綾子の上手橋際より川へ落ちドンと水音する是にてお貞の下手母胸りす
 る探索方の透し見てお貞を忠藏と思ひ引つける忠藏の甘く道れて向ふへ遠散に這入
 るお貞の探索兩人は襟取をとられ舞臺真中にて動となるを木のかしと此見え詭への
 合方雪下しよてよろしく拍子幕

三幕目

壽町うら借家の場
同じく隣合せ月本宅の場

役割

- 一 官員花岡政義
- 一 月本雪雄
- 一 縣會議員穂積正三郎
- 一 花岡の馬丁吉蔵
- 一 電信配夫久作
- 一 同トくお道
- 一 忠藏女房おてい
- 一 忠藏侍忠之助
- 一 木鼠忠藏
- 一 同 六之進
- 一 花岡の下女お絹
- 一 差配人木工兵衛
- 一 合長家のかゝおさく
- 一 同じく婆々おかむ
- 一 花岡の令嬢綾子

本舞臺一面の平舞臺向ふ押入れ納戸口上のかた脇か々窓竹のぶつ、け格子此側雪隠の入口柱に梅乃手あらひ水をうけ下手の背れろしの下家はに一ツ電戸を建し押入下流しこれに臺所道具一式此下家についで少し跡へさげ一間二枚の腰障子これへ九星術占考と記しある隣の入口を見せいつもの疑世話水戸此うと井戸流しを取付け釣籠たてかたてあり都て淺草ことふさ町のうら借家人力車ひさお貞の住居の体やえり雪持れ道具こゝ前幕のお貞やつし世話形にて針仕事をして居る同トく侍忠之助母の半纏を着て古い机を扣へ巻煙草をまいて居る側へ下火鉢へ濡た着物をあけ乾てある門口の外井戸端にて合長家の隣おせく同じくお道同じくおむ婆々何れもやつし世話形にて手桶に水を汲洗濯おどして居る此見得四ツ竹節にて暮あく
ト三人水を汲み洗濯を仕ながら かむ モシお貞さん序だうら水を一杯汲で進やうねへ
さく 其様に精を出をと今も金の置き處がなくあるよ
みちお 忠さん外へ出て些うちのごんむくと運動あるから雪打つけでもしてお遊びよ
ト是にてお貞の針仕事をやめてい
是の皆さんお洗濯でございますか
かむ 雪の翌朝の裸虫の洗濯といふやれどまど昨日の降足りないと思え洗濯をまると手が切れる様冷てへうら些當らせて下さいナ
貞 サア、皆さん此方へお這入被成ませ
ト三人内へ這入下手に

住む 忠 おむさん紫下へお當りなさい
 ト紫下火鉢を出さ 忠 オヤ氣が利
 してお出だと トあたる 忠 オヤこりやア炭團だが大層大きくつて堅きうだが
 何處でお買だへ 忠 アノ夫の表の炭屋さむで買ました 成程夫やアよい答
 だ年中炭の粉を澤山繰まから夫を拾つて土用の内に拵へて賣るのだから外のよりの
 堅炭ばかりで文久一ツでの餘程安くつて割がいよ 夫え左様と忠さむが昨宵
 怪我をしたとお言ひだが今日の痛みは仕ませんかへ 子供は正直だから少しよいと直に忠
 最宜いと申して煙草を巻いてをりまをる 眞實におらがとこの亭主野郎あんど
 れた様を顔ををるうら大人よりの可愛いよ 眞實におらがとこの亭主野郎あんど
 の昨日の雪で酒をのんで朋友と喧嘩をして腰を強く打たたとつて今日一日ふて寐
 をしてあまけて居るが自分が悪くつてした事を人のせいか何どの様に當散らして居
 るのとの忠さむの大きがひだ 妾敷話しい間をんだが左様してお金を取られた
 との飛だ災難とくひをすつたね 貞 イヤ取う其取られたお金も人様からお賞ひ申
 したろで誠に話らぬ事を致しました 何人様からお賞ひ被成たとへ夫のまた如
 何いふ譯で 貞 世間ふ鬼の無いもの皆さむ聞て下さいまし ト合かたよなり
 昨日の夕方私を尋ねて上野の公園地を此忠之助が通ました時話申すもれ恥しう

御座いままが生憎朝から仕事も致さき少許りの貯へた隣の旦那様へ差上まして
 れ病もたべる事が出来ず毎度の通夕方から私が車を引て出ましたのを嘸腹がをいて
 苦しからふと喰させ度が一むいて店をむあて居ましたパンをむ是が盗ました
 三人 エ此子がパンを盗むだとへ ト思入れ 貞 悪い事の致さぬ物で丁度其處
 へパン屋さんか歸て来てウ又太い子憎めと既の事と交番所へ引れて參る處へ通懸つ
 た年の頃四十に近い鼻の高い職人体のれ方が中に這入如何いふ譯で盗みをするとな
 聞被成ました故之食い母に喰させ度つひ盗んだと有の儘申しさ處が其人が可愛さう
 ごととパンの代を拂つた上にお袋にうまい物を買て遣れと二圓是一下もつたので夢で
 の無かと悦びまして何方の方るれ名前をとれ聞申せど仰らさ嬉し涙で別れたと是が
 歸つて話しましたが眞一世間母のれ慈悲深いれ方もあるもので御座りますあア
 ト思入よていふ 眞實に夫の感心お人だねへ其様な人が新聞の惘然な人ト恵を
 出す慈善者とかいふのでせう 貞 夫といふのも日比から忠さんが親孝行ゆゑ天
 ら授つたのでござむせう 左様して又其れ金を入取られおきんしたのかへ
 忠 アイ夫から慈母さんを捜して悦ばせやうと雪の中ををうぐ捜して居るうち菊屋橋
 此側で三人の人ト出會慈母さんれれ金を届ると言たら其金をよこせと打たり蹴たり

達らぬといふのを突飛し無理取て行きましたら此様一着物が濡く仕舞慈母さんの
 半纏を着て紫下で乾してゐるので御座ります
 可愛さうだといふ思入よて
 金を取るといふ鬼の様お奴等だねへ
 だ慈母さんの半纏が有るからよいが私おんぞだと裸で置なればならぬいよ
 是といふのも日比うらね貞さんの心懸が宜いから腕の動くお人よ如何しても叶は
 ないよ
 ト褒る四ツ竹節一なり下手より差配の木五兵衛禿頭の散髪をつら半纏
 着流し下駄をはき店賃の日掛を結びつけし頼の様お板を持ち出て来り
 ねかんさんおれ作さんも此處一居たか何程晝でも家をさう開放しよして居て火の
 用心が危ねへ金棒もてへおへよするが宜い
 是は御差配様よりお出なされ
 ました
 木イヤ餘りよくも来ねへが今日の極りを附て貰ひよ来たのだ
 手よきところによまふ
 かモシお差配さま私共での店賃を多分おけましたてご
 ざいませうね
 奎イヤ今日も懸ねへうら思入小言を言て来た
 かエ夫ての又
 今日も懸ませんう昨日の某處で新聞を太層買て儲うつたといひましたか夫ての寝隠
 しをして店賃も入れを又皺伸しお吉原へでも行く簡うも知れねへ助兵衛爺此も因

つたものだ
 奎ねらが支配の淺草邊でも此様を曲つた場末の長家貧乏人許りよ
 り取て住はせて置のだからどうせ店賃も纏らす斯して日懸取て歩くがコレお貞ど
 の是が三月か四月から此様お催促のしあいが今月で十か月隣の占易の六之進どの此
 方が受人で置たからマア〜と思つて置けの宜い事母して拂ひもせお催促一行為萬
 事に貞一委せて有るといふ又此方如何う私しが拂はますから隣への御催促をおさ
 らむに居て呉れと勉おつこの人困らせ地主への立替て置たが最今日片時も待まな
 い耳を揃へて拂ねねお氣の毒だが直に店だて千ヤ二ツ一ツの返答をしつかりと仕て
 貰ひませう
 ト煙草と吸おがらいふお貞氣の毒のこふしよて
 其御立腹の
 御尤もて御座ります御無理での御座りませんが何を申すもお隣の檀那様のお年をゆ
 して入らつしやる故毎日れた店にお出し被成どお世辭といふ物がござりませぬ故正直
 過て見て貰ふ人がなく日に三銭か四銭が關の山私しが引受まして此と納めますから
 何卒最二三日お待被成て下さりませ
 孝行息に女の車夫と此淺草での評判の
 此方の頼み毎度芝居の世話場へ出るいむがう大家と事變り慈悲深ひ奎兵衛と此方も
 名前を賣込だ深切づく三日や四日待れぬ事もないが此方が寡婦で居る丈に此處にも
 長家の神さん達が居なさるが頭兀ても薄氣の止ぬ助兵衛大家と痛くない腹を入

さぐられるのがいやだ夫一此方其通り氣の毒がつて言辭ををれど所賢の當人の六
 之進どのの横柄面萬事の貞に委せて有るの委任したのと何時でも同じ口實許りお前
 に氣の毒が此方出来を隣の家へ直一是から懸合ませうか 貞サ、其御催
 促がありまして檀那様が御心配なさいましく万一御病氣でも出ましたら折角盡を
 私し親子が志しも水の泡 夫から此方立替て十月全で出来をせも切て二圓
 も入れるが宜い 貞サア其お金も御座りませが トツヒ口ををべらす
 ナニ其金が有るとへ 貞イ、エ其お金が御座りますれば直も納める筈なれど今
 と言て何分も ト面目おさこなし 奈ハテ金が有ると今判照 貞エ、
 無れば氣の毒だが店だてチヤ ト是を聞き合長家の神さん三人の氣の毒も思ひ
 大家様のお腹立も御尤地蔵の顔も三度どころか十月のよくの御勘辨 併是
 が有て拂えぬといふてのちし舊の主人を大切忠義を盡すお貞さむ 三人下さいまし ト
 程詫て居ますうら待れぬ處を二三日ひのべをして進て 三人下さいまし ト
 三人よろしく頼む 奈待れぬ處だが何でもと言てわれが是迄の顔が潰れ無慈悲
 大家と人様に指をさされるも悔しいから文句を言せ二三日器用待て違ませう其代
 り二三日過たら此度將を聞るが宜い 貞イエ最う二三日たちますれば如何様に致

ても滞りました丈にお納め申まするまいナ 忠 大家さま有りがたうござりませ
 る ト禮をいふ 奈 ヤ忠坊此方何を着て居る 忠 前宵着物を濡しました
 から慈母さんの半纏を乾す間着てをります 奈 道理で 痕が衣を着て居るやうだ
 其痕もの、家の爺を是くら貴てやらねばならぬ 奈 私にお飯を仕懸て置たから
 ドレ焚附て来ませうか 奈 お飯よりおかん婆を焚付ていけいせ 眞實に
 おうんさむの夫婦喧嘩のはちかきゆゑまた長家の厄分 奈 イヤ兎角世間に事なか
 れ ト皆々さちあがる 貞サ、左様なればお差配さま 忠 またお出被成まし
 れ 奈 左様なればお差配さま 忠 またお出被成まし
 用心をして下さい ト四ツ竹節もあり奈兵衛先なれうんお作お道手桶洗濯物を
 ど持て下手へ這入れ貞跡見送り思ひ入れ有て 奈兵衛様今様の腹をお立被成の
 もほんに御無理の御座んせぬナア 〇 ト合方さつぱりとあり 行方の知れぬ
 忠藏どのより一倍私に御恩を受た舊の御主人六之進様昔堅氣で進継もなくお武家の
 風が失ぬ故鳥渡出會ふたお人への何となく附々悪くお世辭が無ので占易の店に出し
 てもお客がなく毎日僅お小遣にも足らぬ暮しは御恩返しと親子が脆弱い此腕でおみ
 つぎ申をも女の甲斐なき夫に付ても私を又心配を懸まいとお話とくおさらねど

切迫つまりし二百圓其才覺を若檀那雪雄様がお受合被成是非今日中「持へると口で
 の容易い仰れど失禮ながら今の御身分如何で出来ぬに知た事万一手に入らぬ時
 一徹短慮な檀那様御切腹のお覺悟と察して居れば猶更に如何うしたいと思ふ間前宵
 菊屋橋で探索衆は押へられ人達へといふ事が知れ引いて歸つた車の内は違入て居た香
 負守乗たお客れ遺失物かと聞いて見れば二百圓〇 トあたりへ思入して 假
 令車はあつたとて直其筋へお届をせねばならぬ御規則をきき檀那様が今日迄はな
 く叶ぬ二百圓天うら私へ授たお金と思ひ道ならねどお届もせを持て居れど那
 いふ堅いお方故急場のお金に差支へた命に係る事でも私がお金を差上たとて所詮夫
 にかたじけないと御用はたて、下さるまいコリや何としたら宜からふナア
 ト此時下手隣の内にて手を叩く忠之助心づた 忠母さんお隣の檀那様がお呼び
 下さるよ 貞 ほんにまだ碌々今日にね尋ね申さなんだドレ御用を聞いて〇 ト立上
 り押入より前幕の守りを取出し懐中へ入る思入あつて門口へ出て 采やうまいナ
 ア ト此模様よろしく知らせあしよ此道具廻る
 本舞臺やはり平舞臺向ふ上手一間中仕切の押入此上佛壇此下鼠壁折廻して板羽目打つ
 け格子の中窓上手三尺の入口是は續いて隣の葎下しの下家を見せいつもの處門口此外

低きまき木の垣根此内卒塔婆石塔など見ゆる寺の卵塔塲舞臺へ古樽縁を敷き机の上に
 算木筵竹硯筆たて易書などを置き此側に長火鉢土瓶をかけ此外今戸焼の手焙きどあり
 門口の脇腰障子九星占易と記したるを建て都て隣合せ六之進詫住居の体こ、一序幕
 の月本六之進白髪散髪かつら浪人のこしらへて机に對ひ書を見てゐる下手一前幕の
 花岡の下婢お鍋同じく馬丁刻吉占ひをみて貰ひゐる此み系しづみさる稽古唄ふて道具
 納る ト六之進占ひををる事宜しくあつて 六 此失もの御本人が一白九星一
 あたれバコリヤおつ、けもとへ自から返るといふ理がござれば深くお察じのござる
 まいと存するが併此失もの一付て怪我などをされし方のござらぬる甚だ危い事がら
 が御座らうがの トこれにて兩人おもひれ有て 鍋 ホンニ夫ハ能う當りまし
 た此失物の一件でいもう、大切なお方のお行方が知れず夫ゆゑお家の大ききとご
 列うせ物のあつた上お金錢にゐへられぬお子が逃亡をなされたが其行ききも大抵は
 分つて居やすが序に考へて見てお異なせへ トあたりへ思ひ入れあつていふ六
 之進不審のこゝろにして 六 成程易の表で、只今も申す通り人ならは怪我器物から
 には破損致せしものと思ひ、併失物のいまだ空中にある如く思ふ處までいふ
 らぬが〇 ト算木を置き 此易で、東南の間は失物のござりませう 刻エ

東南の方どとへ〇根岸からの此處の東南 六エ 刻十二易の表の實一尋れね
 へものだ 鍋 夫ならいよ〜れ壊様の 刻十二サ是で今よお行方が知れ失物
 も無難で返るならふ ト傍をキヨロ〜見まはす事よろしく 六何よいたせ
 お宿での御心配をことごとござらふナ 鍋 イエ最う御心配處でござりませぬ警察
 署へお届をして昨晚から嚴敷探索夫を知らせよ〜と何にも知ぬ顔をして其失
 物をボツボへ入れすまし居る奴の氣が知れませぬ 刻其上ならを失物を持て来
 た人を隠しさんご慰むだ其上で手切でも取る氣だらふが言は其奴の口どわかし御用
 ぶあつたら其時一黙泣ツ面ををるだらふが夫を知りつ、大さお顔をしねへて其息を
 意見して今の内誤つて返せば宜いナ ト六之進へ當ていふ此方の不審の思入
 六 拙者の易を渡世にすれば易の表に顯れし通をお告申すのチヤが承はれば失物や又夫
 に關係のお人の居處も貴公達の如何やら知て今の内返せばよいにと言る、ハテ心
 有り氣をお詞チヤナ 鍋 イエ〜お前さむに何も申した譯での御座りませぬつひ
 ずか〜と胸ある故申したので御座ります 刻何よも知らねお前さんなら
 マア知らないで宜いから今ふ後悔〇イヤ何後架へ行きてへから最お暇を致しませり
 六 ソリヤお歸りて御座るうな 鍋 大きにおやかましくござりました〇見料を置さま

貞出で来り ト紙幣を紙一色ミ机の上に置き兩人のたちあがる此時下手より以前の
 ト是よて兩人お貞を見て 貞 是にお客様でござりましたかマア宜敷でござりませぬか
 も進て呉りやれ 貞 ハイ〜夫でね茶を入ますからマアお待下さいまし 刻
 ナニ左様しチヤア居らませぬ〇 ト思入あり〜 モシれ神さむ此處はお家
 興ないいかゝ 貞 ハイ御覽の通の棟割長家此一室ざりてござりませぬ 刻左
 様して押入のいくつあるへ 貞 押入の一ツしるござりませぬ 刻此裏に抜られ
 るかへ 貞 イエ突當り光願寺様でぬけられませぬといナア 刻ぬけられねへ
 とへ〇よし〜 鍋 左様おらお喧しう御座りました トお鍋刻吉兩人何うさ
 へさ思入ありて足早に向ふへ這入お貞の跡見おくり 貞 ほむ何處の人か知ら
 さいが傍をキヨロ〜見廻しく此内に興が有るかかの抜裏かのと聞てそこ〜一歸り
 ましたがマア氣味の悪い人達で御座りませぬ 六 九星術の易を見に參つた者ゆゑ見
 て違しや何か家内をキヨロ〜見廻し問を語りて失物が此家の内まである様一身
 共へ當た今の詞ハテ備笑止千をな奴ヂヤ 貞 夫で今この兩人の失物が此家の内に
 有ると申して居ましたか 六 何が失しか判然と申さねど易の表の金屬とあれば

まさしく失しひ金子からむ 貞 エソリヤね金がなくなつたので御座りますか
 六 察する處所有金を親族の者が盗出し持逃をしたと申を様お一件でがなるあらふあへ
 貞 エ夫ていもしや ト氣一懸る思入六之進聞答の 六 十二もしやと申をい
 貞 イエナニ夫の心配を事でござりませう〇 ト氣をかへ今日の忙しいのでまだ
 お肩も揉ませむでござりましと今の間些揉みませうか 六 イヤ今日久敷降
 らぬ雪が昨日澤山降た故う大分氣分がよい肩も揉まらぬからマア一休息した
 がよい 貞 イエ一最休息の澤山致しました御速應をさらむちとお肩を 六 イ
 ヤ一揉で貰いでもよい夫より煮花をひとつ入きて来て呉りやれ 貞 畏りまし
 と左様あらうちから入きて参りませう トお貞捨せりふして下手へよろしく這
 入跡時の鐘 六 今打つのはアリヤ最四時や十一夜明れば追々に日が永くなる
 いふが心に辛苦のある故か跡より追る、今日の短き一時づ、一六之進が命を縮むる
 胸の切なきハテ叔當惑致したわへ ト是より床の淨瑠璃もある 上るり「當
 惑顔に六之進机のやりつくくと我身の上をかこち言 ト床の合方よりそ
 こらを片付思入有て 六 身の不運と云をがら一昨日公園にて穂積氏に約定した
 る縣廳への納金今日六時に相違なく渡さふと申したふれど固より今の身の上にて

二百圓のさておいて二圓の金子も覺束なく所詮と、のふ目的もなきは皺腹死つて
 私し一消費ふささる言譚を致さんものと決心せしに雪雄々量らす立聞して朋友より
 借入るれば短慮な事を致さると餘所ながらの強意見三ツ子一淺瀬のたとへもあれば
 六時迄一調達して持参致せと約せしが今に是へ参らぬの受合をがらも貧生なれば他
 人の信用薄くして調達しがたき物あらむ是とても道理至極兎にも角一も一命の捨る
 覺悟の六之進さのみ驚くに及ばぬど万一ツも死せし跡にて悴が金子を持参せむ
 一命捨るも詮ない事一應渠が歸宅を待ふる 上るり「思案お心老の身の胸を痛む
 る其折柄雪雄の父一約定のと暮近き雪道をしほくとして歩み采る ト此文
 句の内向ふより前幕の月本雪雄考へあがら出采り直に舞臺へ采り門口また、すみ
 上るり「入らむとせしが約定の金子出采ねるとやせんと父の心をたかり無ね ト
 よろしく思入あつて 雪 那程迄に父上へお約束せし二百圓今日となり調達が出采
 ると云ておめくどどの面下おて歸へられうと云てお返事を申さねば父ふら必ず御
 切腹コリヤ何と仕たら宜らふナア 上るり「腕こまぬいて佇立を内一の夫と六之
 進 ト宜敷有て 六 門口おて何か人聲誰干々〇御用が有らば御速應なく
 是へお這入下されい 雪 イエ他の者で御座りませぬ私しでござりまする

六ナニ私しとハ 上るり「とされて是非なく内に入り 上るり」ト雪雄格子を閉内へ入
 雪私しめて御座りまする 六オ、悴か待無しぞ〜〇よく歸宅致し呉れたナ
 雪父上りの昨日よりの雪にて定めし御持病のお病癪がれ發りて御座りませうが能マア
 お起遊へしてお出なされませるな 六イヤ〜心に苦勞の有る故か持病も今ほど
 こへやら參つて此身の至極患災ぢやがそちも此雪の中をあちこちと奔走し鹽草臥た
 であらふナ 上るり「慈愛の世辭もこなたに胸こたゆる其苦しき涙隠し〜
 ろこび顔 雪イヤ私し壯年の身まだ乳具の失ぬもの父上りの六十餘り御老年に
 御座りませれば御保養が何奇專一此雪でも御持病の起らぬの大慶の事でござりま
 する 上るり「心忙しき老の身に六之進の膝おしすゝめ 六イヤ其挨拶跡
 してそちが受合調達せむと申せし金子の如何致した 上るり「問られて雪雄の胸
 せまり 雪サ其金子の 六如何デヤ手入りじか 雪サそまの 六但し出
 采ぬか 六善り惡る早く申せ 六ト心の急く思入雪雄面目おぢに 雪お受合
 申したる金子二百圓才覺すれど今の身信用薄く誰あつて用達兵る者もなく御約定
 の致したれど只今以て我手よの 六ソリヤ違入らぬと申すの 雪申上るも本
 意なき次第 六いよ〜調達出采ぬとを 雪ハツ ト思ひ切ていふ

六ソリヤ出采ぬか〇ホイ〇 上るり「出采ぬと聞て本意なき母雲時詞もあらざりし
 が六之進の薄命の哉身の上をうちうち 六ト宜しく有て 昨日其方が遮つて
 金策致し明日の持參致すと受合しが假初も二百圓所詮用達兵る者なく十が九ツ六
 かしからむと覺束なく思ひしが手取り取る如く申を故切迫詰りて依頼せしが夫見よ
 出采ぬの知れた事一夜たりとも父を欺た餘慶に苦勞を致せぬ返々も粗忽の舉動
 アノこゝを不孝者めが 上るり「一徹短慮はら〜と落涙も老の身のせつな
 き胸をおしえり 雪父上の御立腹御道理に御座りませれど十に八九金策の
 調ふ事と思ひし如何も拙者が粗忽なれど此上は是非もなし總積氏の御旅宿へ推參
 致して今日々延を願ふの外なし父上御免 上るり「ト立つを止めて聲うちひ
 そめ 六ト雪雄立ふをするを六之進引留 六コリヤ〜何をたの言〇武士たる
 者が約定せし其一言を今更に何で猶豫を頼まれや總積氏ふの舊友の信義を盡して
 三百圓既立替下されし思借のある其上左様な事が申されりか〇斯有るべしと無
 てより覺悟極し六之進切腹あして身の潔白相立るより外無ぬわへ 上るり「思
 切つたる一言雪雄の胸に針さし思ひ六之進の押入より煤びし色を取出し
 六之進の押入より澁紙に包みし短刀を出し 此短刀の舊藩主より賜はりし備前長

船の名作衣類調度の費拂へど古主のお記念手放して忠義の道も欲むと思ひ斯る貧
 苦の其中に保存したるも武門のたしなみ是より切腹致しなば殿の御手懸るも同様
 ○斯あらむと今朝認め置し此一通死後其方より懸懸へ始末を述て差出し呉れよ老後
 して發狂にて相果しなど嘲られんも量らざる幸ひ其方も未合せし現場を見認るよ
 い證人苦痛堪へ無見苦しくの致しな分借せよ 上るり「一通取出し手早く
 短刀ぬいて脇腹へ突きむとする其折しも門に窺ふ隣家のお貞あまて、駈入り手に
 縫り 此文句のうち六之進の机の上の本の間より遺書を出し手早く短刀を抜
 き腹へ突きやうとせる此以前よりお貞門口に窺ひ居て是を見て駈入り雪雄と、もよ
 よろしく留て てマアくお待ち被成ませ 六 オ、そちのお貞く必を留るを放
 せく てイエく如何有くも放しませぬ○檀那様御切腹母の及びませぬゆゑ滅
 多しの放しませぬわいなア 六 ナニ切腹に及びぬとい てなくて叶ぬ二百圓
 若檀那様へ届きました 雪 ナニ二百圓届きしとい 上るり「取出を包も親子の者夢
 にお上申して呉れとて届まして御座ります 上るり「取出不包も親子の者夢
 かとぱり打驚き 上るり「取出を包も親子の者夢
 入きある 六 誠これの金子の包もいかに致して手に入つたぞ 上るり「不審

たつればお貞の引とり トこおし有て 貞 サア此お金の若檀那へある處より
 ○夫貴君のお朋友の處から○ソレアノお頼み遊ばした方から唯今届きましたと故持
 て參つたおで御座りますするわいな 上るり「門にのみ様子を聞か詞を合するお貞
 の氣轉道ならぬと思へども雪雄もうれとのみ込で ト雪雄お貞と思入あつて
 詞のつとつまを合せ 雪 スリヤ我朋友へ依頼せし金子を跡より届たくれしか
 貞 サア夫ゆゑ持て參りました 雪 夫何よりかあるじやない今宵につまる金なれば
 何いもいぬを借用致せ トお貞へかたていひ サア父上お心置なく是る金
 圓御用にたて、下さりませ 上るり「急場の金一訝しと思へど一時を遣れんと出
 せば父の猶更し 六 ソリヤ是なる金子をむそちが朋友何某より借用致して參りし
 とを 雪 如何も最前逐一に其手續きの申さねど一端出采ぬと断りしが日比の交誼
 に捨置たかねまただろ調達いたし呉しかお貞がもとまで届呉れし誠以て信義厚
 き志し何卒夫をば總積氏へお渡しあつてお身の潔白お立被成て下さりませ
 上るり「といへばお貞も傍より執成し 貞 是と申をも若檀那様が平常からお朋友へ
 ねつたあひお厚い故でござりませう檀那様貴君も無かし御安心でござりませう
 ナア 上るり「涙隠しく悦べば六之進の金子の包を手を取上げてとつくり見やり

ト此文句のうち件の金包を手取見する事宜敷あつて 六 假初ならぬ大まいの二百
 圓服紗をどに包むべきにコリヤ是女子の守の裂色もあまめく藤色縮緬 雪 六
 サア悴此金子のいゝるなる者より借受しぞ 雪 其金子の〇イヤ何夫の唯今申せし
 如く我親密の朋友より 六 朋友より借受し事分つて居るが其者の姓名住所の
 サア夫の〇アノ何でござりまする トグツと詰る 六 其姓名を早く申せ
 雪 サそれの〇 ト思入よろしく有つて アノ何で御座りまする朋友の姓名の花
 岡〇イヤナニ花井政義〇イヤ政友〇宿所の即ち根岸坂本十八番地でござりまする
 上るり「口から出まかせじき」と釋く胸に詞さへ濁きはいよ／＼不審とたて
 六 花井政友ム、〇 上るり「父の金子を突戻しト 件の金包を雪雄の前へ戻し
 出所不明の此金子用いたらぬ持てうせう 雪 エそりや此金子の御用よの立ちま
 せぬる 貞 今宵のうちに無くて叶ぬ二百圓折角の志さしを 六 イヤ鍋しても
 盗泉の水を飲むたとへ貧苦は迫ればとてあやしい金子の借受ぬ 雪 なんと仰
 る ト合方になり六之進思入あつて 六 コリヤ、い悴よく承られ某時世
 合せして斯貧苦よの陥れど曾てよこしま非道をせむ人の人たる道を守り權家よかも
 ねりへつらぬを正直律儀あるが水清ければ魚すまむのたとへお如死一際の際もく

らぬ目を送る夫は何ぞや此父を救ふんと心の心にせよお貞と謀りて此金子の道は飲た
 る行ひぬて奪ひ取りしりさのあくとも婦女子ふとを欺きて借用せしものと察せらる
 、最前も權家の下婢と今一人の馬丁やりの者が采り判断を頼みし家の隅々夫とな
 く心を配り其上は我へよそあがらに當てすりいぶうしい者と思ひしが果して我が調
 達の此金子婦人の守りに包じし甚だ以て怪しい始末左様を金を借用しては後難のほ
 どとありがたし危隙はひとした二百圓見るもなり／＼織らぬしいとく／＼持て立去
 りをらふ 上るり「星をさしたる怒りの一言兩人の何と顔見合せ暫し詞もあらさ
 る折かろ戸口に窺ふ以前は兩人 ト此うち下手より以前のお鍋刻吉出て門口に
 窺ひ居て此時ツカ／＼と内へ這入 鍋 様子に残らず立聞きしたテモ大それた書生
 どのよくもお嬢さまと連れ出して 刻 菊屋橋で溢り殺し二百圓といふ大金を盗ん
 て素知らぬ顔で居るとい見懸よらぬ太い奴だサア警察署へ引て行からむれと一緒
 一行きやアがれ ト兩人雪雄を引立掛るお貞雪雄突驚し 雪 ア、そち達の
 花岡氏の下婢と小厮の兩人なるり令嬢を連れ出し金子を奪むしなんど、の思ひもよら
 ぬ其疑ひ 貞 多分夫の人違ひ若檀那で御座んすまいやへ 鍋 人違ひか人違ひ
 で無り出る處へ出ればあかる事 刻 虫も殺さぬ顔をしつ訝に涙で人をごまかし甘

く証して命まで取との圓太い其根性云分するなら警察署で證據とたて、いやアかれ
 假令警察へ引る、とも身に覺えなれ此雪雄 鍋 イエ／＼覺へが無いと口言せませ
 んたしうを證據の所に有る二百圓の金包み 刻 うちのお嬢さむの背負守は包ん
 であるのが何奇證據だ 雪 ヤ 夫でも知らぬとお言ひかへ 雪 サアそれい
 鍋 サア 雪 サア 三人 サア／＼ 刻 エ、面倒だ一緒お来やアがれ
 上るり「雪雄が手をとりに引られお貞の兩人を突けて雪雄をかこみ聲を上げ
 マア／＼待て下さりませ古主の御難救ひたさの其一心は道ならぬ事と知りつ、夫
 ある金子にお届けもせず若旦那へ譯も申さずあげましたが實は昨晚翁屋橋にて何者
 が投入されましたか私しが常にひく車の中にありし金子盗みもおなじ其罪の背負し
 かゝる事サア警察署へお兩人さんお引きなされて下さりませ 上るり「かばふ詞
 も今更に面目あげのお貞が懺悔雪雄のそれと察しやり 雪 さて昨日綾子よ我
 あと慕ひ二百圓持て家出をされたるる〇今となつて父上のお耳に入る、も面目あ
 れど最早隠れを隠さす實は幼少のをり言号ある花岡のむすめお綾どの當時ゆたか
 の身分と聞けば折入て頼みまは金子の調ふ事もあると一途は思ひみしより雪を侵
 して彼岸なるその邸宅へ推參をなし一部始終を話せし處父と心のうらうへに綾子どの

が貞操節義然るゝ父の政敵どの我を見咎め立腹なし綾子どのと諸とも折檻受しい
 ましめの寒氣の肌をつんざく思ひ夫を慙然とお松といふ下女が情に繩を解き深更に
 我を逃し呉し綾子どのの籠籠も操を立んと二百圓以て窃母家出をされ我方へ来
 られしならんが察する處途中にて不慮の事など出来し身にあやまちの有つる何
 致せ斯ある上の交番所より警察署なり參つて此身の潔白を立ねば人たる義務た、す
 お貞どのに我調への模様よつて召喚あらん先夫迄の父上の公抱萬事を頼み入る
 イザ交番所同道めされ 上るり「口は言ねど心は綾子が上を察しやり涙ははれ
 ぬ胸の雲夫と覺期に目るびれを目を閉ぢ暫し黙然たり ト雪雄覺期のこなしよ
 ろしくある 上るり 様子を聞いて六之進斯迄迫る災厄は身の薄命を歎息し 六
 昔が今なる迄も非道を働か榮えし者一人もあき事な常に教訓も致し置く其方も
 無學の者でいなしよ邪の行ひをしをるまい早く其筋へ罷出て身の潔白を詳明い
 たせ 雪 御意までもなく警官お面前に於て此身の潔白此度申開き致しますれば其
 儀の御安心下さりませ て イエ／＼夫の私しが拾ひましたる金子あれば其申譯の
 私しから 雪 イエ／＼夫の兎も角も是なる兩人に大概お我の疑念を懸居れむ其言
 譯の進ての事 て 夫なら如何でも御沙汰をば待て居らねばありませぬか 鍋 エ

「つべこべと能く喋るお神さんごよ此お金の私が預つて行くよ
 鍋懐中へ入れる 刻よまひ言の彼としてサア一緒早く来ヤアがれ 雪ハテ同
 道致せぬせかすとよいの 刻是がせるを居らるものか 雪左様なれば父上
 きま直歸宅いたしまする 六是が此世の 雪 早く面暗れいたして參れ
 上る「生命を捨る覺期ゆゑ是が此世の別れかと口よ言ねど六之進道親子の恩愛に心
 引るる、うしろ髪 ト此内雪雄の門口へ出る六之進の別れといふ思入雪
 雄も心の残るをなし有つて思のぞ跡へ戻るを 刻エ、キリ、と歩みヤアがれ
 上る「引立てこそ ト刻吉酷く雪雄を引立るお鍋の金包を懐中し附て向ふへ這
 入お貞の跡を見送ワツと泣 上る「跡よお貞の堪え無ワツとばかりに泣ふして
 何も御存じない若檀那様私が拾つたお金の事お思懸まい今の御難義其申講も跡ふせ
 ぬハ知つて疑は懸らふと仰るゆゑお參りませぬがどうか早う雪雄様の御疑念の晴
 るやう外に仕方ないかいナ 上る「主人思ひ申胸迫り暫し涙ぐれ居たる折
 節忠之助がうけ参り トむた、よて下手より以前の忠之助駈て出て来り直に
 内へこひり 忠慈母さん今内の表へ何處かの人を立て居る故氣味が悪いと思ふ
 ち門口を覗ておつるアは何處へ行たや聞くら顔を見たら昨日上野でお金を呉たお

おさんゆゑおつかうはお隣に居ると言たら何だか急いで表の方へ駈出して行たゆゑ
 それをお前へ教へ参たよ 貞エ夫から昨日其方にお金を下まつたおぢさむがれ
 出で有さら早く教へて呉ればよいに表の方へお出とあらハ跡追かけて鳥渡お禮を
 忠夫では早く路次乃方へ追かけて行くと違つくよ てオ、よい夫からお跡を○檀那
 様御免被成て下さりませ○サア其方も一緒よ 忠アイ、 上る「お貞と
 つかえ路次口へ跡を慕ふて出て行く跡見送つて六之進ト 六之進獨残りあたりへ
 思入あつて 六立寄らば大樹の陰と一端渠と言號せしれ綾が父花岡氏を今書記官
 とやりに登庸され根岸に居ると聞つるが父を思ふ一心より夫へ便りて金策を申入
 れしものと見ゆるが昔堅氣に怒りおせしがよく、思へむ此父を救はん爲の皆孝心
 左と去おがら斯程まで辛苦を盡せし金子まで父政義が許さぬか又もや斯る故障が出
 来手に入なから用ご、ぬとよよく、不運さえまる此身幸ひお貞も他出の様子留手
 がなくてよい手づから豫て縣廳へ差出さんと理由を、認め置きしがせめて交誼
 を盡されし總積氏へ謝状を認め死後とりおた其外をも遺書お盡して申置き心静し切
 腹おさん○とかういふうち最う黄昏ドリや燈しおどつけやうか 上る「心静し
 六之進勝手をさして入合の ト思入あつて立あがる時の鐘床のおくりよて又知

らせあし。此道具廻る
 本舞臺半まひし。以前の隣合せお貞の家入口の外井戸端りところの道具に戻る
 トバた〜にて向ふよりれ貞忠之助駈て出来り思の切れし思入あて 忠母さんお
 ちさんが見えあむだかへ 其方が教へて呉れたゆゑ立ちあがらでもお禮を云ひふ
 と思ふて追駈て行たれど何方へお出被成たやら影さへ見えぬに詮方なく歸つて来た
 がお目に懸らないで惜しい事をしましたわいな 忠 左様してね隣の若檀那のどろ
 おしたへ 貞オ、其若檀那のたつた今私が拾つたお金の事で疑ひか、り交番所へ
 お出被成たが行ゆかれぬ今のお詞其方御苦勞ながら行て様子を見て来て呉りや
 忠 アイ〜 上るり「ゆうんとするを呼びとめめ ト忠之助の向ふへゆきか、
 るをれ貞の呼びとめめ 貞 ア、ユリヤ忠之助マア待ちや 忠 何か用うへ
 ト跡へ戻る顔を熱く見て 貞 其方の年より伶俐にてよう母がいふ事を聞分てたもるが
 此母のナ若檀那様のね身の上何事か有ては是迄をあた諸共忠義を盡した甲斐も
 ないゆゑ 據るなく速い所へ行ねばならぬかも知れず其方が歸つて来た時、若此母
 か居ぬとしても必しも敷くまいぞや 忠 夫でね慈母さん、速い所へ行のかへ
 貞 可愛い其方を置いて行度こと、少も無れど行ねばならぬお金の出處若檀那のお身の上

いひよん事でもある時の日頃の志しも水の泡夫のゑ行ねばならぬといの○
 上るり 「覺期の夫と極めても子ゆゑの闇よくれまどひ是が別れとせきあげて
 貞 此母がたとへ速い處へ行て留守ぢやとてお隣の檀那様へ忠義の道を忘れまいぞ
 上るり 「我子を論をまこ、ろに頑是なけれど忠の助夫とさとしてはら〜涙母とり
 つき辭くもらせ 忠 夫でねどろでもおつるさん坊、別れるお心かへ 貞 それ
 もせつない諱あつてまだいとけあ其方を残し獨ゆくのをよ〜お邪けん者ど
 恨むまいぞ 忠 イエ〜恨むまい仕ませんが私に前にも別れるのが悲しい〜
 上るり 「悲しいといのと取纏り敷く我子、引さるゝ母子が一世の別れみち果し、更
 におかりける トお貞の忠之助を引よせ是が別れといふこなし宜しくあつて氣
 をかゑ 貞 ほんに斯いふうちも若檀那のお身の上、案じらる、早う交番へいつて
 見て来て呉りや 忠 アイ〜 トたち無居る 貞 早くゆかぬか 忠 ア
 イ トいへど泣てゐて行かぬる体ゆゑ思切て 貞 エ、聞分けのどるい早くゆ
 かぬか○ 上るり 「と叱られて仕方なく〜忠之助が家はあると路次の口足も
 す、まぬ溝板の薄さえにしと振返り〜「こなたも是が別れかと伸びあがり〜互
 ひに跡を見え隠れ別てこそハ ト此文句のうち忠之助の泣〜向ふへゆくお貞

は是を伸びあがりく見送り別れを惜むト、忠之助の揚幕の際ゆへに思ひ切つてツ
 イと這入お貞の花道の中ほどまで我を忘れてゆた思ひを跡にさりしてどうとあり
 是が母子の一生の別れといふよゆぬぬると叱る親が世にあらふか何の因果折角に
 ○ 上るり「親となり子をうまれまた七ツにて別れるとの約束ごと、云ひあが
 ら世に情なき因果どし是一つけても現在のあれの賢父が有ながら曲つた心むつり
 に行方知まねば我子かと名のうて仕舞ふ何ごとぞ○ 上るり「せめく父が人な
 みなら斯した歎きもあるまいと又思ひ出す思愛一暫し涙に沈みしが斯くは果せば
 心をぞだめ 若檀那にお疑ひう、りし金子の菊屋橋にて量らむ拾ひた届をせなん
 だ事をうき置してお身の御難儀にならぬやうれ後人さまへ申し上お死で仕舞へば
 忠義もたち又二ツに跡々で本夫がさるは万に一つ非業に死せしに懸然ぢやと思ふ
 て善心ふ立返り誠の人よあらふと思へば死ぬのも大死でぬい道理といへ刃物の
 用意もなれば此井のうちへ○ ト鳥渡井戸を見こまし有て 少しも早く書
 置を一筆ありと左様ややく トお貞家に入り木戸をこたとしめるをキツカケ
 一ツ鐘念佛ありお貞泣きながら押入きより硯箱を出し心のせく思入して書置を
 るさ懸るよき程知らせなし廻る

本舞臺もとの六之進の家に戻る ト此處は六之進書置をかき終り切腹のしたく宜
 しく有て以前の短刀を抜きをなし行燈のあうりよをかき見て思入矢張一ツ鐘念佛にて
 六此お差料の我世歳の時舊幕主のお鷹野のお供おし人先だち一番の獲物をしたる功
 によつて賜りしが貧苦の中おも舊主のお記念手放を口惜しと今に其儘所持なし
 をりしが是が今日切腹の用いたつと思ひざりし廢刀の令出てよりいかなる名作
 名刀も無用とあま世の中ながら○ア災ひも三年たては用いたつといハテよりいつ
 たものやヤナア 上るり「一心静六之進もろ肌ぬいで無てよりたしむ武士の覺
 悟の切腹膝もくづさぬ禮式今ぞ斯よと見えたるとこへ獨のる者駈来り
 ト此うち六之進思入あつて切腹の禮式いろくあつてト短刀を腹へ突き立やうとを
 るとバタ／＼となり向ふより前幕の木鼠忠藏頬かぶり尻をじよりして逸散お駈を出
 て木戸口をあまたしく下さ 忠藏 こを聞くと下せへ 六 紫内致す誰人
 あるか御用あらは明朝に被成て下され 忠 イヤ今夜でなくツチヤアならぬ急用
 だく 六 イヤ／＼些取込も御座れば是非に明朝お出下され 忠 其様を悠長な
 事を云ツチヤア居られねへ聞て下せをわけて下せへ ト無やみト下く 六 イ
 ヤ如何有てもあけられませぬ 忠 聞をザア此處を破毀しても這入にやアあらぬ

六ナント 忠 御免をせへ
 へ入る六之進の胸り白刃を隠して
 テ、汝の何者あるぞ 忠 何者でもねへおらア盗人だ
 忠 手のへが持てる短刀の名作もの、長船と聞て俄にほしくあり夫をもろひ一
 態々采たのだ 六 扱て殿より拝領の此短刀を名作とおのれ門口にて立聞きし奉り
 んためふ亂入せしナ 忠 如何も腹を切らふと迄決心して居る手ゆへが寐言を聞て
 俄にほしくなり同じ盗んで賣る者でも血をあやして刃表ふ曇りが出て直打がねへ
 からとうせ此方へ賞ふのなら其皺腹を切らねへうちまた、ツこましてまだ宵に荒い
 仕事も行がけの駄賃と思つて遠入たのだ愚痴をいひ短刀をたりに、此方へ渡し
 て仕舞へ 六 盗賊ならは無法も尤も身の潔白の云譯状覺悟極めし今の際飛で
 火入る夏の虫おれれも死出の供をばいたせ 忠 上る「物を云す曲者の短刀持
 斬られてさまる物か 六 何をこしやくさ
 六之進の腕を取てもぎ取らんとあせるを此方の手練の早業もんどり打て頭轉倒ま
 た立上つて組附くをあしらふ老が羽がひじめ突殺さん易々れど夫も入らざる殺生
 と刃を片手したためらふを彼曲者の振りほどに態と近より我と我が脇腹がサと突貫死

いたでにワツト苦しむ折からとや約束の時刻どと縣會議員總積正三郎足をそめて
 入采る 六 此文句のうち忠藏と短刀をもぎ取らんと六之進はかゝる六之進は刃
 物を取られ疵をつけじと思ふ体よてよき程あしらふ兩人の立廻り宜く有てト
 忠藏は態と短刀よて脇腹を突き血になつて苦しむどりとある此機會バタ／＼あり
 向ふより序幕の縣會議員總積正三郎羽織袴好みの持へて手丸灯燈を持ち足早出
 て采り直一内へ這入り 正三郎 六之進どの御在宿なりしか約定ふれは二百圓イザ
 お渡し下ささい 六 誠貴殿は總積氏今更とあり面目なけれど其金子の調達が出
 采ざる故に切腹を懸懸へ申し辯 六 此の短刀を突たてんとするを 忠
 待ちあさへ其金は此忠藏が進ませせり 六 正 ナント 忠 是は忠藏苦痛を
 こらえながら懐中より以前の脊負守の金を出し 忠 無くて叶はぬ二百圓此身を
 捨ておめへさまへ早く進てへつかり我と我手み刃にかゝり死ぬのも此身の罪は
 ろ不し 六 まあとし是は最前の悴とお貞が持參の金子また候其方が持參せしは訝
 し 正 見れば深傷し苦痛の体 六 シテ、そちは何者なるか 忠 アれ見忘
 れ被成しかお貞が本夫の忠藏めて御座りませる 六 ナニうちは忠藏とか〇
 ト灯燈のあうり顔を見て オ、そちは以前召仕ひし高橋忠藏何ゆゑあつて此体は

ト六之進すり寄く問ふ正三郎も不審と問うて詰問する忠藏苦痛をこらえホツと息をつき 忠 七年あとも窃盗の科を犯して長いあいた石川島で苦役をしたれど懲る處の度胸がよくなり満期で出て貞節お女房の意見がうるさく、母此東京を跡まじ久しく浦和よくまぶるうち悪い心の増長して刃物で威しく夜働らさず偽りござれ人込で巾着切やら強姦やら罪を重ねた私しふとした事からア、惡かつたと氣がつき見れば片時も身の安穩よして居られぞコリヤ御主人のお前様のお手懸るが本望と短刀のせよお手向ひをしたのも賢い二百圓あなたへあげてへばツかりて此身の惡事を死際へ償ふ心の此忠藏何卒其金御用よたて、下せへまし ト苦痛の体よいていふ六之進思入あつて 六 スリヤ其方の是までの惡事を善よひるがへし旧の主人と六之進の難儀を救ふ心よて金子を調達致せしとかさね去ながら此金子に見覚えのある花岡氏の娘がもち避いたせしと只今憐れが交番所へ届けながら参りしが夫を又もや其方が再びこれを持参せし何とも以て不審千石いか致して手入たぞ 忠 とも此金の菊屋橋で雪になやめる娘ツこが肌み附たる香負守り瀧をおさふと懐中へ手を入れたのが因果の初り思ひさきつた金包み初めに分抱する氣であつたが盗み心が忍地うかんで引たくつて懐中し避やりとした其時苦痛ながら渡さくと争ふ

えづみふ新堀の深みへさんぶり落た様子情を知らねへ私しゆ其儘行ふせした處へ探索方追つめられ餘儀なく金の路傍に引捨てるある人力の臺箱の中へうち込んだま、避ましたるが再び戻ると授かつたもとを亂せば貴方を助けむ爲に二人三人心を籠し二百圓罪に此身に引受て決して御迷惑懸ませんからお心置なく遣つて下せへ上るり 「苦痛をこらえ物語る折から此處へ妻れ貞長家のか、よ助れられ門口ありト下手より以前の合長家のか、三人お貞を連れて出ま来り忠之助も跡から附て門口よき處にとまる おんん 泣て居ての聲が分らないらマア氣をしつかりと持てお出ささんせ又忠せんも慈母を手放さぬ様一氣をおつ々 おさく ほむま危い處マア短氣お事をせむと おいぢ 落着て居おさんせいナア 貞有難う御座ります所詮生て居られぬ身の上夫よりいつを私の井戸へ ト行ふとする合長家のか、引留て テモ強情おマア、静しなさんせ 上るり 「寄つてたかつて深切よとむる長家のか、ア達お貞母子を内へ入れ門口びつしやり出て行くト無理にお貞忠之助を六之進の家へ入れ皆々拾せりふにて下手へ這入る 上るり 「六之進のお貞を見やり ト六之進思入あつて 六 其方にお貞扱はうおたれ我ゆゑに拾ひし金子よ言譯を入水せんとの覺悟なりしか 貞面目もない先列の

度と思込んだ此忠藏跡で罪を身引受々お手こかゝるか我手で死ぬか二ツ一ツの
 決心で古主へ盡す御恩報し諱といふなア此通り何卒二つちが命を捨てまた取返した
 此金の急務場の御用に立て下せへ六之進様是が今際のお願へて御座りませ
 「先非を悔て忠藏が誠あらわを長物語をば聞居る女房のお貞の膝取ついで
 貞ソリや是迄の悪心をやめてお前の善心立返り命を捨て檀那様へお詫びをする氣
 でござんすか○左様いふ心よなつたなら死むと仕様が有らふもの貧苦の中で此様な
 つらい思ひもろが一に前の心が直らふかと夫はつうりを樂しみお明し暮した此年月
 ○上るり「七年此かた標をたてつらい思ひも貞節の道とおもひし甲斐もなや
 何故死で下さむした外仕様もあらふもの早まつた事をさむしたナア
 「縫り敷けは忠藏のぬかりをふり
 忠イ、ヤ幾等助々へと思つてもどうせ遣
 れられぬおれが重罪夜盜かツき家じり切強姦までした大惡人おれの命が二ツ有て
 もどうしてく償ひ切れねへ此處で死なねば市ヶ谷の露と消えねばならねへ身体未
 練らしく敷くめへぞ 忠の夫なら如何でもおとつさんお前の最う死ぬのへ
 今別れても親となり子となる縁の深へと聞く草葉の蔭で待つて遣るうら手前何卒
 真人間ふなりおれが汚名を雪いで呉れ○とかういふうち時刻が移る何卒其金少しも

早すね役に立て下さりませ 上るり「悪し強たの善にもと世の俚言もまのあたり
 と六之進の感じ入り 六 誠にかほど忠義ある夫婦を家采し持ちたるは果報冥加
 餘りし其し金子の直ちに借用せむが心に懸るは花岡の娘綾子が生死のたより 貞
 ホンに本夫がお金をむ奪ひし時手は廻りもしや先刻の話のやうよヒヨンお事でも
 ありのせぬか 六 ア、糸じられた事ぢやナア 上るり「生死いかにと氣違ふ折
 柄思ひ懸るは花岡政義むすめを連れてトツカハと急ぎ此家へ入来り六之進に會釋し
 て ト此文句のうち向ふより前幕の花岡政義洋服帽子靴好みの持へにて先令
 嬢綾子下女お松附添ひ出て来り直に格子を開け内へ入り 政 ぬづらしや月本氏御
 壯健にて祝着至極 六 まこと貴殿の花岡氏面目もまた此体あらく トいひ
 懸るを政義思ひ入りあつて押留め上手よきところよすまふ 政 ア、イヤ様子の昨
 夜御賢息より逐一承知致して御座る夫は付く六之進の貴殿にれ詫を致さねば相成
 らぬ儀が御座つて參つた 六 ナニ拙者へ詫言とト 託への合方なり政義
 思入あつた 政 兼て貴殿の念息雪雄どのとは是なる娘綾子とい言号の約を結び置しが
 むかしと違ひ留節の若き男女の教育の厚薄によつて終身の榮枯盛衰もトするべかり
 互に二十歳内外のうち若其目的を誤れば悔く返らぬ事とあるのコレヤ申さざとも御

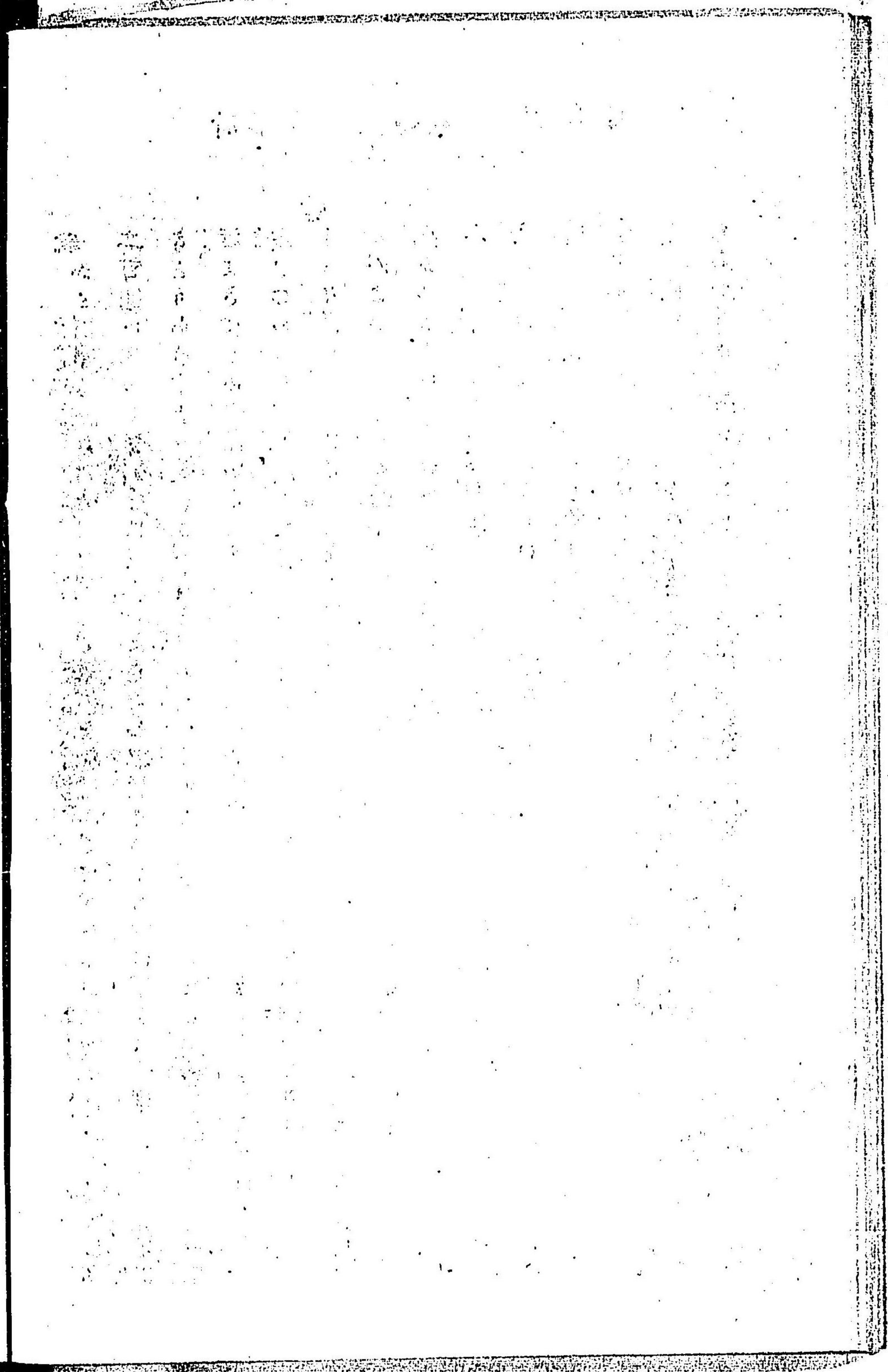
承知の事識者少早婚の弊を論ずる如く修業盛りに結婚して子でも儲る其時の慈愛の爲に心を奪われ所詮學業の修らざると一途と思ふ處より態と音信も差留置れし語を守る娘が奇特また雪雄どのも婦女子の爲に心を動かす事絶て無く一度の文通もせられぬり感心の事と思ひし昨夜暈らす入采あつて金子入用の儀を依頼されしに全く酒色の爲にして斯る急場の事あらんとし思ひも懸す疑ひしに我考への足らぬ誤り後日の戒めこゝなりと嚴敷折檻を加へしが跡にて聞けば貴殿の切迫手延よして命に帰る事と聞いて突驚されぬ金子を持參せよとい我子ながらも申し憎さし夫と言ねど手筈の中へ差入置た二百圓持て參つて御用立よと思ひし謎を解たるが却て娘の身の災難雪は憐みし癡氣の折是なる忠藏は奉ひ取ら其身の薄し落入りて氣絶せし警察官の厚き保護にて蘇生を身内に疵もありざるを雇人等が絶命の様申し申して氣の毒至極雪雄どのにも交番所へ出られて委細の申立疑ひ晴まし趣きなれば追付これへお歸りあらん免も角ふも夫ある金子を縁者のよしみ御用どつればお心置さなくお遣ひ下され 上るり「事をあ々たる政義の詞誠あらはるれば六之進の義心に感ず ト六之進こおしあつて 同様のよしみを忘れつれなき人と片時にては御身を恨みしに此六之進が老老のゑとひとへ御容赦下さきい 政イヤ

夫の拙者があままり〇何れ免もあれ夫ある金子を 六 イヤナニ總積氏お聞きの通りの次第にて漸く手入る二百圓イザお受取下さきい 上るり「金子を取て差出す折ら門口開いて差出す電報 ト向ふより電信配夫好みのこしらへにて出来り直一門口をあけて 配こちら馬取縣の總積正三郎どのといふお方にお出被成ぬりナ お貞格子戸のそばへ行きて 總積様の此方にお出で御座りませ正 ナニ拙者へ何の御用かを 電信が參つたゆゑ只今御旅宿へ參りし處此方へお出の事ゆゑ引返して參りましたイザ電信をお受取下さきい 正 ソリヤ本縣よりの電信とナ ト請取り領收証に認印を押して配夫の是を見て 配 よろしう御座る ト配夫の木戸としめ引返す正三郎の封を切り電報をよむ事よろしく 正 六之進どのの御安心あされ上納金の殘額一度行方知れざりし總代人の佐々木より上納せりとの事で御座る 六 ナニ總代人の一人にて影を隠せし佐々木氏より殘額上納済じとか 正 總代人の肩書あるゆゑ貴殿も上納の義務のあれど固より使用もされぬ金子を既三百圓納められしと傳へ聞いての捨置れすと佐々木も義氣をふり起して才覚いとした事と見えませす 六 如何様左様の儀と思へど此電信が達せぬにまだ心配を致さふ行届きたる此通知 正 夫も貴殿が眞直母て毛頭後暗た

事あきと知事公初め懸官も篤と御承知の上なれば出納課よりの此電報も早く心配を
 除かんとの深き注意と相見えしました 六 如何も左様の事で御座らふイヤナニ花岡
 氏お聞の通りの次第なれば何卒悦び下されい 政 傍聴さる拙者まで此好都合
 の愉快千萬 綾 これで万端事ゆゑなく 松 こんお嬉しい事の御座りませぬ
 ト一同悦ぶ此處へ向ふより以前の雪雄早足ふ出来り直より入り 雪 親入御
 無事で御座りましたり警察署にて理由を述べ嫌疑も晴れて今全く青天白日の身とあ
 りました何卒御安心下さりませ ○ヤコリヤ此者は ト忠藏の側へよる 忠
 目に懸るも面目ない私し忠藏めて御座ります 雪 まこと其方にお貞が本夫重
 傷一弱りし此体は 六 幾心一命捨たるけあげさ誠一懲然お事を致した ト
 ホロリと思ひ入れ政急忠藏の方を見やりこなしあつて 政 六之進どの御父子に
 何と思召さる、か此忠藏が息あるうち警察官の出張をこひ検視のうへにて犯
 罪の自首をさせなば跡々にて其身の爲にも重疊ならむ 雪 此詞と聞き尤もと思
 ふこなしにて手負の側へ寄 雪 所詮深手で覺束おけれど幸ひ醫學を研究致せむ少
 しありとも苦痛をのがれ危急を救ふわが治療 ○お貞水をもつてまゐれ 貞 ハイ畏
 まりました ト門口の井戸へ手桶を持ち行き水を汲む此うち雪雄支度とする

政 かく何事も納れバ吉日と撰んで婚禮を執行ふでござらふが忠藏お貞が心配せし此
 二百圓の改めて解引手に進上いたせむお配置さあくお違ひ下され雪雄どのにも嫁
 もとりわけ申すは是あるお貞と忠の助が身の上の事故心したる忠藏の幾死を憐み生
 涯よきやうお世話をし此志しを忘れまいぞ 綾 仰せなくともお貞どのと忠之
 助どのの私しが此度お世話を致しませうといナア 忠 其お詞がこの世の土産
 イ、ヤ傷の重けれど急所をよければ治療のあらぬ事もあるまい氣をしつかりと持つ
 たがよい 忠 忠の禮那その氣体めにおいて下せへ積る悪事の其報いも疊のうへで
 死されるの勿体ねへほどな此身の幸福何の未練がありませものゝ 貞 夫でい
 か 忠 此世のお別れ トお貞忠之助忠藏の膝とりつき泣き入る 六 武
 士も及ばぬ丈夫のたましひ 政 適れ義氣も悪事のため 綾 消えてゆく身の春の
 雪 積るの歎きと孝貞節義 忠 最うたさらばで御座りませる ト忠藏合
 掌するお貞忠之助ワツと泣き出とを 政 ハテけあげなる壯者ぢやナア ト政
 幾の感心のかおし雪雄の忠藏を介抱する六之進綾子正三郎お松みあゝ怒へのこな
 しあつて寺の鐘ジャン／＼して引ばりの見え宜しく拍子幕

新形繪護膜 大尾



以後二年七月十八日御劄也

美之者

和田守高郎
美之者

御劄者

田口高郎
御劄者

